



平成19年度文部科学省「グローバルCOEプログラム」研究拠点形成費補助金
(京都大学 機関番号14301 拠点番号D-07)

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

平成21年度活動報告書

2010年5月



平成19年度文部科学省「グローバルCOEプログラム」研究拠点形成費補助金
(京都大学 機関番号14301 拠点番号D-07)

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

平成21年度活動報告書

2010年5月

研究拠点の名称

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

(京都大学 機関番号 14301 拠点番号 D-07)

研究拠点形成費

平成21年度 直接経費 104,070千円 間接経費 31,221千円

学内関連部局

教育学研究科（教育科学専攻、臨床教育学専攻）

高等教育研究開発推進センター（高等教育教授システム研究開発部門）

文学研究科（行動文化学専攻・心理学専修）

人間・環境学研究科（共生人間学専攻・社会行動論講座、認知科学講座、行動制御学講座）、

こころの未来研究センター

* 霊長類研究所（思考言語分野）

注）* は協力部局である

研究組織

ユニットA 「基礎過程：心が活きるとは？」

ユニットB 「システム：社会システムの設計」

ユニットC 「サポート：個人と関係のサポート」

ユニットD 「開発評価：ユニットの評価尺度開発」

構成メンバー

	職階		氏 名	所属ユニット	専門分野
人間・環境学研究科	教授	○	岡田敬司	A	教育人間学
	教授		小山静子	A	教育史学
	教授	○	杉万俊夫	B	社会心理学
	教授	○	齋木 潤	A	認知科学
	教授		松村道一	C	認知神経科学
	准教授		永田素彦	B	社会心理学
	講師		大倉得史	C	発達心理学
	助教		山本洋紀	A	視覚心理学
	助教		久代恵介	A	認知神経科学
文学研究科	教授	○	苧阪直行	A	知覚心理学
	教授	◎	藤田和生	A	比較認知科学
	教授	○	櫻井芳雄	A	認知神経科学
	准教授		板倉昭二	A	発達認知科学
	准教授		蘆田 宏	A	認知心理学
教育学研究科	教授	○	辻本雅史	A	教育史学
	教授	◎	鈴木晶子	D	教育哲学
	教授	○	山田洋子	C	生涯発達心理学
	教授		田中耕治	B	教育方法学
	教授	◎	子安増生	D	発達心理学
	教授	○	楠見 孝	B	認知心理学
	教授		岩井八郎	B	教育社会学
	教授		稲垣恭子	B	教育社会学
	教授		川崎良孝	B	図書館情報学
	教授		前平泰志	B	生涯教育学
	教授		高見 茂	B	教育行政学
	教授	◎	杉本 均	B	比較教育学
	教授		矢野智司	C	教育人間学
	教授		西平 直	A	教育人間学
	教授		桑原知子	C	心理臨床学
	教授		皆藤 章	C	臨床教育学
	教授	○	角野善宏	C	臨床心理実践学
	教授		松木邦裕	C	臨床心理実践学
	准教授		駒込 武	B	教育史学
	准教授		西岡加名恵	B	教育方法学
	准教授		齊藤 智	A	認知心理学
	准教授		渡邊洋子	B	生涯教育学
	准教授	○	佐藤卓己	B	メディア社会学
	准教授		金子 勉	B	教育行政学
	准教授	○	齋藤直子	C	教育人間学
	准教授		田中康裕	C	心理臨床学
	准教授		明和政子	C	比較認知発達科学
	准教授		大山泰宏	D	臨床教育学
	准教授		南部広孝	B	比較教育学
	准教授		高橋靖恵	C	臨床実践指導学
	准教授		山名淳	D	教育哲学
	助教		中池竜一	B	認知科学

教育学研究科	助教		石井英真	B	教育方法学
	助教		竹中菜苗	C	心理臨床学
	助教		高嶋雄介	C	心理臨床学
	助教		赤沢真世	B	教育方法学
	助教		井谷信彦	A	教育人間学
	助教		モイセス・キルク	D	教育心理学
	助教		浅田剛正	C	臨床実践指導学
	助教		井上嘉孝	C	臨床心理実践学
	助教		野口剛	B	教育社会学
	助教		吉田正純	B	生涯教育学
高等教育研究開発センター	教授	○	田中每実	D	人間形成論
	教授		大塚雄作	D	教育心理学
	教授	○	松下佳代	D	教育方法学
	准教授		溝上慎一	D	青年心理学
	准教授		デビッド・ダルスキー	D	社会心理学
	准教授		田口真奈	D	教育学
	特定准教授		酒井博之	D	音響心理学
	特定准教授		及川恵	D	教育心理学
	助教		河崎美保	D	教育心理学
	特定助教		石川裕之	D	比較教育学
	特定助教		半澤礼之	D	青年心理学
こころの未来研究センター	教授	○	吉川左紀子	A	認知心理学
	教授		船橋新太郎	A	認知神経科学
	教授		カール・ベッカー	D	倫理学、宗教学
	教授	◎	河合俊雄	C	心理臨床学
	教授		鎌田東二	A	宗教哲学、民俗学
	助教		内田由紀子	A	社会心理学
	助教		平石 界	A	認知心理学
	助教		森崎礼子	A	認知心理学
霊長類研究所	教授		松沢哲郎	A	比較認知科学
	准教授		友永雅己	A	比較認知科学
	准教授		佐藤 弥	A	認知心理学
	助教		林 美里	A	比較認知科学
	助教		足立幾磨	A	比較認知科学
	助教		伊村知子	A	比較認知科学
野生動物研究センター	准教授		田中正之	A	比較認知科学
グローバルCOE	COE助教		大塚結喜	A	認知心理学
	COE助教		ルプレヒト・マッティク	D	教育学
	COE助教		小野文生	D	教育哲学
	COE研究員		小島隆次	B	認知心理学
	COE研究員		廣瀬信之	A	実験心理学
	COE研究員		清水亜紀子	C	心理臨床学

所属・職階は平成22年3月末時点のものを示している。

◎はリーダー職、○はリーダー以外の事業推進担当者を示す。

目次

はじめに	1
拠点形成の目的	4
各ユニットの成果の概要	11
講演会、シンポジウム、ワークショップの開催記録	31
若手研究者養成プログラム及び研究開発コロキウム	63
修士論文及び博士論文	69
業績	77
資料	125
添付論文	別冊

ユニットA 「基礎過程：心が活きたとは？」

- Adachi, I., Chou, D. P., & Hampton, R. R. (2009). Thatcher effect in monkeys demonstrates conservation of face perception across primates. *Current Biology*, 19, 1-4.
- Hirose, N., & Osaka, N. (2010). Asymmetry in object substitution masking occurs relative to the direction of spatial attention shift. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 36, 25-37.
- Imura, T., & Tomonaga, M. (2009). Moving shadows contribute to the corridor illusion in a chimpanzee (*Pan troglodytes*). *Journal of Comparative Psychology*, 123, 280-286.
- Lingnau, A., Ashida, H., Wall, M. B., & Smith, A. T. (2009). Speed encoding in human visual cortex revealed by fMRI adaptation. *Journal of Vision*, 9(13):3, 1-14.
- Matsuzawa, T. (2009). Symbolic representation of number in chimpanzees. *Current Opinion in Neurobiology*, 19, 92-98.
- Okanda, A., & Itakura, S. (2010). When do children exhibit a "Yes" Bias? *Child Development*, 81, 568-580.
- Otsuka, Y., Osaka, N., Ikeda, T., & Osaka, M. (2009). Individual differences in the theory of mind and superior temporal sulcus. *Neuroscience Letters*, 463, 150-153.
- Saeki, E., & Saito, S. (2009). Verbal representation in task order control: An examination with transition and task cues in random task switching. *Memory & Cognition*, 37, 1040-1050.

- Sato, W., & Yoshikawa, S. (2010). Detection of emotional facial expressions and anti-expressions. *Visual Cognition*, 18, 369-388.
- Takahama, S., Miyauchi, S., & Saiki, J. (2010). Neural basis for dynamic updating of object representation in visual working memory. *NeuroImage*, 49, 3394-3403.
- Takahashi, S., & Sakurai, Y. (2009). Information in small neuronal ensemble activity in the hippocampal CA1 during delayed non-matching to sample performance in rats. *BMC Neuroscience*, 10, 115.
- Takimoto, A., Kuroshima, H., & Fujita, K. (2010). Capuchin monkeys (*Cebus apella*) are sensitive to others' reward: an experimental analysis of food-choice for conspecifics. *Animal Cognition*, 13, 249-261.
- Tanaka, M., & Yamamoto, S. (2009). Token transfer between mother and offspring chimpanzees (*Pan troglodytes*): mother-offspring interaction in a competitive situation. *Animal Cognition*, 12, S19-S26.
- 辻本雅史 (2010). 「教育のメディア史」試論—近世の「文字社会」と出版文化—. 辻本雅史 (編著) 知の伝達メディアの歴史研究—教育史像の再構築— 思文閣出版 pp. 3-25.
- Uchida, Y., Townsend, S. S. M., Markus, H. R., & Bergsieker, H. B. (2009). Emotions as within or between people? Cultural variation in lay theories of emotion expression and inference. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 1427-1439.
- Watanabe, Y., Takeda, K., & Funahashi, S. (2009). Population vector analysis of primate mediodorsal thalamic activity during oculomotor delayed-response performance. *Cerebral Cortex* June, 19, 1313-1321.

ユニットB 「システム：社会システムの設計」

- 金子勉 (2009). 大学論の原点—フンボルト理念の再検討—. 教育学研究, 76, 38-49.
- 楠見孝・中本敬子・子安増生 (2010). 痛みの比喩表現の身体感覚と認知の構造. 心理学研究, 80, 467-475.
- 前平泰志・ガストン・ピノー (2010). ガストン・ピノーを語る：人と仕事. ライフヒストリーと生涯学習. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 [講演記録], 9, 177-192.
- 西岡加名恵 (2009). パフォーマンス課題の作り方と活かし方—「逆向き設計」論の魅力と本書の読み方. 西岡加名恵・田中耕治(編), 『「活用する力」を育てる授業と評価 中学校—パフォーマンス課題とルーブリックの提案』. 学事出版. pp. 8-18.
- 佐藤卓巳 (2009). 一、歴史学ゼミナールの誕生—歴史学はどのように生まれたのか. 『ヒューマニティーズ歴史学』. 岩波書店. pp. 1-26.
- 杉万俊夫 (2009). 反対贈与としての「リーダーシップ」：ある過疎地域の活性化運動から. 組織科学, 43, 16-26.

Tanaka, K. (translated by Niels, S.) (2009). Academic achievement survey and educational assessment research. *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, 4, 79-89.

吉田正純 (2010). EU 成人教育グルントヴィ計画の理念と実際—社会的インクルージョン、異文化間対話、アクティブ・シティズンシップ—. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 9, 59-71.

ユニットC 「サポート：個人と関係のサポート」

Hagura, N., Oouchida, Y., Aramaki, Y., Okada, T., Matsumura, M., Sadato, N., & Naito, E. (2009). Visuokinesthetic perception of hand movement is mediated by cerebro-cerebellar interaction between the left cerebellum and right parietal cortex. *Cerebral Cortex January*, 19, 176-186.

Kawai, T. (2009). Union and separation in the therapy of pervasive developmental disorders and ADHD. *Journal of Analytical Psychology*, 54, 659-675.

松木邦裕 (2010). 転移／逆転移—その概念の現在. 臨床心理学, 10, 176 - 180.

Myowa-Yamakoshi, M., & Tomonaga, M. (2009). Evolutionary origins of social communication. In de Haan, M., & Gunnar, M. R. (Eds.), *Handbook of developmental social neuroscience*, pp. 207-221. New York: Guilford press.

やまだようこ (2010). 時間の流れは不可逆的か？—ビジュアル・ナラティブ「人生のイメージ地図」にみる, 前進する, 循環する, 居るイメージ. 質的心理学研究, 9, 43-65.

ユニットD 「開発評価：ユニットの評価尺度開発」

Becker, C. (2010). Orientation (pp3-6). Introduction (pp7-8). Chapter 1 Sufficient food supply (pp9-14). Chapter 2 Sustainable energy (pp15-20). In Becker, C., Japan's wisdom-How it can save the future. (ジャパニーズ・ウィズダム—日本の知恵が未来を救う—) 英宝社. pp. 3-20.

Lewis, C., Koyasu, M., Oh, S., Ogawa, A., Short, B., & Huang, Z. (2009). Culture, executive function, and Social understanding. In Lewis, C., & Carpendale, J. I. M. (Eds.), Social interaction and the development of executive function. *New Directions in Child and Adolescent Development*, 123, 69-85.

山名淳 (2009). 生活改革のひび割れた構成物としての新教育—田園都市ヘレラウの諸教育施設をめぐる軋轢問題について. 矢野智司・今井康雄・秋田喜代美・佐藤学・広田照幸 (編), 『変貌する教育学』. 世織書房. pp. 177-214.

はじめに

京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」（拠点番号D-07）は、平成19年度文部科学省研究拠点形成費等補助金「グローバルCOEプログラム」に採択され、平成19年6月より活動を開始し、現在4年目を迎えている。本報告書は、3年目に当たる平成21年度の活動内容を報告するものである。

平成21年度の重要な出来事として、2009年6月30日にグローバルCOEプログラム委員会による中間評価を受けたことがあげられる。その評価結果は同年11月30日に公表され、本拠点は、「現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される」という高い評価を受けることができた。また、その「コメント」において、「大学の将来構想と組織的な支援については、総長を中心とした全学的なマネジメント体制が充実しており、大学の将来構想の下で、拠点に対しての十分な支援がなされていると評価できる。拠点形成全体については、世界的拠点として順調に事業を推進しており、評価できる。人材育成面については、課程博士の授与数を高めるために集団指導体制を取入れており、タコつぼ型教育に陥らないよう、「研究開発コロキウム」、「EXラボ」を設けて視野が広がるように工夫しており、評価できる。また、大学院学生のインセンティブを高める努力が、大学院学生の国際学会の実績、研究実績の伸びとなって現れていることも高く評価できる」という講評を得ている。もちろん、心理学と教育学の連携融合の観点からの世界的拠点形成はまだ十分とは言えない状態であり、今後の課題は多く、申請書に掲げた目標への努力を一層重ねていく必要はあるが、中間評価における高い評価を糧として、残る2年間の事業を継続、発展させていきたい。

研究面の活動では国際的研究拠点の形成を目標とし、A・B・C・Dの4つのユニットごと、およびユニットが適宜連携して行う研究が進展している。その成果公開の一つの姿として、『心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学』（ナカニシヤ出版）を編集し、2009年6月に刊行した。

国際拠点形成の活動として、米ミシガン大学、英ランカスター大学、中国中央教育科学研究所、北京師範大学、独ベルリン自由大学、英ロンドン大学教育研究所などの世界的研究機関との間に築いてきた学術交流協定に基づく教育・研究活動をさらに展開し、京都大学を世界中の心理学・教育学の研究者が研究

の発展を求めて集まる拠点としている。

平成 21 年度に本拠点が主催または共催して開催した行事は、講演会 17 回、シンポジウム 11 回、ワークショップ 5 回である。国際的拠点の形成という点で重要な講演会、シンポジウム、ワークショップを開催順にあげると、次のようなものを実施した。

- 第 4 回グローバル COE 共催国際シンポジウム「ロンドン・プロジェクトー医療と心理支援の多文化ナラティブ方法の探求」(ユニット C : 2009 年 6 月 29 日～7 月 3 日) 於英国ロンドン大学
- 第 7 回グローバル COE 主催ワークショップ「感情学 affectology の展望」(ユニット A : 2009 年 7 月 11 日)
- 第 4 回グローバル COE 主催国際シンポジウム「Kyoto-Lancaster Joint International Symposium on Psychological Science: New Directions of Memory Research」(ユニット A : 2009 年 7 月 24 日)
- 第 5 回グローバル COE 共催国際シンポジウム「日韓の教育改革の行方」(ユニット B : 2009 年 7 月 31 日)
- 第 18 回グローバル COE 主催講演会「Positive orientation and optimal psychological functioning」(ユニット A・B・D : 2009 年 9 月 7 日)
- 第 5 回グローバル COE 主催国際シンポジウム「The third International Symposium between the Institute of Education, University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University. Happiness and Personal Growth: Dialogue between philosophy, psychology, and comparative education」(ユニット C : 2009 年 9 月 21 日～22) 於英国ロンドン大学教育研究所
- 第 24 回グローバル COE 共催講演会「学士課程における科学教育の未来」(ユニット D : 2009 年 9 月 25 日)
- 第 3 回グローバル COE 主催シンポジウム「子どものこころの発達と教育 : 最新の研究成果に学ぶ」(慶應義塾大学グローバル COE 共催 : 2010 年 1 月 9 日)
- 第 6 回グローバル COE 主催国際シンポジウム「日韓メディア研究大学院生セミナー」(ユニット B : 2010 年 2 月 6 日)
- 第 7 回グローバル COE 主催国際シンポジウム「Happiness, Emotion, Language: Toward an International Comparative Study」(ユニット D : 2010 年 2 月 9 日～2 月 10 日) 於ドイツ・ベルリン自由大学

人材育成面の活動については、平成21年度も次の4つの人材養成プログラムを公募して実施した。

- 20 代、30 代助教を対象とする「若手教員支援研究費」を 10 人に助成。
- 博士課程大学院生対象の「海外留学資金」を 4 人に助成。
- 博士課程大学院生対象の「大学院養成プログラム研究費」を 22 人に助成。
- 博士課程大学院生が実施する課題探究型授業「研究開発コロキウム」経費を 10 人に助成。

なお、21 年度も院生対象説明会を 2 回（2009 年 4 月および 2010 年 2 月）開催し、上記の公募の趣旨と内容の周知に努めた。

外国人講師が実施する外国語による授業科目と「国際教育研究フロンティア」は、「国際教育研究フロンティア A」（担当はニュージーランド・オークランド大学准教授）、「国際教育研究フロンティア B」（担当は韓国・ソウル大学校教授）、「国際教育研究フロンティア C」（担当は英国・ロンドン大学教育研究所教授）、「国際教育研究フロンティア D」（担当は中国・北京師範大学准教授）、「国際教育研究フロンティア E I」および「国際教育研究フロンティア E II」（担当は本拠点ドイツ人助教）をそれぞれ開講した。

また、大学院修士課程 1 年生を主要対象に実施する「E X ラボ」(Exchanging Laboratory Program) については、21 年度は下記の 5 プログラムを実施し、参加者は 37 人であった。

- 「大学院生のための教育実践講座 2009」（高等教育研究開発推進センター、8 月）。
- 「共生する地域社会を目指して」（人間・環境学研究科、9 月）。
- 「記憶実験の体験ツアー」（文学研究科、9 月）。
- 「認知機能研究室見学」（こころの未来研究センター、9 月）。
- 「鈴木晶子研究室見学—実験教育哲学—」（教育学研究科、9 月）。

修士課程 1 年生は在籍者 61 人であり、その約 52.5%にあたる 32 人が E X ラボに参加した。なお、学生が参加に必要な経費は、拠点で負担している。

最後になるが、本拠点に参画し、本報告書の作成にご協力いただいたすべての方に厚く御礼申し上げたい。

2010年5月
拠点リーダー・子安 増生

拠点形成の目的

20 世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痼というべき矛盾を克服することができず、21 世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレベルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定して考えても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問題を投げかけてきた。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の心が活きるものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。

人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身は何事かをなすことができるという「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得る。さらに、この2つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえた「達成感」というものが得られる。そこに、同時に「幸福感」というものを感じることもできよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められており、本プログラムはそれに真正面から応えようとするものである。

拠点形成計画の概要

本プログラムは、21 世紀 COE「心の働きの総合的研究教育拠点」（平成 14 年度～18 年度）の多大な成果を基礎として、京都大学の心理学および教育学の研究者が有機的に連携しながら、国際的に活躍する有為な人材育成のための新たな拠点を形成するものである。具体的には、「心が活きる教育」とはどのようなものを解明し、それをどのように理解し、あるいは実践していくかについて、教育学研究科（教育科学専攻、臨床教育学専攻）、高等教育研究開発推進センター（第一部門）、文学研究科（行動文化学専攻）、人間・環境学研究科（共生人間学専攻）、および、平成 19 年度に設置される「こころの未来研究センター」に所属する心理学および教育学の研究者が参加して研究拠点を形成し、拠点リーダーが全体を統括しながら、(A)「心が活きる」とはどういうことか、逆に「心が生きていない」状態とはどのようなものを研究する基礎過程、(B)「心が活きる」ために必要な制度設計と、それを社会に説明し実際に運用する仕組

みについて研究するシステム、(C)「心が活きる」ために有効な心理的サポートや教育的かかわりのあり方について研究ならびに実践を行うサポート、(D)以上の各ユニットが提案する理論・実践を「心が活きる」という観点から評価し、同時に国際共同研究として「幸福感の国際比較研究」を実施する開発評価、という4つの研究ユニットを中心に高度な水準のユニークな研究を進めていく。人材育成の面では、心が活きる教育ということについて心理学・教育学の観点から深く考えることのできる高度の専門性と幅広い視野を持ち、外国語による論文の投稿や国際学会での発表など、国際的に情報発信ができる人材を育成するために、心理学・教育学の大学院教育を拠点全体で担う教育体制を一層整備・充実すると共に、国際拠点形成の活動として、米ミシガン大学、英ランカスター大学、中国中央教育科学研究所、北京師範大学、独ベルリン自由大学、英ロンドン大学教育研究所などの世界的研究機関との間に築いてきた学術交流協定に基づく教育・研究活動をさらに展開し、京都大学を世界中の心理学・教育学の研究者が研究の発展を求めて集まる拠点としていく。また、広い視野から深く考え、心と教育に関する諸問題の解明・理解・実践に貢献しうる人材の進路が、大学等の研究機関のほか、官庁・企業等にも広がるよう、その支援体制を一層整備する。

博士課程学生を含む若手研究者のテニュア取得にいたるまでの支援としては、大学院生に対する競争的人材育成経費（海外留学資金、院生養成プログラム研究費、研究開発コロキウム）の支援、公募によるポスドク研究員（4人）の採用、国際的公募による助教の採用（3人）、および、テニュア取得以前、あるいは、テニュア取得からまだ年数の浅い30歳代の若手教員に対する競争的研究費の支援などを行う。

以上のような活動を通じて、心理学と教育学が交差する新たな教育・研究領域の創成をはかり、京都大学の内部は言うにおよばず、学術全体における人文科学の発展に貢献し、社会の改革や改良に資する学術的情報を提供し、自らも有効かつ効果的な教育実践を行っていくものである。

心が活きる教育とは

20世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痼というべき矛盾を克服することができず、21世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレベルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定しても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問

題を投げかけてきた。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の「心が活きる」ものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。

心の問題は、さまざまなフィールドで取り上げられるべきものであるが、中でも教育というフィールドは最も重要なものの代表格である。ただし、高度に情報化された現代社会においては、教育が学校教育という狭いフィールドに限定されるのではなく、時間的空間的に拡張された、人間の生きる包括的な文脈での生涯学習あるいは生涯発達の視点が不可欠である。

人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身が何事かをなすことができるという「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得る。さらに、この2つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえたという「達成感」が得られる。そこに、同時に「幸福感」というものを感じることでもできよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。

心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められているのである。また、本拠点で育成される人材像として、大学等の研究機関で活躍できる者は言うまでもなく、少子高齢化社会において社会の活性化をはかるために期待されている新たな教育産業の創生に貢献できるような、ユニークな人材をも視野に入れている。

Purposes of Forming Our Project Basis

In the 20th century, despite the rapid progress that was achieved in science, technology and industry, conflicts relating to poverty, crime, terrorism, local conflicts, and wars, and environmental disruption became firmly entrenched as the major problems facing human beings. Unsolved tasks which are derived from the limitations of modern societies have been carried over to the societies of the 21st century at various levels, involving individuals, societies and the international community as a whole. In school settings, those who are involved in education, including parents and teachers have been suffering from such difficult challenges as bullying, violence and refusal of children to attend schools. These issues raise a serious question concerning the state of the human mind. Ideally, the human mind should be revitalized through social systems and organizations produced by human beings, but in reality, these social systems and organizations have sometimes tormented human beings and enfeebled our minds.

Through education and through the acquisitions of knowledge and skills, human beings obtain a sense of competence, and through connection with nature and society, we obtain a vital sense of life, or the feeling that we are living on earth. Further, when we direct these two senses to the same direction to the fullest amount, we obtain a sense of accomplishment that we have achieved something and in this, we can also feel a sense of happiness. Conversely, if a part of this interconnectedness does not function properly, various problems occur. In contemporary society, in which problems concerning the mind and education are prominent, it is urgently needed to envision an international research base that explores revitalizing education for dynamic hearts and minds from these perspectives and to foster researchers who are capable of addressing these challenging topics. Our project will challenge these goals.

An Outline of the Formation and Activities Plan for Our Project Basis

Based upon the results of the program, "Center for Excellence for Psychological Studies," the 21st Century COE program of 2002-2006, our Global COE project center is to be established through dynamic collaboration between researchers in psychology and educational studies for the purpose of

developing talented researchers who can demonstrate their achievements on a global scale. More specifically, in order to conduct research on what constitutes revitalizing education for dynamic hearts and minds and address the issue of how to advance practice in relevant fields, the Center will involve the participation of researchers in psychology and educational studies from the following departments: the Graduate School of Education (Departments of Education and Clinical Studies of Education), Institute for the Promotion of Excellence in Higher Education (Section I), the Graduate School of Letters (Department of Psychology), Graduate School of Human and Integrated Studies (Department of Human Coexistence), and the Kokoro Research Center, a center scheduled to be established in 2007. In a coordinated manner, we will promote high-quality research, centering on the following four research units: (A) Basic Processes Unit, which conducts research on the vital state of the mind, and conversely, the non-vital state of the mind; (B) Systems Unit, which conducts research into the design of the system necessary for revitalizing education for dynamic hearts and minds, and the scheme through which it is explained and applied to society; (C) Support Unit, which conducts research on the psychological support and educational commitments that are effective for revitalizing education for dynamic hearts and minds, and that puts them into practice; and (D) Development and Evaluation Unit, which conducts evaluation on the theory and practice proposed by each unit, and which has the task of implementing a project on “Cross-Cultural Research on the Sense of Happiness.”

We aim to develop researchers in psychology and educational studies who can think deeply, with high-level expertise and a broad perspective, about revitalizing education for dynamic hearts and minds; and who can publish in international, high quality academic journals and present papers at international conferences. To accomplish this task, an educational system will be developed that will enable graduate education programs in psychology and educational studies to be provided by the Center as a whole. At the same time the Center will reinforce its position as an international center for research and education through official academic exchange agreements with high-level research institutions abroad, including the University of Michigan, Lancaster University, the China National Institute for Educational Research, Beijing Normal University, the Free University of Berlin, and the Institute of Education at London University. The aim is to

create at Kyoto University a meeting place for scholars in psychology and educational studies from all over the world.

The Center will also promote further support system for the career development of researchers, attracting especially those who can think deeply and broadly, who can contribute to the analysis and understanding of problems concerning revitalizing education for dynamic hearts and minds, and who can put solutions into practice, so that their career paths can be extended not only to universities and other research institutions but also to governmental organizations and business corporations.

The Center will encourage young researchers including doctoral students to get tenure through the following measures: financial support for graduate students through a competitive research fund; the employment of 4 post-doctoral researchers recruited through public advertisement; the employment of 3 assistant professors by world-wide general advertisement, and we will also offer research funding for young professors in their thirties who have not yet or only recently received tenure.

Through these activities the Center aims to create a new research and education field in which psychology and educational studies are integrated. Through this integration, it is hoped that (a) significant developments in the humanities discipline will be achieved within Kyoto University and in academia as a whole; (b) scholarly information and understanding will be promoted, which in turn will promote social reform and innovation; and (c) wider engagement in effective and fruitful educational practice will be facilitated.

What is Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds?

In the 20th century, despite the rapid progress that was achieved in science, technology and industry, conflicts relating to poverty, crime, terrorism, local conflicts and wars, and environmental disruption became firmly entrenched as the major problems facing human beings. Unsolved tasks which are derived from the limitations of modern societies have been carried over to the societies of the 21st century at various levels, involving individuals, societies and the international community as a whole. In school settings, those who are involved in education, including parents and teachers have been suffering from such difficult challenges as bullying, violence and refusal of children to attend schools. These issues raise

serious questions concerning the state of the human mind. Ideally, the human mind should be revitalized through social systems and organizations produced by human beings, but in reality, these social systems and organizations have instead sometimes tormented human beings and enfeebled our minds.

The problems of minds should be explored by various disciplines; we believe that education should be the area that is most essential to the study of the state of the human mind. However, in a contemporary, highly information-oriented society, it is critical to remember that education should not represent a limited concept such as schooling, but rather education should be understood in a larger, more comprehensive context. This perspective should incorporate the perspectives of lifelong learning and lifelong development in the comprehensive context of how human beings live.

Through education and through the acquisition of knowledge and skills, human beings obtain a sense of competence, and through connection with nature and society, we obtain a vital sense of life, or the feeling that we are living on earth. Further, when we direct these two senses in the same direction to the fullest amount, we obtain a sense of achievement and in this, we can also feel a sense of happiness. Conversely, if a part of this interconnectedness does not function properly, various problems may occur.

Recently, the problem of minds and education has been a heated topic and, therefore, it is from this framework that we have formed the basis for the Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds project, incorporating international perspectives to foster human resources to solve the problems of minds and education. In addition, we plan to foster not only the human resources that will play an active role at academic institutions, but also the diverse personnel who will contribute to other educational industries and will be invaluable in activating those education fields vital to activating the aging society.

各ユニットの成果の概要

平成 21 年度の成果 (Unit A)

20 年度に引き続き、Unit A では、計画課題と 6 件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。

計画課題「幸福感に関する基礎的研究－幸福感の科学をめざして」(代表：藤田和生)

本研究計画においては、感情の総合的研究である「感情科学 Affective Science」を一層発展させ、「心が活きる」とはどういうことか、有能感、達成感、生命感から構成される幸福感を達成するためにはどのような条件が必要なのか、これらを明らかにするための基礎資料を、以下の 5 サブプロジェクトを推進することにより収集した。(○印は責任者、*は協力者)

1) 幸福感の発生 (○藤田、板倉)

幸福感を達成するための大きなカギの 1 つである感情の進化と発達を明らかにするための基礎的研究を継続した。フサオマキザルが、同種他個体の感情の原因となる物体を推理して、それに基づき適切に行動を調節していることを実験場面で示した。1 頭が他方に食物を分配できる場面で、他者により報酬を与えるためには、自身の報酬が確保されていることが必要だが、ごく希には自身の報酬を犠牲にする場合もあることを示した。3、4、5 歳児を対象に、「他者のために待つ」という社会的幸福感の発達を検討した。目前の報酬を一定時間待てば他者が大きな報酬を受けるという課題で、3 歳児は待つという宣言も実際に待つこともできなかった。4 歳児は宣言はできたが、実際に待つことはできなかった。5 歳児は、待つという宣言通り、実際に他者のために待つことができた。

2) 達成感に関する基礎的研究 (○苧阪、櫻井、蘆田、齊藤)

本課題では、主として記憶と知覚の 2 つの側面からその神経基盤を、認知科学的、神経科学的に分析した。まず、記憶については、ユーモア理解の 2 段階説を提案し、言語や画像におけるワーキングメモリの役割が重要であること、さらに笑いが線条体などの社会脳の報酬系を背景にもつ達成感のあらわれであることを明らかにした。また、自己と他者の認知の神経基盤が同じ社会脳領域 (DMPFC) で作動していることを明らかにした。知覚については物体置き換えマスキングの方法が視覚的な意識や注意の検討に有効であることを明らかにした。これは、美しさなどの認識や認知的達成ともかかわるものと考えられる。

3) 生命観に関する基礎的研究 (○吉川、楠見、桑原、岡田、平石、内田、小島)

複雑な感情のコミュニケーションにおける、音声と表情の感情伝達機能に関する検討を行った。「ありがとう」「すみません」は字義通りのメッセージは感謝、謝罪だが、言い方や

表情によって「有難迷惑だ」「私は悪くない」といった、ことばとは裏腹のメッセージを伝えることもできる。大学生の友人ペアと未知のペアを対象に、感謝、非難、謝罪、祝福等の場面における 2 者間の短い発話を収録して、表情と音声のそれぞれが伝える感情メッセージの認知実験を行ったところ、言葉通りのメッセージは音声で伝わりやすいこと、ことばとは裏腹の感情は、表情、音声のいずれでも伝わるが友人のほうがより正確にそうした感情の認識が可能であることが示された。

4) 有能感に関する基礎的研究 (○齋木、船橋、角野、山本)

注意機能、ワーキングメモリ機能の基礎研究では、視覚性ワーキングメモリの脳内表現に関する機能的脳イメージング実験を進めた。視覚性ワーキングメモリの容量に比例した活動を示す頭頂間溝領域がトポグラフィックな表象を持つことを明らかにし、現在、記憶がトポグラフィックに表象されているかを解析している。注意機能の個人差に関して、視覚的注意の諸課題と遺伝子多型の関連を解析し、アセチルコリンのニコチン受容体に関連した遺伝子多型と空間手掛かり課題、シーン認識課題の成績との間に有意な関連を見出した。行動データのより詳細な分析、脳活動データの取得により遺伝子タイプと脳活動、行動の連関をより詳細に検討する予定である。

5) 計画研究「幸福感の文化史・教育史」(○辻本、小山)

辻本は、4月にフランス・パリ第7大学での国際シンポジウム「近世日本における学びの文化」において近世日本の文化史と教育史に関わる研究発表を行った。その成果は英文の論文集として 2010 年度中に刊行予定である。また NHK ラジオ放送で、『教育を「江戸」から考える一学び・身体・メディアー』題する 11 回の講座を担当し、そのテキストを出版して江戸儒学と教育文化について論じた。『知の伝達メディアの歴史研究』を辻本が編集し、それに小山はメディアの中の女子教育について寄稿し、また論文「女性教員たちが集うということ」と題する論文を著し、その関係論文集が現在印刷中である。

公募課題 1 (継続): 動物観と幸福感一日独におけるヒトと動物の関係の分析を通じて (○藤田、鈴木)

宗教的・文化的背景を著しく異にするが、自然への愛着という面では共通した傾向を示す日独において、動物とヒトとの関わり方と幸福感の関連性を探る試みであり、ベルリン自由大学との共同研究である。20 年度に引き続き、21 年度もベルリンと京都において、イヌの行動調査をおこなうとともに、調査に参加したイヌの飼い主と同じ質問紙調査を実施した。予備的分析によれば、日本ではイヌを家族と見なすことが多いのに対し、ドイツではコンパニオンと見なされることが多い。ある程度、日本のイヌの方が甘やかされ、放任されているようである。これに呼応するように、解決不能な問題場面にさらされたとき、ド

イヌのイヌは比較的早く飼い主や実験者に援助をあおぐのに対し、日本のイヌは最後まで自分で解決を試みることが多かった。他方、指さし理解では大きな差は見られていない。資料はまだ十分ではないので、本年度も同様の研究を継続する予定である。

公募課題 2 (継続): 知覚、認知、行為に対する文化の影響: 実験心理学的アプローチ (○齋木、吉川、内田、*Kitayama、*Meyer、*Rensink、*Leaman、*Miyamoto、*Masuda)

ブリティッシュコロンビア大学の Rensink 教授との共同研究を進めた。我々は、視覚探索課題において、東アジア文化圏の協力者と欧米文化圏の協力者の間に探索様式に有意な差異があることを見出しているが、この違いを「注意の解像度」の違いとする仮説を検証する文化比較実験を実施した。これと並行して、カナダでの生活期間が東アジア系の協力者の視覚探索の様式に与える影響を検討し、カナダでの生活期間が長くなると視覚探索様式が東アジア的なものから欧米的なものに変動している傾向があることが示されている。

公募課題 3 (継続): ワーキングメモリと注意に及ぼす情動脳の影響 (○芋阪、大塚、廣瀬)
本研究では、ワーキングメモリと情動脳の間関係を検討するために、ポジティブな情動脳として想定されている大脳基底核を含む辺縁系が笑いなどの幸福感とどのように係わるかを検討した。その結果、ユーモアなどを理解して笑いが発生するにはワーキングメモリが必要不可欠であることがわかった。機能的磁気共鳴画像法(fMRI)によって観察した結果、前運動野、側坐核などのドーパミン報酬系が笑いとかわる可能性が示された。

公募課題 4 (継続): Collaborative executive control に関する探索的研究 (○齊藤、*Towse, J. N., *Towse, A.)

本研究では、複数の個人が協同して認知制御を試みる collaborative executive control の性質について検討を行った。乱数生成課題を、個人、あるいはペアに求め、ペアには、協同して乱数を生成するか、または、相手を見捨てて自己生成の系列を乱数とするように教示した。生成された数字系列のランダムさを、種々の指標によって評価したところ、RNG という指標では、相手を見捨てた方が協同するよりも、乱数に近い反応が見られる一方、Immediate Repetition などの指標では、無視を試みても相手の反応に影響を受けていることが明らかになり、ステレオタイプ反応の抑制に他者の影響が認められた。

公募課題 5 (新規): 比較認知発達神経科学国際シンポジウム 2009 の開催 (○板倉、藤田、友永、明和、林、*開一夫)

"Frontiers of comparative cognitive developmental neuroscience 2009"

昨年に引き続き、「比較認知発達神経科学」をテーマとした講演会及びシンポジウムを開催した (一部、科学研究費基盤研究(S)「意識・内省・読心—認知的メタプロセスの発生と機

能」研究代表者・藤田和生の補助を受けた)。講演会は、京都大学文学研究科において2名の講演者を招いて開催された。学内外から約40名の参加者があり、テーマにそって活発な議論が行われた。シンポジウムは、京都大学霊長類研究所共同利用研究会との共催で、京都大学霊長類研究所にて、海外から5名の参加者があり、18名の口頭発表者と22名のポスター発表者が極めて興味深い発表を行った。非常に充実した内容で、討論も活発で、本領域の最新の情報交換ができた。詳細は、シンポジウムおよび講演会の報告を参照のこと。

公募課題6(新規): 東アジア儒教の生命観に関する思想史研究(○辻本、*ニルス・ファン・ステーンパール、*塩原佳典、*渕上皓一郎、*林子博)

9月25-26日に、台湾大学主催の国際シンポジウム(台湾、中国、アメリカ、日本)「東アジアにおける日本儒学」に大学院学生4名(ニルス・ファン・ステーンパール、塩原佳典、渕上皓一郎、林子博)を辻本が帯同し、それぞれ東アジア儒教の思想文化に関する研究発表を行った。その成果論文集(中国語)は台湾大学出版中心で刊行予定。続いて同28日、台湾台南市の孔子廟で夜明け前に行われる釈奠(孔子降霊の儒教祭礼)を参観し、今もなお古式を残して継続している中国教育文化の集約的儀礼の現場を体験し、儒教文化の生命観に関する資料を確認できた。

平成 21 年度の成果 (Unit B)

平成 21 年度、Unit B では、5 件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。(敬称略)

(公募課題 1)「近代教育のオルタナティブ・システムに関する国際比較研究」

代表者：杉本均 (教育学研究科)

分担者：辻本雅史、西平直、南部広孝、明和政子(教育学研究科)

近代学校教育システムの普及と発展は、果たして子どもたちの幸福感の増進に貢献しているのだろうか。開発教育学において追及される、教育の発展指標、就学率、進学率、修了率、識字率、クラスサイズ、教員給与、各種学校インフラにおいてはもちろん、さらには近年教育現場や社会的・行政的な場面での関心が高まる、学力や実践力、教育の質といった教育的アウトプットの指標においてさえも、子どもたちの幸福感や充実感の増進といった側面は主要な直接的な目標としては反映されているとは言い難い。

本研究は、こうした近代学校教育システムの価値観がドミナントに支配する社会を離れて、それ以外の社会独自の伝統的教育体系、宗教的教育体系、教育理念体系といったオルタナティブな教育体系が、近代システムと比較可能なレベルで社会に根付いている社会を取り上げることによって、子どもたちの幸福感を支える複数の教育体系の力関係をより相対的にとらえ、さらにその変化を時系列的に、あるいは国際比較的に調査することによって、多面的な幸福感との関係を明らかにすることを試みた。

今年度は昨年に引き続き、チベット仏教の価値体系を基本に「国民総幸福(Gross National Happiness)」を提唱しているブータン王国について、日本との比較の視点からフィールド調査を行った。

9 月に行った調査では、首都ティンプー(Thimphu)とパロ(Paro)、西部のハ(Haa)を訪問した。西部のハではブータン最初の高校といわれるユーゲンドルジ高校(Ugyen Dorji Higher School)を訪問し、教員・生徒へのインタビューと 1 クラスにおいて質問紙調査を行った。ティンプーではブータン研究センター(Centre for Bhutan Studies)では Dorji Penjore 氏、国立伝統技芸院(National Institution for Zorig Chuzon)、国家委員会(Bhutan National Council)では Dorji Gartseng 氏と面談した。パロではパロ・シャリ高校(Shari Higher School)を訪問し、教員・生徒へのインタビューと 2 クラスにおいて質問紙調査を行ったほか、パロ教育カレッジ(Teachers Training College)を訪問し、関係者からインタビュー、資料収集を行った。昨年度の地域的・国際的な幸福感の比較に加えて、本年度は、10 年前に行った生徒の価値観調査項目を再び加え、民主化前と後の 10 年間の生徒の意識の変化を検出することを目的として現在データ分析処理中である。

(公募課題 2)「e-learning と学習者間インタラクションを通じた高次リテラシーの育成」

代表者：楠見孝（教育学研究科）

分担者：大塚、田口、Moises Kirk de Carvalho Filho、中池、小島

本課題では、e-learningと学習者間インタラクションを通じた高次リテラシーの育成について、その認知的基盤と教授手法について検討を行うために3つのプロジェクトを進めた。第1に、心理学リテラシーの育成する専門科目教育心理学課題演習の授業において、VRコミュニケーションシステム3D-IESを用いて、3次元仮想空間心理学実験室によるプロジェクトベース学習と、e-learningシステムmoodleを用いて、論文や発表資料の共有や学生による相互コメントによって学習者間インタラクション活動を促進した。第2に、コンピュータマイクロワールドの題材の一つとして開発したWeb-based教育用プロダクションシステムについて、その性能と実用性を確認するための評価実験を行った。大学学部生を対象とする認知科学の授業の中で、遠隔地にあるプロダクションシステムサーバーに40名程度が一度にアクセスした場合でも、問題無く利用できることを確認した。第3に、VR空間による英語・独語の前置詞用CALL教材について、今年度は「日常的で具体的な場面における前置詞学習」という観点から、教材の開発・研究を行った。個々の前置詞学習に最適な日常場面の選定調査を行い、その結果に基づいて個々の場面を3DCG化する際のデザインを検討した。

（公募課題3）「伝統的祭りによる大都市中心部のコミュニティ活性化」

代表者：杉万俊夫（人間・環境学研究科）

分担者：日比野愛子（人間・環境学研究科）

伝統は、静かに継承されるものではない。能動的な伝統の再構築があつてこそ、はじめて「昔からの伝統」は継承される。伝統の再構築は、変化するコミュニティの物理的・経済的構造、そして変化する生活様式に対する、伝統の動的適応のプロセスである。本研究は、鎌倉時代以来の伝統を受け継ぐ博多祇園山笠（福岡市）を対象にして、その大量の人員動員力はどこから来るのか、福岡市の人的ネットワークをいかに活性化しているのかを探りながら、山笠の能動的継承プロセスを明らかにし、都市コミュニティ活性化のヒントにすることを目的とした。

祇園山笠の7つの流れ（一つの流れは、1トンもの山を担ぐ数百人から成る）の一つ、土居流れを対象に、流れを構成する地元10町の全参加者に対してアンケート調査を実施した。その結果、①子どもの頃から長年参加している高齢の人、②参加しだして10年程度の若い人、③地元以外から参加している中年の人、という3グループによって、山笠に感じる魅力が異なることを見出した。また、2週間にわたる現場調査を通じて、祇園山笠の大きな吸引力の一つは、一歩間違えば大ケガ・死亡事故に至るような山を担ぎ、一見封建的にも見える組織体制を堅持することによって、現代社会が失いつつある基本的区別（男女の区別、年齢的区別、地元住民とそれ以外の区別など）を取り戻す「原点再確認」の機能にあることを考察した。

(公募課題4)「パブリック・ディプロマシーのためのメディア教育研究」

代表者；佐藤卓己（教育学研究科）

分担者；赤上裕幸、長崎励朗、松永智子、白戸健一郎(いずれも教育学研究科、大学院学生)

本課題では、日本のパブリック・ディプロマシーに資するメディア研究の構築をめざしている。まず、代表者と大学院生を主要メンバーとした「メディア文化政策研究会」を組織して、研究会やシンポジウムを開催した。また、国立国会図書館憲政資料室、芦田均記念館などに出張調査をおこなった。その概要は以下のとおりである。

① 2009年10月23日（金）、公開ワークショップ「メディア文化政策における〈博覧の世紀〉の可能性」（京都大学教育学研究科烏丸キャンパス）を開催した。このワークショップは、福間良明・難波功士・谷本美穂（編）『博覧の世紀』（梓出版、2009年）を素材としてメディア文化政策の可能性を探究すべく企画を行った。メイン・コメンテーターには森明子・国立民族学博物館研究戦略センター教授を迎え、都市の文化人類学という視点から地方博覧会における「ローカリティ」概念の多様性について議論が行われた。他にも、日本における博覧会の起源とその国際関係、博覧会と百貨店との連続性、80年代以降に増加し始めた博覧会キャラクターの意義など、今後一層深めるべき課題も提示された。

② 2009年11月6日（金）、京都大学教育学部でメディア教育を指導された経験のある加藤秀俊・元放送教育センター長をお招きしてシンポジウムを開催した（「メディアの生成—聖俗と社会関係資本から考える」、京都大学楽友会館大会議室）。加藤秀俊先生の近著『メディアの発生 聖と俗をむすぶもの』（中央公論新社、2009年）をもとに、本来の宗教用語「霊媒・巫女」から、二〇世紀資本主義システムの高度化とともに「広告媒体」、「情報媒体」へと大きく変化してきた「メディア」の持つ意味について検討が行われた。パネラーには、同志社大学大学院社会学研究科の佐伯順子教授・柴内康文准教授を迎え、聖俗をめぐるジェンダー研究、あるいは社会関係資本という観点から、これからの「メディア」研究の可能性についても議論が交わされた。

③ 2010年2月6日（金）、「日韓メディア研究大学院生セミナー」を開催した（京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールⅢ）。本企画は、韓国・西江大学大学院新聞放送学科と京都大学大学院教育学研究科の大学院生（若手メディア研究者）の学術交流を目的として行われた。西江大学はコミュニケーション学部新聞放送学科、言論大学院、情報通信大学院などを擁する韓国屈指のメディア研究拠点である。今回、韓国側は言論情報専攻・ヘルスコミュニケーション専攻の院生が発表を行い、日本側は生涯教育学講座（メディア論）・教育学講座（教育史）・高等教育開発論の院生も発表に加わった。言語の壁を乗り越え、隣国・韓国のメディア・コミュニケーション研究者と交流できたことは、今後研究の第一線にたつ大学院生にとって貴重な経験になったと考えている。

④ 2010年3月9日（火）、国立国会図書館関西館図書館協力課調査情報係長の村上浩介氏をお招きして、文化メディア政策としての図書館行政の方向性についてヒアリングを行

った（「図書館情報学におけるデジタル化の様相」、京都大学大学院教育学研究科第 5 演習室）。また、グーグルなど米国の民間企業主導の電子図書館化が進行する中での、国立国会図書館の資料収集・デジタル化の指針について話を伺い、研究者の立場から図書館利用に関する提案・要望も行った。

（公募課題 5）日本・中国・韓国における教育課程改革の国際比較（国際シンポジウム）

代表者：杉本均（教育学研究科）

分担者：田中耕治（教育学研究科）

教育課程・評価を中心に大きな教育的転換点にある日本・中国・韓国の教育改革の計画策定・実施に第一線で主導する立場にある教育専門家により国際シンポジウムを開催し、各国の現状認識、教育課程の改革動向、各国における教育評価の実践などについて情報、意見交換し、各国の国際的な位置づけを行うとともに、共通課題において知見の共有を試みた。7 月 31 日に京大において「日韓の教育改革の行方」、3 月 17 日に北京において「21 世紀における日本の教育改革―日中学者の視点から―」を開催したのでその概要を以下に示す。

（1）京都大学大学院教育学研究科公開シンポジウム「日韓の教育改革の行方」

平成 21(2009)年 7 月 31 日芝蘭会館別館（司会 田中耕治・杉本 均）

（教育実践コラボレーションセンター主催・GCOE 心が生きる教育の国際的拠点、日中教育共同研究センター共催）

① 白淳根「韓国における教育改革の動向」（韓国・ソウル大学教育学科教授）

21 世紀の国際競争の時代、知識の高度化・情報化の時代を迎え、韓国では長期的・総合的な人材育成のための教育改革が推進されている。その中でこれまでの暗記中心の教育から創意的で個性的な側面を重視した教育改革が計画されている。その中心は学習者の特性や希望に合わせる学校支援システムであり、教育の質を再検討し、教育条件による格差を緩和し、学習者の権利を保障しようとするものである。初等・中等教育の学校では学習者の満足を増大させるために、私教育の費用を削減するための援助を行い、学校に自律性を持たせ、学校を多様化することによって学校選択権を保障しようとしている。大学においても学生の能力や必要などに応じた認定制度を導入し、教育年限の自由化が行われている。韓国における人材大国建設のための戦略は、1. 学校の自律性・多様性の拡大、2. 教育福祉の拡大、3. 科学技術・エコ技術の追求、4. 英語を話す世界水準の優秀人材育成、とまとめられる。

② 磯田文雄「日本における教育改革の動向」（文部科学省研究振興局局長）

21 世紀の日本の教育改革の方向性は、1. 市場原理と競争原理、2. 地方分権と学校の自律性の確立、3. 民主的な学校作り、4. 実定法としての教育基本法に基づく義務教育中心主義、とまとめられる。1980 年代から続く新自由主義的な構造改革に基づき、ある程度の格差の拡大を認めながら、卓越性の追求、才能伸長のための教育が模索されている。

またこれまでの中央集権の教育行政から、地方自治体や学校に様々な教育権限を移管することによって特色ある学校づくり、教育の消費者の立場に立った教育が追求されている。平成18年の教育基本法の改正は理念法ではなく、かなり具体性のある実定法になっており、国が小中を含めた義務教育に責任を負うという態度が明確になっている。今後は国民国家を単位とした教育の概念から脱却した改革の方向性が必要であろう。

③ 西岡加名恵「日本における教育評価改革の動向」(京都大学大学院教育学研究)

2011年度以降に本格的な実施が予定されている日本の新学習指導要領における、児童生徒の学習評価の在り方に関する議論について考察した。ここでの評価の在り方の論点としては、1.「活用」をどのように位置づけるか、2.「関心・意欲・態度」をどう捉えるか、3.総合評定は必要なのか、という3点である。新指導要領では、学習における「習得」、総合における「探究」とをつなぐものとして、教科における「活用」を重視する特徴がある。これは経験主義と系統主義のバランスをとる考え方で評価できる一方、的外れの評価を導く可能性など、いくつかの懸念も予想されている。「関心・意欲・態度」の観点については、その中身に様々な内容が考えられ、評価が難しいという声多い。この評価は重要であるが、カリキュラム全体として育てる内容であり、個々の教科の中に位置づけると混乱が予想される。また総合の「評定」は指導には生かしにくく、そのために観点別の評価が形骸化してしまうという指摘があるが、その必要性については、観点別の評価が正しく出すことができるかどうかによっている。「目標に準拠した評価」を充実させていくために、日本においてもパフォーマンス・スタンダードの開発が求められている。

(2) 第7回 京都大学大学院教育学研究科公開シンポジウム

「21世紀における日本の教育改革―日中学者の視点から―」(日中合作本出版記念)

平成22(2010)年3月17日、中国、北京、中央教育科学研究所

(GCOE 心が生きる教育の国際的拠点・教育実践コラボレーションセンター共同主催)

① 韓民「『21世紀における日本の教育改革―日中学者の視点から―』刊行の意義」(中央教育科学研究所研究員、国家教育部)

今日、中国の基礎教育は大きな改革・転換局面にあり、素質教育改革や義務教育の弾力化、地方間教育格差の縮小など大きな課題をかかえている。その点において、日本の教育改革は、ゆとりの教育や生きる力、探求学習、教員養成改革、大学の法人化など、中国のこれからの教育改革にとっておおいに参考になる案件が含まれている。また中国の教育的多様性や先進的取り組みは、均質的な教育の弾力化を目指す日本にとっても役に立つ情報を提供する可能性がある。両国は互いの先行する側面から、失敗も含めて学ぶことができる。今回の刊行された「21世紀における日本の教育改革―日中学者の視点から―」においては、それぞれの教育分野の専門家が、日中双方の視点から見解を並列することによって、比較教育研究の成果を提示している点において、大きな意義のあることである。

② 高見茂「教育財源調達の政治経済学―義務教育費国庫負担制度をめぐる三つ巴の戦いと地方自治体」(教育学研究科)

日本では2006年度から公立義務教育費諸学校の教員給与費の国庫負担比率がそれまでの2分の1から3分の1に引き下げられた。これは小泉政権における経済財政構造改革、いわゆる三位一体改革の一部として行われたもので、地方自治体への税源移譲、国庫支出金の削減、地方交付税の改革という3点を目的としたものであった。しかし、この3点の目的の推進に関する各中央省官庁の思惑はそれぞれ異なっており、文部科学省をはじめとする所管官庁は国庫補助金の削減に権益の減少から反対、財務省は財源移譲が国の収入源を失うことになり反対、一方交付税の所管である総務省はその補てんが交付税(一般財源)に切り替わることから賛成するなど大きな温度差があった。

一方地方自治体は、この改革について、住民の納税意識と学校への参加意識が高まること、教職員の自覚が高まり、教育の質が向上するとして結果的に受け入れた。しかし全体として4兆円の国庫負担削減の見返りに、地方自治体が差し出した税源地方移譲のリストは義務教育関係費3兆円であった。約1兆円にのぼる差損を承知でなぜ地方自治体はこの案に乗ったのか。他の移譲可能案として公共事業関係費4.8兆円があるが、厳しい批判にさらされており、獲得してもうまみがない、社会保障関係費11.7兆円は大きいため削減対象を特定分野でカバーするのは難しいという事情があった。しかしそれらは表向きの理由で、将来的に増大傾向のある社会保障費に対して、義務教育費は少子化などにより縮小傾向にあり、現時点で地方移譲して固定化しておくほうがメリットがあるという計算が自治体側に働いていたとみられている。以上のように、義務教育費国庫負担削減・廃止の議論は教育論からではなく、主として財政論の観点から動いたと高見氏は結論した。

平成 21 年度の成果 (Unit C)

平成 21 年度、Unit C では、5 件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。

計画課題 1. 「個の成長と幸福のための教育：教育学と心理学の学際的国際交流プロジェクト」(代表：斉藤直子)

以下の国際シンポジウムが主たる成果である。

The 3rd International Symposium between the Institute of Education, University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University (京都大学大学院教育学研究科・ロンドン大学教育研究所第三回国際会議) *"Happiness and personal growth: Dialogue between philosophy, psychology and comparative education"* (幸福と個の成長：哲学、心理学、比較教育学の対話)

企 画：斉藤直子

日 時：2009 年 9 月 21 日 (月) 9:00-18:00—9 月 22 日 (火) 9:15-12:45

場 所：ロンドン大学教育研究所

成 果：今回の企画の成果として、第一に、テーマを「幸福と個の成長」に絞り、これに対して心理学的、哲学的、比較教育的な学際的対話が行われたことが挙げられる。学校の教員研究者の発表は、イギリスの教育事情について実践的な視座を与えるものであり、理論研究と実践的視点の交流もなされた。第二に、参加者の文化的背景の多様性が挙げられる。IoE は、イギリスの教育研究の中心地であり、ヨーロッパのみならず世界各地から学生や研究者を受け入れている。今回の会議でも、イギリス人のみならず、台湾、カナダ、韓国など様々な国から IoE で研究を行なう、幅広い世代の人々が集い、日本側参加者と交流を行なうことによって、小規模ではあるが日英の枠を超えて、国際会議の名にふさわしい異文化間対話の場が成立した。第三に、会議全体を通じて日本側参加者が共通に経験したことは、事前準備が不可能な部分での質問や議論の展開にその場で身を投じ、英語でこれに参加し応答すること、場合によっては新たに問いを生み出すことの難しさ、そしておもしろさである。自らの研究を単一言語的な視点にとどめず、他言語に翻すことができる、広義の翻訳能力の育成が今後の大学院教育の課題であると考えられる。参加人数は、1 日につき約 30 名、そのうち外国人参加者は、約 22 人であった。

研究課題 2. 「心が活きるフィールド教育と生涯発達をサポートとシステム」(代表者：山田洋子)

このプロジェクトでは、グローバル COE の課題である「心が活きる教育」を、次の3つの新しい観点「ポリフォニック・フィールド」「クロノ・トポス」「協働の対話的学び」から国際的・地域的に多フィールドで実践研究し、多様な人々が生き生きと暮らせるための国際教育、地域教育、生涯発達を支援する、サポートとシステムづくりのモデルを提案してきた。

2009 年度の主な成果としては、下記のワークショップとシンポジウムが行われた。

映像ナラティブ・ワークショップ

企 画：やまだようこ

日 時：2009 年 12 月 9 日（水）13:00-16:15

場 所：京都大学大学院教育学研究科 総合研究 2 号館 第 7 演習室

講 演 者：Prof. Sepp Linhart (Department of East Asian Studies, University of Vienna)

講演題目：The Visual Representation of Japan on Western Postcards, 1900 to 1945

講 演 者：Dr. Susanne Formanek (Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences)

講演題目：Visualizing the Afterlife in Japan: The Example of Edo-period Tsuizen kusazoushi (追善草双紙) and Shinie (死絵)

成 果：Prof. Sepp Linhart の講演では、1990 年代から 1945 年に絵葉書に描かれた、西洋からみた日本について紹介された。Dr. Susanne Formanek の講演では、江戸時代の追善草双紙と死絵を取り上げ、死後の世界がどのように描かれていたかについて報告がなされた。ビジュアル素材を駆使して発表が行われた本講演会は、それぞれの講演そのものの興味深さはもとより、ナラティブにおけるビジュアルの可能性を探究する契機を与えるものとなった。学内外から 30 名（うち外国人参加者 3 名）の参加者があり、活発な議論がなされた。

企 画：やまだようこ

日 時：2010 年 2 月 10 日（水）14:00-16:30

場 所：京都大学大学院教育学研究科 総合研究 2 号館 第 1 講義室

講 演 者：Prof. Yi, Byung Jun (Pusan University, Korea)

講演題目：Narrative on <cultural competency> in Korea

講 演 者：Dr. Lukas Pokorny (University of Vienna, Austria)

講演題目：'The World has Come to an End': Chiliastic Beliefs in New Religious Movements in East Asia

成 果：Prof. Yi, Byung Jun の講演では、韓国での「文化的能力」の語られ方について発表がなされた。研究プロジェクトから得た結果をもとに、「文化的能力」の概念、カテゴリー、要素について、詳細に報告された。Dr. Lukas Pokorny の講演では、まず、

この 200 年間に興った新宗教に関する説明がなされ、次いで、日本、韓国、中国、ベトナムなど東アジアをフィールドにした新宗教運動の比較研究に関する報告がなされた。学内外から 15 名（うち外国人参加者 2 名）の参加者があった。京都大学の教員や大学院生との国際交流の場となり、双方に大きな刺激を与えた。

研究課題 3. 「発達障害への心理臨床的アプローチ」（代表者：河合俊雄）

発達障害に関しては、近年脳科学による研究が進み、またそれに伴い、薬物療法と訓練教育が中心的な対応になりつつある。しかしながら、本プロジェクトは、発達障害に対して、従来の主体を前提とした心理療法とは異なるアプローチをすれば可能であることを示しつつある。それは、主体が欠けていると考えられる発達障害の人や子どもの主体を立ち現せるような心理療法である。

今年度においては、国際学会（Journal of Analytical Psychology IXth International Conference）の招待講演で、代表者の河合俊雄が講演した他、いくつかの成果が生まれた。

論文

河合俊雄（2009）「対人恐怖から発達障害まで：主体確立の蹟きの歴史」『臨床心理学』9(5),685-690.

Kawai,T. (2009) "Union and separation in the therapy of pervasive developmental disorders and ADHD" *Journal of Analytical Psychology*, 2009, 54, 659-675

畑中千紘（2009）ドラえもんにみる発達障害の心理療法 こころの科学 148 124-131

竹中菜苗（2010）「『見えないもの』への名付けとしての〈異人〉——柳田国男の『遠野物語』を手掛かりに」ユング心理学研究 第 2 巻

講演・シンポジウム

Kawai, T. "Union and separation in the therapy with developmental disorder." *Journal of Analytical Psychology IXth International Conference*, "The Transcendent Function Today: Imagination and Psychic Transformation in Analysis." in San Francisco, 2009.5.29. (招待講演)

Hatanaka,C.(2010) Mild Developmental Disorder in Japan From the Perspective of the Rorschach Test 平成 21 年度大学院 GP 国際シンポジウム：心理臨床実践と研究 ISAP 2010.1.8-11.

研究課題 4. 「語らないという「語り」の心理臨床的意味」（代表者：皆藤章）

「物語」というテーマに関して、それが心理臨床の学として位置づく在りようを、今年度は「語らない」ということに焦点を当てた。

著書

皆藤章 (2009)『体験の語りを巡って』誠信書房

講演・シンポジウム

皆藤章「「旅」という視点からの臨床フィールドワーク」日本心理臨床学会第 28 回秋季大会、東京国際フォーラム、2009.9.21

研究課題 5. 「特殊環境における心理的サポート —南極越冬隊員の心理に関する研究—」
(代表者：桑原知子)

現代においては多様なフィールドでヒトが活動することが求められるようになった。南極や宇宙ステーションなどの閉鎖環境もその一つである。これらは地上とは異なる特殊環境である。本研究においては、閉鎖環境におけるヒトの心理的状态を適切に評価する手法を提言するとともに、閉鎖環境で活動するヒトが危機的状況に陥らずにすむための予防的「サポート」、あるいは、実際に破綻してしまったときにはそれを回復させる緊急「サポート」の方法を確立しようとするものである。

平成 21 年度においては、第 50 次南極越冬隊への質問紙調査に加え、バウムテストなどの心理検査も含めた組織的かつ効率的な調査を行った。オーストラリアのタスマニア島にて 7 月に開催される南極研究集会 (SCAR) にて研究成果を発表した。

著書

桑原知子「南極に生きるころ」子安増生編『心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学』ナカニシヤ出版、124-145.

論文

桑原知子「南極越冬隊員の心的体験について (4) —南極越冬隊員に対する帰国後のインタビューから—」日本心理臨床学会第 28 回秋季大会、東京国際フォーラム、2009.9.21

平成 21 年度の成果 (Unit D)

1) -1 幸福感の国際比較研究 (○子安増生、藤田和生、鈴木晶子、楠見孝、カール・ベッカー、大山泰宏、デイヴィッド・ダルスキー、内田由紀子、モイゼス・キルク、ループレヒト・マッテイク、小島隆次)

平成 20 年度の活動を受け、21 年度は 2 回の会合を開催し、予備調査における使用言語および調査対象国ならびにその実施優先順位の決定、幸福感の国際比較調査に用いる尺度項目の確定と各国語への翻訳、ならびに今後の調査の進め方について討議した。

調査使用言語および調査対象国は、下記のように決定した。

日本語：日本

英語：イギリス、アメリカ、ニュージーランド

ドイツ語：ドイツ

スペイン語：スペイン、メキシコ

ポルトガル語：ブラジル

フィンランド語：フィンランド

中国語：中国

まず日本語と英語の幸福感尺度項目の決定を同時に行い、幸福感、有能感、生命感、達成感、幸福感とそのメタ認知、満足感、自尊心などの下位尺度からなる 88 項目の日本語版と英語版調査用紙を作成した。その後、スペイン語版とドイツ語版を英語版からの翻訳により作成した。スペイン語版においては、スペイン本国と中南米では多少スペイン語表現に違いがあるので、スペイン本国版と中南米版の両方を作成した。

予備調査の対象国は、日本のほか、翻訳が完了した英語・ドイツ語・スペイン語に対応するアメリカ、イギリス、ニュージーランド、ドイツ、スペイン、メキシコを優先的調査対象国として、インターネット調査を実施した。この調査結果の分析は、平成 22 年度の前期に行う予定である。

1) -2 日独の家庭、学校、企業における幸福感に関する質的フィールド調査 (○鈴木晶子、河合俊雄、岩井八郎、小野文生、竹中菜苗、ループレヒト・マッテイク、院生・学生では高橋洋一、菊澤聖子、小木曾由桂、井上嘉孝、久保田昌子、西浦太郎、福井夕希子)

学外からは家族研究の専門家の岩井紀子 (大阪商業大学)。ドイツ側参加者は、Wulf, Christoph (ベルリン自由大学)、Kellermann, Ingrid (ベルリン自由大学)、Zirfas, Joerg (エアランゲン大学)、およびベルリン自由大学・歴史人間学学際研究センターおよび文化パフォーマンス研究プロジェクトのポスドク、院生 5 名

・研究概要

ベルリン自由大学の歴史的人間学学際研究センター、および同大学の国際研究拠点 Cluster と共同で行っている日独幸福感に関する人類学的観点を入れた比較調査である。日独混成チームにより、参与観察、聞き取り調査、映像記録による分析といった質的方法論による調査である。方法論としては、ベルリン自由大学・歴史人間学学際研究センターがこれまで行ってきた儀礼、パフォーマンス、ミメーシスといった観点からの研究と、京都大学の臨床心理学、教育詩学のアプローチとを協働させた。国際的かつ学際的なフィールド調査はこれまでほとんど例をみないものである。研究の視角としては、①年中行事をそれぞれの家庭の文化がどのように受容し、それぞれの家庭の固有な文化として、また家庭内コミュニケーションへと反映させているか、②年中行事という時期がそれぞれの家庭がどのような意味づけに向かって相互の関係性をマネージメントしていくか、③家族構成員それぞれ、また夫婦、親子間のパフォーマンスを通して形成されていく「幸福な時空間」イメージはどのようなものか、という3点にまとめられる。家庭および学校に関する日独調査の視角や方法論については、ナカニシヤ出版から刊行される『心が活きる教育に向かってー幸福感を紡ぐ心理学・教育学』所収の鈴木論文にまとめられている。

研究成果

平成21年度は、昨年度に行った、学校と家庭の調査結果をもとに、データの集積と分析、日独間での意見交換を行った。本研究調査の報告は、学校、家庭それぞれについて、ドイツ語、英語、日本語での出版を計画している。家庭についてのドイツ語、英語原稿はほぼ出揃い、現在、日独間での最終調整の段階に入っている。また、研究成果は『家庭の幸福』というタイトルで来年度にドイツ語でまず出版する運びとなった。

成果発表

①平成21年度9月26,27日に開催された京都大学ジュニアキャンパスにおいて中学生向けのゼミを行った。「幸せって何？ 日本とドイツの教育現場から考える」（鈴木晶子、ループレヒト・マッティク 担当）参加者は中学生35名、父母10名。教育委員会関係者3名も陪席。中学生自身が幸福感や学校を幸福な場にするためにできることについての簡単なインタビュー、アンケート調査を行い、その結果を発表し、討議するという形をとった。ゼミは大いに活気あるものとなった。使用言語は英語、ドイツ語、日本語の三ヶ国語。

②ドイツの新聞ターゲスシュピーゲル紙、12月16日刊、ベルリン自由大学特集の大一面全体に、ベルリン自由大学卓抜研究 Cluster 「感情の言語」と京都大学教育学研究科 COE との幸福感についての共同研究が紹介された。

シンポジウム開催

2010年2月9,10日の2日間にわたり、ベルリンにおいて、本 COE とベルリン自由大学卓抜研究 Cluster 「感情の言語」の主催による国際シンポジウム「幸福、感情、言語」を開催した。日本からの参加者は、子安増生教授、齋藤直子準教授、山名淳準教授、小野文生助教、ループレヒト・マッティク助教、鈴木晶子教授、院生4名。連合王国からはロンド

ン大学のポール・スタンディッシュ教授も参加。ドイツ側参加者はクリストフ・ヴルフ教授、ギュンター・ゲバウアー教授ほか2日間で延べ40名。プログラムは以下の通り。

“Happiness, Emotion, Language” Toward an International Comparative Study

09/10. February 2010 in The Free University of Berlin

The Free University of Berlin: Cluster “Languages of Emotion”

Kyoto University: The Global COE: “Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds”

Coordination: Prof. Christoph Wulf (The Free University of Berlin)

Prof. Shoko Suzuki (Kyoto University)

The Free University of Berlin Cluster "Languages of Emotion", Habelschwerdter Allee 45, Seminar Room 1F

Tuesday, 09.02.2010

10:00-10:30 Introduction

Prof. Masuo Koyasu (Kyoto University), Prof. Chr. Wulf (FUBerlin),

10:30 -12:00 Prof. Chr. Wulf, Dr. Ingrid Kellermann, Dr. Iris Clemens, Dipl. Paed. Martin Bittner (FUBerlin)

"Cluster Project Respect, esteem, learning atmosphere, achievement. Processes of emotion regulation in the classroom"

12:00-13:30 Lunch

13:30-15:15 Prof. Chr. Wulf, Dr. I. Kellermann (FUBerlin)

Prof. S. Suzuki (Kyoto University), Fumio Ono (Assistant Prof., Kyoto University)

"Happiness as staging and social action in Family and School - a comparative German-Japanese Study"

15:15 -15:45 Coffee (or Tea) break

15:45 -16:15 Dr. Ruprecht Mattig (Assistant Prof., Kyoto University)

"Exploring happiness in education: insights into an ongoing cross-cultural research on experiential learning"

16:15-16:45 Prof. Jun Yamana (Kyoto University)

"Emotion als Thema der Gedenkstaettenpaedagogik - Zum Konzept einer vergleichenden Untersuchung zwischen Japan und Deutschland"

16:45-17:30 Discussion: Toward an International Comparative Study

Wednesday, 10. 02. 2010

9:30-10:15 Prof. Gunter Gebauer (FUBerlin)

"Emotion bei Wittgenstein aus der Sicht der Anthropologie"

10:15-11:00	Prof. Paul Standish (University of London) "Happiness: Essays, Projects, Programmes, Plans"
11:00-11:30	Prof. Naoko Saito (Kyoto University) "Becoming cosmopolitan, achieving happiness; philosophy as translation"
11:30-12:00	Prof. Masuo Koyasu (Kyoto University) "Development of understanding another's cognition and emotion in young children"
12:00	Farewell-Lunch

1) -3 FD・教育改善におけるオルターナティブモデルの構想 ―「心が活きる教育」のためのFD・教育改善とその評価（○田中每実、大塚雄作、松下佳代、溝上慎一、田口真奈、酒井博之、及川恵、河崎美保、石川裕之、半澤礼之、藤本夕衣）

・研究概要

本プロジェクトでは、大学教育をフィールドとし、教員の教育改善という観点から「心が活きる教育」の可能性を模索してきた。特に大学における教育改善の取り組みの一環として、FDに焦点を当てて研究を進めてきている。FDに関しては、昨年度より義務化されたことも手伝い、多くの大学が取り組むようになってきている。しかし、義務化されたために行われるFDは、ときに表層的かつ形式的なものとして進められてしまうことがある。そうした場合、FDの取り組みが、必ずしも日々積み重ねられている教員の教育実践を豊かにすることに寄与せず、結果、学生の学習を充実させることにつながらなくなる。

そこで本プロジェクトでは、教員の日常の教育実践に即したFDとして「相互研修型FD」を掲げ、教員相互の連携に基づく教育改善を支援するための研究を行ってきた。このように教員の日常性に深く根ざした教育改善を模索することは、外から強制される教育改善とは異なり、教員の教育活動を内から充実させること、すなわち「心が活きる教育」を目指すことを意味する。

・シンポジウム開催

上述のような取り組みの一つとして、今年度は「学士課程における科学教育の未来」と題するシンポジウムを、2009年9月25日（金）に京都大学時計台百周年記念館において開催した。講演者として、2001年にノーベル物理学賞を受賞したカール・E・ワイマン氏（ブリティッシュ・コロンビア大学カール・ワイマン科学教育イニシアティブ教授）を招いた。ワイマン氏は、第一線の研究者であるだけでなく、学士課程における科学教育についても精力的に研究・実践を重ねている。2007年には、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で自身の名前を冠した科学教育関連のユニットを立ち上げている。講演では、こ

れまでの科学教育の問題点と認知科学の知見をふまえた新しいアプローチが提案され、その実践例が紹介された。

パネルディスカッションでは、田中耕一郎氏（京都大学物質-細胞統合システム拠点教授）の司会のもと、国内からは、坂東昌子氏（元日本物理学会会長、NPO 知的人材ネットワーク あいんしゅたいん 理事長、愛知大学名誉教授）、笹尾登氏（岡山大学教育研究プログラム戦略本部極限量子研究コア教授、京都大学大学院理学研究科教授（併任））、指定討論者として松下佳代教授が登壇した。

今後、学士課程においてどのような科学教育が求められるのか、また、理系・文系などさまざまな学生を対象にした科学教育とはどのようなものであるべきか、などをテーマに、各パネリストが自らの実践を踏まえた報告を行い、指定討論をはさんで、ワイマン氏とパネリストがディスカッションを行った。学内外から、合計 133 名（うち外国人 8 名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

以下に当日のプログラムと発表要旨・資料を掲載する。

学士課程における科学教育の未来

—The Future of Science Education at Undergraduate Level—

14:00 - 14:10

開会挨拶: 松本 紘（京都大学 総長）

第 I 部 カール・E・ワイマン 講演

14:10 - 15:30 21 世紀の科学教育—科学の知見を用いて科学を教える—

カール・E・ワイマン（ブリティッシュ・コロンビア大学 カール・ワイマン科学教育
イニシアティブ）

司会：大塚 雄作（京都大学 高等教育研究開発推進センター）

第 II 部 パネルディスカッション

15:45 - 18:15

パネリスト：カール・E・ワイマン、坂東 昌子（NPO 法人「知的人材ネットワーク あいんしゅたいん」）、笹尾 登（岡山大学 極限量子研究コア）

指定討論：松下 佳代（京都大学 高等教育研究開発推進センター）

司会：田中耕一郎（京都大学 物質 - 細胞統合システム拠点）

「文系学生への授業経験」 坂東 昌子

「大学における実験教育—物理教育の経験からみた課題—」 笹尾 登

「大学の科学教育を変える—誰が・何を・どのように?—」 松下 佳代

18:15 - 18:20

閉会挨拶：

田中 每実（京都大学 高等教育研究開発推進センター センター長）

18:30 - 20:00

情報交換会 会場：百周年時計台記念館・国際交流ホール

講演会、シンポジウム、ワークショップの開催記録

■ 講演会

第 15 回主催講演会

「グローバル COE 認知心理学サマーレクチャーシリーズ (1) : 星野崇宏博士講演会」

企 画 : 楠見 孝

日 時 : 2009 年 8 月 11 日(火)13:30-15:00

場 所 : 時計台記念館 2 階 会議室Ⅲ

題 目 : 内的・外的な妥当性を向上させるための研究デザインと解析法 : 近年の新展開と心理教育分野への波及

講 師 : 星野崇宏 (名古屋大学大学院経済学研究科)

概 要 : 心理学や教育学が直面する問題や研究課題の多くは、実験研究から答えを出すことが難しい。例えば 3 歳児神話やメディア接触の長期的な影響、早期英語教育、教授法、ライフイベントの性格特性への影響などの多くの問題では、「関心のある独立変数 (例えば 3 歳児神話では保育園へ行かせるか母親の元にいるか) を実験研究のように無作為に割り当てて、その後の発達変化を見る」ことは倫理的にも事実上も不可能である。従って調査・観察研究を行うことになるが、例えば 3 歳児神話の研究では「就業している母親はこどもを保育園に通わせる」「就業している母親は学歴や年齢が高い」「ソーシャルサポートや同居家族が多いと保育園に通わせない可能性が高い」など、独立変数に関連する様々な要因が従属変数 (例えば数年後の知能や社会性) に影響を与える可能性は十分ある。このような場合に単純に独立変数と従属変数の関係を調べても、内的な妥当性 (= 従属変数への独立変数単独の効果を見ることが出来る程度) が低いため、様々な反論にさらされる可能性がある。3 歳児神話の例ならば、保育園に通う子供とそうでない子供の就学時の差がないという結果になっても、「子供の親は学歴や収入が高く、もともと能力がある」、といった反論があり得る。そこで発達してきたのが、もともとは教育心理学 (Rubin, 1974; J. of Educational Psychology) にルーツを持ちながら、この 15 年ほどで医学や経済学での研究応用が盛んになった「調査・観察研究から内的な妥当性を高めるための統計的因果推論」の方法論である。本講演では、近年、Child Development など心理教育系の論文等でも利用されるようになった頑健な因果推論の方法、特に傾向スコアや関連する因果推定法と、そこで利用すべき背景要因 (共変量) の選択法について紹介する。またこの内的な妥当性についての問題は、欠測データという枠組みを用いることで、外的な妥当性 (= 研究対象者から得られた知見が母集団全体に一般化出来る程度) の問題と同様の問題として考えることができる。近年では教育政策やマクロ経済政策への行動経済学の知見の適用など、心理学が対象としてきた研究内容がこれまで以上に社会や政策に影響を与える可能性が高まる一方で、外的な妥当性をやや軽視してきたことが問題とされつつある。そこで、外的な妥当性について我々がどのように考えるべきか、「共変量情報を利用した、外的な妥当性向上に向けた解析法」を具体例とともに紹介しつつ、議論したい。

成 果 : 講演者の星野博士は、名古屋大学経済学研究科において、行動計量学、教育測定について先進的研究を進めている若手研究者である。講演会では、傾向スコアや関連する因果推定法について、豊富な事例に基づいて報告が行われた。学内から 7 名、学外から 3 名 (外国人 0 名) の参加者があり、新しい統計手法の実際と今後の活用について、活発な議論が行われ、幸福感の国際比較研究をはじめとする今後の研究手法について、重要な

示唆を得ることができた。

第 16 回主催講演会

「グローバル COE 認知心理学サマーレクチャーシリーズ (2) : 野村理朗博士講演会」

企 画 : 子安増生

主 催 : グローバル COE プログラム・ユニット D

日 時 : 8 月 18 日 (火) 13 時 30 分～15 時 00 分

場 所 : 時計台記念館 2 階 会議室Ⅲ

題 目 : 社会脳の個人差を可視化する認知神経科学的アプローチ

講 師 : 野村理朗 (広島大学大学院総合科学研究科)

概 要 : 本講演では、社会脳研究の主要なテーマをとり上げ、心理・行動的現象の個人差を解き明かすための一般的な方法論と、新しい挑戦的なアプローチによって得られた演者らの研究成果が紹介された。誤帰属の一種である感情プライミング、セロトニンおよびドパミンの機能に關与する遺伝子多型と行動出力との關連を解析し、イメージングとジェノミクスとの両アプローチによって得られた知見を統合する新しい概念が提案された。

成 果 : 社会脳研究における心理・行動的現象の個人差を解き明かすための一般的な方法論と、それにもとづく研究成果が豊富なスライドにより分かりやすく紹介された。行動指標や脳機能画像だけでなく、遺伝子多型の分析は今後の幸福感の個人差研究にとって重要であることが示された。11 名 (うち外国人参加者 1 名) の参加者があり、活発な議論が行われた。

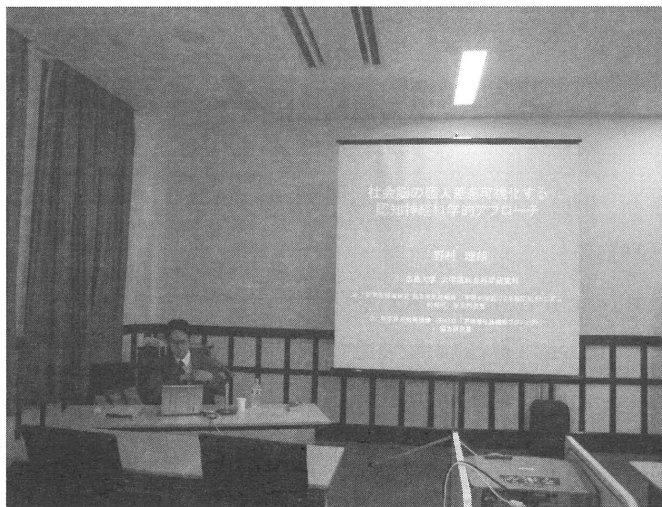


写真 1 : 講演中の野村理朗博士

第 17 回主催講演会

「グローバル COE 認知心理学サマーレクチャーシリーズ (3) : 森口佑介博士講演会」

企 画 : 齊藤 智

日 時 : 2009 年 8 月 25 日 (火) 13:30-15:00

場 所 : 京都大学総合研究 2 号館教育学研究科第一講義室

題 目 : 幼児期における認知発達とその脳内基盤

講 師 : 森口佑介 (上越教育大学大学院学校教育研究科)

概 要 : Piaget 以来、発達心理学者は、主に行動実験によって認知発達の研究を行ってきた。それらの研究は、ある課題において、特定の年齢集団と別の年齢集団の間に成績の差があ

ることを示し、その時期に当該の能力が発達すると結論づけてきた。しかしながら、Piaget が痛烈に批判されてきたように、そのような成績の差が、当該の認知能力の発達差を反映しているのか、それとも、実験者の教示や実験意図の理解など、他の要因の発達差を反映しているのかは明らかでない。このような問題は、ある行動実験における成績の発達差と脳活動の発達差の関連を調べることで、少なくとも部分的には解決することができる。このような発達認知神経科学では、現在、小学生以上の子どもを対象にした fMRI 研究と 1 歳未満の乳児を対象にした近赤外分光法(NIRS)研究が中心となり、知見が蓄積されつつある。しかし、これまでは技術的な問題もあり、心の理論、類推的推論、認知的制御（実行機能）、コミュニケーション能力などの高次な認知能力が著しく発達するとされる「幼児期」を対象とした研究はほとんど報告されてこなかった。そこで本講演では、最近になって始まったばかりの、幼児期における認知発達とその脳内基盤についての研究を紹介する。特に、発達心理学において盛んに研究がなされてきた心の理論や認知的制御の研究を中心に議論を進めていく。最後に、発達認知神経科学の研究が、認知発達研究に新しい理論的な枠組みを提供し、乳幼児の認知的世界についての新しい予測を可能にする点についても議論をしたい。

成 果：本講演会は、認知心理学の最先端の研究をグローバル COE 所属の大学院生とともに議論することを目的とし、新進気鋭の発達心理学者である森口氏を招聘して開催された。これまでほとんど研究されることのなかった乳児の認知的制御機能について、NIRS を用いてアプローチした最新の研究が報告された。約 20 名の参加者を得て、研究の背景、研究方法、今後の展開について、活発な議論が行われた。

第 18 回主催講演会

「ローマ大学 Caprara 教授 ポジティブ志向性の心理学 講演会」

企 画：楠見 孝

日 時：2009 年 9 月 7 日（月）午後 4 時 00 分-5 時 30 分

場 所：芝蘭会館別館研修室 1

題 目：Optimal psychological functioning（最適な心理的機能）

講 師：Gain Vittorio Caprara（ローマ大学教授）

概 要：Previous findings attest to the stability over the course of life and to the generality across cultures, of positive orientation as a pervasive mode of viewing at the world and facing reality. Positive orientation affects the ways people construe the i r experience and predispose to action. Current findings point to self efficacy beliefs as instrumental to change positive orientation in view of optimal functioning. "

成 果：講演者の Caprara 教授は、人格心理学、動機づけ研究の第一人者であり、Bandura と長年自己効力感（self-efficacy）の研究を長く進めてきた。現在は自尊心（self-esteem）や幸福感（psychological well-being）の根幹にある positivity にも関心を持ち、さらに positivity に関する行動遺伝学的な研究も進めている。Caprara 教授は 400 編を超える論文を執筆し、Zimbardo との政治家のパーソナリティに関する共著論文は Nature に掲載されている。講演会は、幸福感の国際比較に関する G-COE のプロジェクトの一環として行なった。国際比較の成果と手法に関する活発な討論を行い、今後のプロジェクト推進に関わる多くの知見を得ることができた。学内から 9 名、学外から 21 名、うち外国人参加者 2 名の参加者があった。

第 19 回主催講演会

「日本文化のヴィジュアル・ナラティヴ」

企 画：やまだようこ

共 催：科学研究費プロジェクト 代表 山田洋子（基盤研究A）多文化横断ナラティヴ・フィードワークによる臨床支援と対話教育法の開発

日 時：2009 年 12 月 9 日（水）13:00-16:15

場 所：京都大学大学院教育学研究科 総合研究 2 号館 第 7 演習室

概 要：13:00-14:30

講 演 者：Prof. Sepp Linhart (Department of East Asian Studies, University of Vienna)

講演題目：The Visual Representation of Japan on Western Postcards, 1900 to 1945
14:45-16:15

講 演 者：Dr. Susanne Formanek (Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences)

講演題目：Visualizing the Afterlife in Japan: The Example of Edo-period Tsuizen kusazoushi (追善草双紙) and Shinie (死絵)

指定討論者：家島明彦（島根大学教育開発センター）

成 果：Prof. Sepp Linhar は、ウィーン大学文献文化学部ならびに同大学東アジア研究所に所属し、研究所では所長をつとめ、現在、日本学科で教鞭をとっている。専門分野は日本社会学である。本講演では、1990 年代から 1945 年に絵葉書に描かれた、西洋からみた日本について紹介された。Dr. Susanne Formanek は、オーストリア国立学術アカデミーならびにアジア思想・文化史研究所にて日本学を担当する研究員であり、ウィーン大学東アジア研究所では日本語の古文体の講師をつとめている。本講演では、江戸時代の追善草双紙と死絵を取り上げ、死後の世界がどのように描かれていたかについて報告がなされた。ビジュアル素材を駆使して発表が行われた本講演会は、それぞれの講演そのものの興味深さはもとより、ナラティヴにおけるビジュアルの可能性を探究する契機を与えるものとなった。学内外から 30 名（うち外国人参加者 3 名）の参加者があり、活発な議論がなされた。

第 20 回主催講演会

「Hamlin 博士&Ferrari 博士講演会」

企 画：板倉昭二・藤田和生・友永雅己・明和政子

共 催：一部、科学研究費、基盤研究 S（代表：藤田和生）の援助を受けた。

日 時：2009 年 12 月 18 日 15:00～17:00

場 所：京都大学文学部新館第 7 講義室

概 要：The Developmental Origins of Social and Moral Evaluation

Jane Kiley Hamlin (Yale University)

This talk tracks the developmental origins of the adult propensity to evaluate others based on their social behaviors. It will examine findings suggesting that even in the first few months of life, preverbal infants distinguish those who engage in third-party prosocial versus third-party antisocial interactions, and prefer prosocial

to antisocial others in a variety of social scenarios. It will then examine the consequences of these judgments for intuitions about personality, reward and punishment, group membership, and social learning.

From Mirror Neurons to Imitation and Empathy. A Bottom-Up Approach to Social Cognition (Universita di Parma)

Dr. Pier Francesco Ferrari

In the last few years, the tremendous growth in the study of primate cognitive neuroscience has provided important insights to the understanding of sensory and motor processes taking place in the monkey brain, and, more generally, our knowledge of the organization of the cerebral cortex. The discovery of the mirror neuron system in both monkeys and humans has had large impact on different disciplines such as ethology, developmental psychology and psychiatry, thus paving the way to a series of investigations aimed at understanding the possible functions of mirror neurons and their implications for human psychopathologies.

I will first describe the basic properties of mirror neurons in the macaque monkey and of the mirror system in humans. Then, I will present hypotheses related to the possible function of mirror neurons. The possible role of these neurons in primate cognition seems not to be limited to action recognition, as firstly proposed, but also to other cognitive processes, such as intention understanding, imitation and emotional contagion. More interestingly recent behavioural and neurophysiological data on infant macaques suggest that monkeys are provided at birth with a neurophysiological mechanism, probably underpinned by mirror neurons, that allow them to understand others' behaviors and to tune the own behavior with that of others in an interactive exchange. Neurophysiological research in monkeys has now provided deeper insights into the interpretation of certain neurological syndromes and psychopathologies, and has provided a new theoretical basis for understanding basic cognitive functions commonly used to interact with others in our everyday life.

成 果：本講演会では、Jane K. Hamlin 氏と Pier F. Ferrari 博士を招へいし、社会的認知に関する講演をおこなった。Hamlin 氏は、イェール大学の大学院生で、まだ若手であるが、まさに新進気鋭の研究者である。乳児期初期の社会的評価に関するユニークな一連の研究を発表した。また、Pier. F. Ferrari 博士は、イタリア、パルマ大学の研究者で主にヒト以外の霊長類を対象に社会的認知に関する脳活動の計測をおこなっており、優れた研究成果を多数発表している。本講演会では、ミラーニューロンと認知プロセスの機能について講演を行った。両講演とも、最先端の成果であり、活発な議論も行われ、極めて有効な情報交換ができた。参加者は 40 人程度であった。

第 21 回主催講演会

「Mona Bekkhus 講演会」

企 画：子安増生

主 催：グローバル COE プログラム・ユニット D

日 時：2010 年 1 月 16 日（土）16 時 00 分～17 時 30 分

場 所：京都大学総合研究 2 号館 1 階 第 2 演習室

題 目：The role of the mother, the family and group care in early childhood

講 師：Mona Bekkhus（ノルウェー・オスロ大学）

概 要：オスロ大学が中心となって実施しているノルウェー母子縦断研究（MoBA study）の大規模データの分析により、乳幼児の発達に影響する要因についての議論が展開された。

成 果：大学院生の交流プログラムの一環として実施した。発表者の博士論文の 2 つの研究が紹介され、外国の学位論文の水準が示され、出席した大学院生には大いに参考になった。

7 名（うち外国人参加者 2 名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

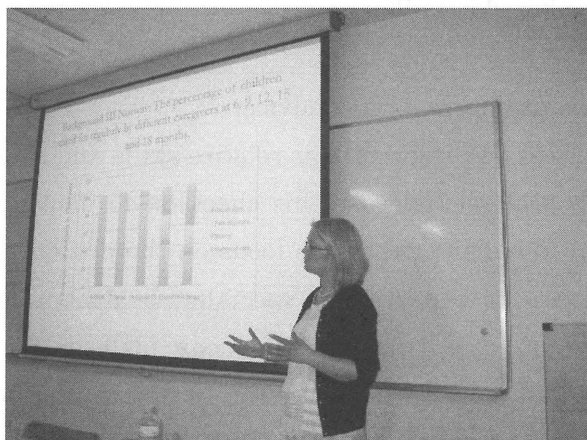


写真 2：講演中の Bekkhus 氏

第 22 回主催講演会

「Mongomery 博士講演会」

企 画：楠見 孝

後 援：日本心理学会

日 時：2010 年 2 月 24 日（水）13 時 30 分-15 時 00 分

場 所：教育学部第 2 演習室

題 目：The keys to successful behaviour change: finding happiness and enjoying good health

講 師：Bob Montgomery（オーストラリア心理学会会長）

概 要：Happiness is more than just the absence of unhappiness. It is a positive state of subjective well-being that results in part from behaviour, overt and covert, that makes you happy. Good health is more than just the absence of illness. It is a positive state of physiological well-being that results in part from behaviour that promotes and protects good health. Maladaptive behaviour, overt or covert, is a risk factor both for the loss of happiness and the onset of disease. Well-being, psychological and physiological, results from on-going interactions amongst biological, psychological and social factors. Different factors are more influential for different people at different times and, most importantly, vary in their accessibility to practical, affordable, and sustainable change. Helping people to prevent or manage unhappiness or disease and to promote happiness and good health is inevitably about helping them to make and sustain successful changes in their behaviour. Most people have some idea of changes they should make to their lifestyle to enjoy more happiness and better health (although there is an abundance of misinformation).

The problem for most people is not a lack of information but a lack of motivation.

The need for a broader approach to facilitating successful behaviour change has been increasingly recognized (Bothelo, 2004; Rollnick, Mason & Butler, 1999) and the identified key ingredients are:

- Building self - efficacy while recognizing autonomy.
- Identifying & facilitating readiness to change.
- Facilitating motivation to change.
- Helping to prevent & manage relapses.
- Fostering a good working alliance.
- Using evidence - based procedures.
- Providing relevant information & advice.
- Recognizing successful interventions require skills and time.

I suggest health professionals use this checklist to identify possible gaps in their training. Typical university programs focus on the evidence - based knowledge and procedures relevant to a particular specialist health profession, which naturally deserve a lot of our attention. But they pay little or no attention to the other ingredients required for working successfully with people who need help changing their behaviour. Such gaps can be filled by judicious choices of professional development. If your professional role or personal inclinations do not include this aspect of health care, the ethical alternative is to develop appropriate referral resources.

成 果：講演者のモンゴメリー博士は、Sydney University 卒業後、Macquarie University で PhD（心理学）の学位を取得し、La Trobe University の Senior Lecturer，Bond University 教授，University of Canberra 教授を経て，現在は，University of the Sunshine Coast の客員教授と臨床，健康，法心理学と組織コンサルタントに関わる実践活動を行っている。モンゴメリー博士の専門は臨床，健康，法心理学であり，今回の講演に関わる健康のためのライフスタイル変容の支援，被災者の支援，目撃証言などに関する実践や研究を行っている。今回は，GCOE のプロジェクトのテーマである幸福感に関わるテーマで，豊富な実践事例に基づいて報告が行われた。講演後，幸福感の規定要因やその文化差などについての議論が活発におこなわれ，今後のプロジェクトの推進に寄与する多くの知見を得ることができた。参加者は，プロジェクトのメンバーを中心に学内外 20 名（外国人参加者 6 名）であった。

第 23 回主催講演会

「ギャラント教授講演会」

企 画：デイヴィッド・ダルスキー

日 時：2010 年 3 月 18 日（木）16:00-18:00

場 所：京都大学吉田南総合館東棟 101 室

題 目：Part I - Power distance and uncertainty avoidance in Japanese and Finnish classrooms; Part II - Approaches towards English academic writing for translation majors at the University of Helsinki

講 師：Dr Mikel Garant (University of Helsinki, Finland)

概要 : Part one of this presentation reports on the results of a long-term study focusing on cultural factors that influence English language teaching and learning in school settings in Finland and Japan. Since this presentation will be in Japan, I will assume the audience knows the Japanese English language teaching system. Therefore, I will concentrate on contemporary trends in English language teaching and learning and in Finnish comprehensive schools. Data from classroom observations and interviews in Finland and Japan based on Hofstede's 4-D cultural model will be presented. This paper will suggest that underlying cultural values as well as teaching methods influence English teaching and learning outcomes in the two countries. Finland is internationally recognized as having one of the highest education and English proficiency levels in the world. The University of Helsinki is the top ranked university in Finland and recent studies state that the university conducts over 50% of the research conducted in Finland. The second part of this presentation reports the results of an in-depth study focusing on learner attitudes toward English academic writing teaching and learning at the University of Helsinki, Finland. Data were gathered from 90% of the first year (N = 20) and second year (N = 19) translation majors via online surveys and focus group discussions with the participants. The focus groups were recorded in order to maintain the integrity of the data. Relevant suggestions for the planning of quality academic writing courses, building lexicon, and other results also came out of the data. The results also suggest that some aspects of academic writing share wide agreement as to their importance while there is a distribution of opinions about other aspects of academic writing. This suggests that different learners have different strategies when writing academic papers. Audience participation and discussions comparing the Finnish setting with the Japanese setting are encouraged.

成果 : 学内外から 12 名 (うち外国人参加者 4 名) の参加者があり、活発な議論が行われた。

第 24 回主催講演会

「チャーリー・ルイス教授講演会」

企画 : 子安増生

主催 : グローバル COE プログラム・ユニット D

日時 : 2010 年 3 月 29 日 (月) 16 時 00 分～17 時 30 分

場所 : 京都大学総合研究 2 号館 1 階 第一講義室

題目 : How infants and toddlers develop social understanding: The 'dark ages' of "theory of mind"

講師 : Prof Charlie Lewis (Lancaster University, UK)

概要 : 司会者 : 子安増生 (京都大学大学院教育学研究科) 指定討論者 : 板倉昭二 (京都大学大学院文学研究科)

We consider two- to three-year olds' grasp of mental states to argue that these are embedded within a framework of similar interactional constraints. We describe three experiments using narrative and nonverbal techniques to develop an account of early social understanding that is embedded within a relational perspective.

成 果：英国ランカスター大学との研究交流事業の一環として、同大学のチャーリー・ルイス教授を招聘しての講演会である。乳幼児期の子どもたちが、従来想定されているよりも早い時期に、他者理解の能力を発達させていることをルイス教授自身の研究を軸に実証的に説明された。11名（うち外国人参加者1名）の参加者があり、活発な議論が行われた。



写真 3：講演中の Lewis 教授

第 21 回共催講演会

「マフムッド教授講演会」

企 画：子安増生

主 催：グローバル COE プログラム・ユニット D

日 時：2009 年 6 月 23 日(火) 16 時 30 分～18 時 00 分

場 所：京都大学教育部本館 旧第二演習室

題 目：Values: A study of teacher and student perceptions in four countries

講 師：Professor Shamsul Mahmud (University of Dhaka, Bangladesh)

概 要：教員と大学生の価値意識（向社会性、達成、権力、安全、ナルシシズムなど）に関する国際比較研究の成果が発表された。対象は、日本（北海道大学）、バングラデッシュ（Dhaka University, Chittagong University）、アメリカ合衆国（Alvernia University）およびドイツ（Ruhr University）である。国別の特徴が抽出される一方、国や地位（教員/学生）を越えた普遍的価値意識が確認されるという結果が示された。

成 果：グローバル COE の幸福感の国際比較研究グループのジョイント講演として開催され、同チームのメンバーにとって有意義な情報提供が行われたことは意義深い。9 名（うち外国人参加者 2 名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

第 22 回共催講演会

「批判的思考講演会」

企 画：楠見 孝

主 催：科学研究費基盤 B「批判的思考の認知的基礎と教育実践」

共 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」ユニット B
「e-learning と学習者間インタラクションを通じた高次リテラシーの育成」

日 時：2009 年 6 月 28 日（日）15 時 00 分-16 時 30 分

場 所：百周年時計台記念館 2F 会議室 IV

題 目：社会的クリティカルシンキングの育成とリスク教育の新しいかたち

講 師：元吉忠寛

概 要：これまでに元吉氏のグループは、クリティカルシンキング志向性、社会的クリティカルシンキングといった概念に着目し、その尺度作成を進めてきた(廣岡・元吉・小川・斎藤, 2000; 元吉・廣岡・中西・小川・斎藤, 2006)。今回の発表では、まず、社会的クリティカルシンキングについて、これまでの研究で明らかになったことを整理し、現状の課題と今後の計画についての紹介があった。また、心理学教育に関する挑戦的な取り組みの例として、社会的クリティカルシンキング教育と縁の深いソーシャルライフ教育(吉田・廣岡・斎藤, 2002, 2005)や、リスク教育実践(海上・元吉ほか, 2007)、さらに、リスク・コミュニケーションの授業での教材や実践例についても報告があった。

成 果：講演者の元吉博士は、名古屋大学の批判的思考研究グループの一員として、社会的クリティカルシンキングやリスク認知、その教育実践研究を進めてきた若手研究者である。講演会では、これまでの研究の成果と実践についての密度の濃い紹介があった。そして、報告に基づいて批判的思考の研究と教育実践に関する今後の課題について、活発な議論をおこない、今後のプロジェクトの推進のための多くの示唆を得ることができた。参加者は学内外から 20 名（外国人参加者なし）であった。

第 23 回共催講演会

「思考研究の最前線 講演会」

企 画：楠見 孝

共 催：京都大学グローバル COEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」ユニットB
「e-learningと学習者間インタラクションを通した高次リテラシーの育成」・関西思考研究会

日 時：2009 年 8 月 30 日（日）9:30-11:30

場 所：百周年時計台記念館会議室IV

題 目：1.Correlation sensitivity, linearly separability, and predictive inference in models of category learning. (カテゴリ学習のモデルにおける相関敏感性, 線形分離性, 予期的推論) 2.Explanation and Causal Induction (説明と因果帰納)

講 師：1.松香敏彦（千葉大学文学部）2.Steven A. Sloman（ブラウン大学認知・言語科学部）

概 要：1. Prototype theory of categorization and category learning assumes that a category is simply represented by its central tendency. The theory accounts for many psychological phenomena associated with categories, yet it is shown to be incapable of accounting for some important aspects of categories and concepts. For example, Prototype theory, due to its simplistic representation, cannot describe how people make inference about variabilities and correlations among feature dimensions within categories. In addition, it cannot learn categories that are not linearly separable. The present research extends Prototype theory of category learning in order to improve its explanatory capability while maintaining the simplistic representation mechanism. Our theory assumes that a category is not only represented by its central tendency but also by an abstracted within-category structure. In order to evaluate its descriptive validity, we developed a computational model built on the basis of the theory. In our model, called STRAP for STRucture Abstracing Prototype, a central tendency is represented by a mean vector (i.e., centroids) and an abstracted within-category structure by a covariance

matrix. Three simulation studies were conducted and the results showed that STRAP successfully accounted for empirical phenomena that have not been replicated by existing prototype models: it acquired knowledge that is necessary for making inferences about variabilities and correlations among feature dimension within categories; it learned to categorize linearly non-separable categories; it reproduced A2 advantage, which is a tendency that people categorize a less “prototypical” stimulus A2 more accurately than more “prototypical” stimulus, invalidating some criticisms against Prototype theory. More important, STRAP and thus our theory accounts for these psychological phenomena with distinctive cognitive information processes, as compared with those of other successful models, providing new insights into how categories are represented in our mind. 2. カテゴリ帰納は説明によって媒介されると考えられてきた。本発表では良い説明は、因果に依拠することを述べた。そして、人は因果や介入に関わる事象に敏感であることを、豊富なデータに基づいて示した。さらに、ベイズ流のモデルの拡張について検討した。

成 果：講演者の Sloman 博士は、推論、カテゴリ化、確率判断に関する研究の第一人者である。

松香博士は、カテゴリ学習の計算モデルによるシミュレーション研究を進めている若手研究者である。本講演会では、立命館大学で開催された日本心理学会第 73 回大会で招待講演を行なった Sloman 博士とその通訳をつとめる松香博士を招いて、それぞれの研究の最前線について、さらに高いレベルの話題提供をしていただいた。講演内容に基づいて、思考研究の新しい理論とアプローチをめぐって活発な議論が行ない、今後の GCOE のユニット B の研究プロジェクトに関わる研究の指針を得ることができた。学内から 4 名、学外から 15 名、うち外国人 2 名の参加者があった。

第 24 回共催講演会

「「学士課程における科学教育の未来」」

企 画：松下佳代

主 催：京都大学高等教育研究開発推進センター

共 催：京都大学理学部、京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日 時：2009 年 9 月 25 日（金）

場 所：京都大学時計台百周年記念館

題 目：21 世紀の科学教育—科学の知見を用いて科学を教える—

講 師：カール・E・ワイマン（ブリティッシュ・コロンビア大学）

概 要：14:00 - 14:10

開会挨拶：松本 紘（京都大学 総長）

第 I 部 カール・E・ワイマン 講演

14:10 - 15:30 「21 世紀の科学教育—科学の知見を用いて科学を教える—」

カール・E・ワイマン（ブリティッシュ・コロンビア大学 カール・ワイマン科学教育イニシアティブ）

司会：大塚 雄作（京都大学 高等教育研究開発推進センター）

第 II 部 パネルディスカッション

15:45 - 18:15

パネリスト：カール・E・ワイマン、坂東 昌子（NPO 法人「知的人材ネットワーク あ

いんしゅたいん」)、笹尾 登 (岡山大学 極限量子研究コア)

指定討論：松下 佳代 (京都大学 高等教育研究開発推進センター)

司会：田中 耕一郎 (京都大学 物質・細胞統合システム拠点)

「文系学生への授業経験」坂東 昌子

「大学における実験教育—物理教育の経験からみた課題—」笹尾 登

「大学の科学教育を変える—誰が・何を・どのように?—」松下 佳代

18:15 - 18:20

閉会挨拶：田中 每実 (京都大学 高等教育研究開発推進センター センター長)

成 果：講演者として、2001年にノーベル物理学賞を受賞したカール・E・ワイマン氏 (ブリティッシュ・コロンビア大学カール・ワイマン科学教育イニシアティブ教授) を招いた。ワイマン氏は、第一線の研究者であるだけでなく、学士課程における科学教育についても精力的に研究・実践を重ねている。2007年には、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で自身の名前を冠した科学教育関連のユニットを立ち上げている。講演では、これまでの科学教育の問題点と認知科学の知見をふまえた新しいアプローチが提案され、その実践例が紹介された。パネルディスカッションでは、今後、学士課程においてどのような科学教育が求められるのか、また、理系・文系などさまざまな学生を対象にした科学教育とはどのようなものであるべきか、などをテーマに、各パネリストが自らの実践を踏まえた報告を行い、指定討論をはさんで、ワイマン氏とパネリストがディスカッションを行った。学内外から、合計 133 名 (うち外国人 8 名) の参加者があり、活発な議論が行われた。

第 25 回共催講演会

「Bar-Hillel 博士講演会」

企 画：楠見 孝

共 催：関西思考研究会、科研基盤B「批判的思考の認知的基礎と教育実践」

日 時：2009 年 11 月 9 日 (月) 16 時-18 時

場 所：時計台記念館 2F 会議室 3

題 目：The Bible Code: Riddle and Solution (聖書の暗号の謎を解く)

講 師：Maya Bar-Hillel(Hebrew University of Jerusalem, 合理性研究所)

概 要：In 1994, Statistical Science published a paper purporting to show that a code exists in Genesis, foretelling the future. The paper had been refereed by many distinguished scientists, among them Nobelists, the world's most renowned statisticians, and others, who could not find the flaw in the paper. A team of skeptics set out, as sleuths, to find out who really put the code in the Bible.

成 果：講演者の Bar-Hillel 博士は、意思決定の心理学研究の重鎮で、2004-2005 年には Society for Judgment and Decision Making の 19 代会長も務めている。著作としては、The base-rate fallacy in probability judgments (1980)、Solving the Bible code puzzle(1999)等が有名である。日本学術振興会の補助を受けて来日した。講演では、聖書の暗号 (聖書から隠れた言葉を見つけて予言すること) と批判的思考に関して、背景の思想と詳細な手続に関する講演を行った。そして、報告に基づいて聖書の暗号と批判的思考の研究に関わる活発な議論をおこない、今後のプロジェクトの推進のための多くの示唆を得ることができた。参加者は学内外から 25 名 (うち外国人参加者 3 名) であ

った。

第 26 回共催講演会

「ナラティブと文化－東アジアの視点から (Narrative and Culture: Perspectives from East Asia)」

企 画：やまだようこ

主 催：科学研究費プロジェクト代表山田洋子（基盤研究 A）多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発

日 時：2010 年 2 月 10 日（水）14:00-16:30

場 所：京都大学大学院教育学研究科 総合研究 2 号館 第 1 講義室

概 要：14:00-15:00

講 演 者：Prof. Yi, Byung Jun (Pusan University, Korea)

講演題目： Narrative on <cultural competency> in Korea

15:30-16:30

講 演 者：Dr. Lukas Pokorny (University of Vienna, Austria)

講演題目： 'The World has Come to an End': Chiliastic Beliefs in New Religious Movements in East Asia

成 果：Prof. Yi, Byung Jun は、釜山大学に所属し、生涯史研究を教育学の立場から行っている。

本講演では、韓国での「文化的能力」の語られ方について発表がなされた。研究プロジェクトから得た結果をもとに、「文化的能力」の概念、カテゴリー、要素について、詳細に報告された。Dr. Lukas Pokorny はウィーン大学の Department of East Asian Studies に所属し Vice Director of the Studies Program をつとめる若手の人類学者である。東アジアの新宗教運動について研究を行っている。本講演では、まず、この 200 年間に興った新宗教に関する説明がなされ、次いで、日本、韓国、中国、ベトナムなど東アジアをフィールドにした新宗教運動の比較研究に関する報告がなされた。学内外から 15 名（うち外国人参加者 2 名）の参加者があった。京都大学の教員や大学院生との国際交流の場となり、双方に大きな刺激を与えた。

第 27 回共催講演会

「日本ワーキングメモリ学会第 7 回大会シンポジウム」

企 画：苧阪直行

主 催：日本ワーキングメモリ学会

共 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日 時：2010 年 3 月 6 日 15:30-17:30

場 所：京都大学文学部新館第 7 講義室

題 目：ワーキングメモリと未来社会

講 師：苧阪直行（京都大学大学院・文学研究科）

概 要：ワーキングメモリ(working memory)は注意の時空間的かつ多重的なスイッチングにより制御されている。その意味でワーキングメモリとはワーキングアテンション(working attention)であるともいえる。ワーキングアテンションは社会も含めた環境へのフレキシブルな適応の担い手でもあり、これによってヒトは進化や成長を遂げてきた。とくに、最も成熟が遅く、最も衰退が早いといわれる前頭前野(prefrontal cortex: PFC)と頭頂葉

などとリンクした脳の領域がワーキングアテンションにかかわるといわれる。この領域は40億年の脳の進化の最前線にあり、現在進行形で進化を先導しつつあるといえる。ワーキングアテンションは最適適応のためのプランをたて、それを実行に移すための準備を行う役割を担うが、これを実現するためにバッファとして作動するのがワーキングメモリである。ここ十年ほど大学生のワーキングメモリの容量の個人差を観察してきたが、リーディングスパンテストなどで測ったワーキングメモリの成績が著しく低下していることがわかってきた。携帯電話をはじめとする情報機器がもつ、使い勝手のよい外部記憶の増加が内部バッファとしての「脳のメモ帳」の機能劣化をもたらしていることが考えられ、教育上もシリアスな問題になりつつあるというのが筆者の印象である。しかも、これは未来の情報化社会がワーキングメモリの退化を促す可能性をもつという点で重要である。高度情報化社会が進展するほどワーキングアテンションへのムダな過負荷が生じ、ワーキングメモリの機能低下が促進されるという構造が見えてくる。ヒトの知性の進化を先導し、創造的な思考を促し、適応的な社会脳を発達させてきたワーキングメモリの危機が未来社会に落としつつある影について考えてみたい。

成 果：ワーキングメモリ研究の現状とその将来について概観した。さらに、現代の高度情報化社会がワーキングメモリに及ぼすマイナスの影響について考えた。ワーキングメモリの機能が携帯などの外部記憶とどのように係わるのかを中心に、パネラー数名と問題点を洗い出して論議を行い意義のある集会となった。学内外から52名（うち外国人参加者0名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

■ シンポジウム

第4回主催国際シンポジウム

「Kyoto-Lancaster Joint International Symposium on Psychological Science - New Directions of Memory Research」

企 画：齊藤 智・大塚結喜

主 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」ユニット A
およびランカスター大学心理学部

共 催：Department of Psychology, Lancaster University, UK

日 時：2009年7月24日（金）10:20-18:00

場 所：京都大学時計台記念館2階 国際交流ホール II

概 要：10:20 - 10:30 Opening Remarks: Masuo Koyasu (Kyoto University, Japan)

Short-term and working memory (Chair: Satoru Saito)

10:30 - 11:00 Verbal control of action: A working memory approach

Satoru Saito (Kyoto University, Japan)

11:00 - 11:30 Feature binding and updating in visual short-term memory for objects

Jun Saiki (Kyoto University, Japan)

11:30 - 12:00 Individual differences in working memory capacity and the Go/No-Go task

Randall Engle (Georgia Institute of Technology, USA)

Memory in the real world (Chair: Moises Kirk de Carvalho Filho, Kyoto University)

13:30 – 14:00 The efficacy of a modified strategic use of information (SUE) technique for increasing cognitive load during investigative interviews with suspects.

Alex Sandham (Lancaster University, UK)

14:00 – 14:30 Eliciting accurate eyewitness information? Change temporal order versus free recall.

Coral Dando (Lancaster University, UK)

14:30 – 15:00 Why do recall interventions fail? Interactions between clustering and confabulation in witness memory

Tom Ormerod (Lancaster University, UK)

Memory and awareness (Chair: Shintaro Funahashi, Kyoto University)

15:00 – 16:00 Visual awareness without prefrontal consciousness

Naoyuki Osaka (Kyoto University, Japan)

16:00 – 16:30 Memory awareness in tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*)

Kazuo Fujita (Kyoto University, Japan)

16:30 – 17:00 Are false memories adaptive?

Mark Howe (Lancaster University, UK)

17:00 – 17:10 Closing Remarks: Tom Ormerod (Lancaster University, UK)

成 果: 本シンポジウムは、2006年9月にランカスター大学において開催されたシンポジウム「心理科学の新展開 (New Advances in Psychological Science)」と「認知発達研究の視座 (Perspectives on Cognitive Development)」に続く、ランカスター大学心理学部との合同シンポジウムであり、今回は特に、記憶に関する心理学的研究の最新の動向を報告、議論することを目的としていた。ランカスター大学から4名の教員が、京都大学側からも4名の教員が、各研究室で得られた最先端の研究成果を発表した。また、ワーキングメモリ研究で国際的に著名なジョージア工科大学の Randall Engle 教授をゲストスピーカーとして招待した。午前中は、ワーキングメモリや短期記憶など、主として基礎的な記憶研究に関する発表が行われ、午後には、目撃者の証言や記憶の適応的問題等、応用的テーマが扱われるとともに、意識や動物のメタ記憶等、幅広い文脈から記憶に関する問題が論じられた。大学院生も含め国内外から約50名の参加者を得て、活発な議論が行われた。



写真4: Kyoto-Lancaster Joint International Symposium の参加者

第 5 回主催国際シンポジウム

「International Symposium between the Institute of Education, University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University」(京都大学大学院教育学研究科・ロンドン大学教育研究所第三回国際会議) "Happiness and personal growth: Dialogue between philosophy, psychology and comparat」

企 画：齋藤直子 Paul Standish (ロンドン) 大学教育研究所)

主 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」ユニット C
および英国ロンドン大学教育研究所

共 催：京都大学大学院教育学研究科大学院GP・ロンドン大学教育研究所

日 時：2009 年 9 月 21 日 (月) 9:00-18:00—9 月 22 日 (火) 9:15-12:45

場 所：ロンドン大学教育研究所

題 目：1. Three components of happiness; Synthesising a sense of competence, a vital sense of life, and a sense of accomplishment 2. Lessons from a New Science: On Teaching Happiness in Schools

講 師：1. 子安増生 教授 2. Professor Judith Suissa

概 要：本年度のテーマは、” Happiness and personal growth: Dialogue between philosophy, psychology and comparative education” (幸福と個の成長：哲学、心理学、比較教育学の対話) であり、このテーマに即して、両大学から、教員、研究員と大学院生がそれぞれの研究分野の視点から研究発表を行った。京大と IoE の国際交流は三年目を迎え、教員、研究員、学生の交流も発展的に培われてきた。毎年、参加者の幅は増え、交流の輪は確実に広がっている。プログラムの構成は、第一回、第二回の会議と同様、京大側と IoE 側の参加者を組にし、対話形式を重視するものとした。本年度は、教員による個別発表の他は、主として京大側の主発表に対して IoE 側大学院生・研究員に応答発表をしていただいた。さらに本年度の会議では、新たな特別企画として、西田幾多郎の『善の研究』の英語版 *An Inquiry into the Good* をテキストとし、これについてグループディスカッションを行うという機会を設けた。京大側にとっては、イギリスの大学院でのゼミの形式を経験するという意味をもち、またイギリス側にとっては、日本を代表する京都学派の思想の系譜から学ぶという、異文化間交流の意味をもつものであった。

成 果：今回の企画の成果として、第一に、テーマを「幸福と個の成長」に絞り、これに対して心理学的、哲学的、比較教育的な学際的対話が行われたことが挙げられる。学校の教員研究者の発表は、イギリスの教育事情について実践的な視座を与えるものであり、理論研究と実践的視点の交流もなされた。第二に、参加者の文化的背景の多様性が挙げられる。IoE は、イギリスの教育研究の中心地であり、ヨーロッパのみならず世界各地から学生や研究者を受け入れている。今回の会議でも、イギリス人のみならず、台湾、カナダ、韓国など様々な国から IoE で研究を行なう、幅広い世代の人々が集い、日本側参加者と交流を行なうことによって、小規模ではあるが日英の枠を超えて、国際会議の名にふさわしい異文化間対話の場が成立した。第三に、会議全体を通じて日本側参加者が共通に経験したことは、事前準備が不可能な部分での質問や議論の展開にその場で身を投じ、英語でこれに参加し応答すること、場合によっては新たに問いを生み出すことの難しさ、そしておもしろさである。自らの研究を単一言語的な視点にとどめず、他言語に翻することができる、広義の翻訳能力の育成が今後の大学院教育の課題であると考えられる。参加人数は、1 日につき約 30 名、そのうち外国人参加者は、約 22 人であった。

第6回主催国際シンポジウム

「日韓メディア研究大学院生セミナー」

企画：佐藤卓己

共催：韓国・西江大学大学院新聞放送学科

日時：2010年2月6日（金）13:00-17:00

場所：京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールⅢ

概要：本セミナーは、韓国・西江大学大学院新聞放送学科と京都大学大学院教育学研究科の大学院生（若手メディア研究者）の学術交流を目的として行われた。西江大学はコミュニケーション学部新聞放送学科、言論大学院、情報通信大学院などを擁する韓国屈指のメディア研究拠点である。今回、韓国側は言論情報専攻・ヘルスコミュニケーション専攻の院生が発表を行い、日本側は生涯教育学講座（メディア論）・教育学講座（教育史）・高等教育開発論の院生も発表に加わった。

成果：言語の壁を乗り越え、隣国・韓国のメディア・コミュニケーション研究者と交流できたことは、今後研究の第一線にたつ大学院生にとって貴重な経験になったと考えている。学内外から31名（うち外国人10名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

第7回主催国際シンポジウム

「“Happiness, Emotion, Language” Toward an International Comparative Study」

企画：Prof. Shoko Suzuki(Kyoto University, Japan), Prof. Christoph Wulf(The Free University of Berlin, Germany)

主催：Kyoto University GCOE, The Free University of Berlin COE

日時：2010年2月9、10日

場所：The Free University of Berlin, Habelschwerter Str. 45, Cluster "Languages of Emotion", Conference Room

概要：京都大学GCOEとベルリン自由大学のCOEとの合同シンポジウム。日独幸福感比較調査、日英のこれまでの共同研究、ドイツ側COEおよび日本側COEのそれぞれの研究成果発表、今後の共同研究について話し合われた。プログラムは以下の通り。

Tuesday, 09.02.2010

10:00-10:30 Introduction

Prof. Masuo Koyasu (Kyoto University), Prof. Chr. Wulf (FUBerlin), Prof. S. Suzuki (Kyoto University)

10:30-12:00 Prof. Chr. Wulf, Dr. Ingrid Kellermann, Dr. Iris Clemens, Dipl. Paed. Martin Bittner (FUBerlin)

“Cluster Project Respect, esteem, learning atmosphere, achievement. Processes of emotion regulation in the classroom”

12:00-13:30 Lunch

13:30-15:15 Prof. Chr. Wulf, Dr. I. Kellermann (FUBerlin) Prof. S. Suzuki (Kyoto University), Fumio Ono (Assistant Prof., Kyoto University)

“Happiness as staging and social action in Family and School - a comparative German-Japanese Study”

15:15-15:45 Coffee (or Tea) break

15:45 -16:15 Dr. Ruprecht Mattig (Assistant Prof., Kyoto University)
 16:15-16:45 Prof. Jun Yamana (Kyoto University)
 16:45-17:30 Discussion: Toward an International Comparative Study
 Wednesday, 10. 02. 2010
 9:30-10:15 Prof. Gunter Gebauer (FUBerlin)
 10:15-11:00 Prof. Paul Standish (University of London)
 Happiness: Essays, Projects, Programmes, Plans
 11:00-11:30 Prof. Naoko Saito (Kyoto University)
 Becoming cosmopolitan, achieving happiness; philosophy as
 translation
 11:30-12:00 Prof. Masuo Koyasu (Kyoto University)
 Development of understanding another's cognition and emotion in young children
 12:00 Farewell-Lunch

成 果：2 日間にわたるシンポジウムの延べ参加者数は70名。連合王国 University of London
 からは Prof. Paul Standish, 日本側からは、Prof. Masuo Koyasu, Prof. Naoko Saito,
 Prof. Jun Yamana, Prof. Shoko Suzuki, 小野助教、Mattig 助教、院生4名、他はイン
 ドから1名、フランスから1名が参加した。ベルリンで行われた国際シンポジウムであ
 り、日本人10名を除く60名はすべて外国人。



写真5：第7回主催国際シンポジウムのフロア風景

第3回主催シンポジウム

「第3回京都大学－慶應義塾大学合同シンポジウム」

主 催：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」および慶
 應義塾大学グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」

日 時：2010年1月9日（土）13時00分～17時00分

場 所：慶應義塾大学三田キャンパス（西校舎519教室）

題 目：子どものこころの発達と教育：最新の研究成果に学ぶ

概 要：司会者：山本淳一（慶應義塾大学文学部）話題提供者：明和政子（京都大学大学院教育
 学研究科）、皆川泰代（慶應義塾大学大学院社会学研究科）、安藤寿康（慶應義塾大学文

学部)、松下佳代(京都大学大学院教育学研究科)

本拠点と密接に提携を行っている慶應義塾大学グローバル COE との毎年実施している合同シンポジウムの三回目であり、東京で開催される今回は「子どものこころの発達と教育」をテーマとする一般向けのシンポジウムとした。京大と慶大から各2人ずつの話題提供者が発表し、討論には両拠点に縁の深い伊藤美奈子教授(慶應義塾大学教職課程センター)が指定討論を担当した。

成 果 : 発達と教育をめぐって行われてきたグローバル COE の2拠点の最新の研究成果が、一般の聴衆にもわかりやすく説明された。心理学、教育学、言語医学などの分野の融合的分野において、子育て、学校教育などの具体的問題をめぐって議論されたことは意義深い。首都圏を中心に117名(うち外国人参加者0名)の参加者があり、活発な議論が行われた。



写真6 : 左から、明和、皆川、安藤、松下、山本、子安、伊藤各教授

第5回共催国際シンポジウム

「京都大学大学院教育学研究科公開シンポジウム「日韓の教育改革の行方」

企 画 : 田中耕治・杉本均

主 催 : 教育実践コラボレーションセンター

共 催 : 京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日 時 : 2009年7月31日(金) 14:00-17:00

場 所 : 京都大学芝蘭会館別館

題 目 : 「韓国における教育改革の動向」「日本における教育改革の動向」「日本における教育評価改革の動向」

講 師 : ① 白淳根② 磯田文雄③ 西岡加名恵

概 要 : ① 白淳根「韓国における教育改革の動向」(韓国・ソウル大学教育学科教授)

21世紀の国際競争の時代、知識の高度化・情報化の時代を迎え、韓国では長期的・総合的な人材育成のための教育改革が推進されている。その中でこれまでの暗記中心の教育から創意的で個性的な側面を重視した教育改革が計画されている。その中心は学習者の特性や希望に合わせる学校支援システムであり、教育の質を再検討し、教育条件による格差を緩和し、学習者の権利を保障しようとするものである。初等・中等教育の学校では学習者の満足を増大させるために、私教育の費用を削減するための援助を行い、学

校に自律性を持たせ、学校を多様化することによって学校選択権を保障しようとしている。大学においても学生の能力や必要などに応じた認定制度を導入し、教育年限の自由化が行われている。韓国における人材大国建設のための戦略は、1. 学校の自律性・多様性の拡大、2. 教育福祉の拡大、3. 科学技術・エコ技術の追求、4. 英語を話す世界水準の優秀人材育成、とまとめられる。

② 磯田文雄「日本における教育改革の動向」(文部科学省研究振興局局长)

21世紀の日本の教育改革の方向性は、1. 市場原理と競争原理、2. 地方分権と学校の自律性の確立、3. 民主的な学校作り、4. 実定法としての教育基本法に基づく義務教育中心主義、とまとめられる。1980年代から続く新自由主義的な構造改革に基づき、ある程度の格差の拡大を認めながら、卓越性の追求、才能伸長のための教育が模索されている。またこれまでの中央集権の教育行政から、地方自治体や学校に様々な教育権限を移管することによって特色ある学校づくり、教育の消費者の立場に立った教育が追求されている。平成18年の教育基本法の改正は理念法ではなく、かなり具体性のある実定法になっており、国が小中を含めた義務教育に責任を負うという態度が明確になっている。今後は国民国家を単位とした教育の概念から脱却した改革の方向性が必要であろう。

③ 西岡加名恵「日本における教育評価改革の動向」(京都大学大学院教育学研究)

2011年度以降に本格的な実施が予定されている日本の新学習指導要領における、児童生徒の学習評価の在り方に関する議論について考察した。ここでの評価の在り方の論点としては、1. 「活用」をどのように位置づけるか、2. 「関心・意欲・態度」をどう捉えるか、3. 総合評価は必要なのか、という3点である。新指導要領では、学習における「習得」、総合における「探究」とをつなぐものとして、教科における「活用」を重視する特徴がある。これは経験主義と系統主義のバランスをとる考え方で評価できる一方、的外れの評価を導く可能性など、いくつかの懸念も予想されている。「関心・意欲・態度」の観点については、その中身に様々な内容が考えられ、評価が難しいという声多い。この評価は重要であるが、カリキュラム全体として育てる内容であり、個々の教科の中に位置づけると混乱が予想される。また総合の「評価」は指導には生かしくなく、そのために観点別の評価が形骸化してしまうという指摘があるが、その必要性については、観点別の評価が正しく出すことができるかどうかによっている。「目標に準拠した評価」を充実させていくために、日本においてもパフォーマンス・スタンダードの開発が求められている。

成 果：内外参加者60名(外国人2名)

第6回共催国際シンポジウム

「第5回犬山国際比較社会認知シンポジウム」

企 画：友永雅己、林美里、足立幾磨、松井智子、板倉昭二、田中正之、明和政子、開一夫(東
京大学)、杉浦元亮(東北大学)、佐藤徳(富山大学)

共 催：京都大学霊長類研究所共同利用研究会

日 時：2009年12月19-20日

場 所：京都大学霊長類研究所

概 要：Program

Saturday, December 19

Hyun-joo Song (Yonsei University) Psychological reasoning in infancy

Yusuke Moriguchi (Joetsu University of Education) Young children's social learning from a robot

J. Kiley Hamlin (Department of Psychology, Yale University) The enemy of my enemy is my friend: Infants interpret social behaviors in context

Takaaki Kaneko (Kyoto University) Relative contributions of kinematic information and goal representation for perception of self-agency in humans and chimpanzees

Shinya Yamamoto (University of Tokyo) Chimpanzees' flexible helping upon request

Jennifer J. Pokorny (Yerkes National Primate Research Center) Social cognition in capuchin monkeys: Individual recognition from faces

Pier Francesco Ferrari (University of Parma) Mirroring other minds. New insights from neuroscience to understand monkey cognitive development

Harumi Kobayashi (Tokyo Denki University) Language acquisition from a social cognitive perspective: How children learn word meanings with non-linguistic cues

Sunday, December 20

Hiromi Kusumoto (Kyushu University) Communicative behavior reflecting the perception of others' cognitive environment in infancy

Nozomi Naoi (JST; Kyoto University) Assessing cortical response to infant-directed speech in high-risk neonates

Yuriko Oshima-Takane (McGill University) Early word learning in young children

Naoko Tokimoto (RIKEN BSI) Object manipulation by a social rodent, degu (*Octodon degus*)

Yo Morimoto (Kyoto University) Do capuchin monkeys (*Cebus apella*) understand emotional meanings in conspecifics expression?

Naotaka Fujii (RIKEN BSI) Body scheme and social rule

Fumihiro Kano (Kyoto University) The comparative eye-tracking study in chimpanzees and humans

Shun Itagaki (University of Tokyo) Human error processing interacts with social information: Evidence from ERP studies

Koji Kuraoka (Kyoto University) Autonomic reaction and neuronal response to facial expression and vocalization

Christoph D. Dahl (Max Planck Institute for Biological Cybernetics) The behavioral hallmarks of face processing in man and monkey

成 果：これまで4回にわたって、社会的認知の比較研究とその関連領域に関する共同利用研究会を開催してきた。はじめの3回は個別の大きなテーマを設定しての研究会だったが、昨年度はより多くの方々による幅広い研究成果を発表していただき、議論を行うという形式をとった。関連する領域とはいえ手法も対象も異なる研究者が一堂に会して議論と交流を深める本研究会は着実に学界にも認識される存在として成長しつつある。そこで、今回も第5回という形で特に限定的なトピックを設定することなく、比較社会認知研究および関連する多様な研究領域から幅広く講演者を募り研究会を開催した。なお、今回はgCOEなどのサポートにより、海外からも5名の研究者が参加し、第1回以来の英

語発表による国際シンポジウムとした。18名の口頭発表者と22名のポスター発表者がそれぞれに興味深い発表を展開した。全体の参加者は約60名で2/3の参加者が何らかの形で自身の研究を発表した。このように、国際的な研究者と議論し自身の成果を発表する場として今後ともgCOE等の支援のもと本シンポジウムを継続していきたい。文責：友永雅己（霊長類研究所）

第7回共催国際シンポジウム

『21世紀における日本の教育改革—日中学者の視点—』出版記念シンポジウム」

企画：田中耕治・杉本均

主催：教育実践コラボレーションセンター

共催：京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2010年3月17日(水) 10:00-14:00

場所：中国北京・中央教育科学研究所

概要：・挨拶

田慧生（中央教育科学研究所副所長）

辻本雅史（京都大学大学院教育学研究科）「本研究科と中央教育科学研究所の交流の発展にむけて」

田中耕治（京都大学大学院教育学研究科）『21世紀における日本の教育改革』発刊の意義」

・書評（高峽・李東・韓民）

・記者会見（杉本均ほか）

・記念講演 高見茂教授（京都大学大学院教育学研究科）「21世紀の日本教育改革の動向」

成果：シンポジスト中国側14名、日本側16名、記念講演参加者約30名で行なわれた。中国側の「合作本は終わりではなく通過点」という発言や、辻本先生より「形式より実のある交流を」という言葉が、今回のシンポジウムが今後への双方の決意を示している。高見先生の講演はじめお互いの共通認識や課題の共有が、これからの深い交流のための財産になっていくと思われる。質問も鋭く高いレベルでの研究交流が可能と感じました。シンポジウム以外に日中共同教育研究センター・北京師範大学も、具体的な今後の共同研究のことが話し合われた。今後を担う院生たちが関わることもできたのも成果であった。

第4回共催シンポジウム

「ロンドン・プロジェクト—医療と心理支援の多文化ナラティブ方法の探求」

企画：やまだようこ

主催：科学研究費プロジェクト代表山田洋子（基盤研究A）多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発

日時：2009年6月29日（月）-7月3日（金）

場所：UK ロンドン：London Deaner, Kings college/University College of London, Tavistock Centre, Anna Freud Centre

概要：Day 1: Tuesday 30th June 9.30-17.00

Title: Narrative Skills for Clinical Teachers

Convenors: Dr. John Launer and Dr. Helen Halpern (London Deanery)

Facilitators: Dr. Lisa Miller and Dr. Sue Elliott (London Deanery)

Day 2: Wednesday 1st July 9.30-17.00

Title: Symposium on Narrative Research in Health and Illness

a.m.: Council Room, University College London, Gower Street, London WC1N 6BT

p.m.: Lecture Theatre 1.03, Malet Place Engineering Building, London WC1E 7JE

Convenors: Prof. Trisha Greenhalgh (University College London), Prof. Brian Hurwitz (Kings College London)

Presenters: Prof. Trisha Greenhalgh (University College London), Prof. Yoko Yamada (Kyoto University), Prof. Seiji Saito (University of Toyama), Prof. Brian Hurwitz (Kings College London), Dr. Takashi Yoshinaga (University of Toyama), Ms. Kazumi Takeya (Kyoto University), Ms. Naoko Nishiyama (Kyoto University), Dr. Chizumi Yamada (Kyoto University), Mr. Kazuma Takeuchi (Kyoto University), Dr. Neil Vickers (Kings College London)

Day 3: Thursday 2nd July 9.30-17.00

Title: Narrative in Mental Health Care: Applications in Therapy and Training

Convenor: Dr. John Launer (Tavistock Clinic)

Presenters: Dr. Charlotte Burck (Tavistock Clinic), Ms. Yuko Yasuda (Kyoto University), Prof. Akira Nakagawa (Osaka Sangyo University), Dr. Norifumi Kishimoto (Kyoto University), Prof. Corinne Squire (Centre for Narrative Research, University of East London), Dr. Helen Halpern (Tavistock Clinic), Dr. Hideaki Matsushima (University of Shiga-Prefecture)

Facilitators: Dr. John Launer, Dr. Helen Halpern, Dr. Hiroshi Amino, Dr. Hideaki Minagawa (Tavistock Clinic)

Day 4: Friday 3rd July 13.00-15.45 (optional)

Title: Child psychotherapy and child psychotherapy training and research: an introduction

13.00: Anna Freud Centre, 12 Maresfield Gardens, London NW3

14.30: Tavistock Centre, 120 Belsize Lane, London NW3 5BA

Convenor: Ms. Junko Wakitani (Tavistock Clinic)

成 果 : 1 日 目 に は 、 ナ ラ テ ィ ヴ ス キ ル の ト レ ー ニ ン グ を 目 的 と し た ワ ー ク シ ョ ッ プ が 実 施 さ れ た 。 最 初 に 、 N H S (N a t i o n a l H e a l t h S e r v i c e : 国 営 医 療 保 険 制 度) や G P (g e n e r a l p r a c t i t i o n e r : 一 般 開 業 医) な ど と い っ た U K の 医 療 制 度 、 従 来 の 医 学 教 育 の 特 徴 、 N B M (N a r r a t i v e B a s e d M e d i c i n e) な ど に つ い て の 説 明 が な さ れ た 。 後 半 に は 、 困 難 ケ ー ス の ス ー パ ー バ イ ズ の デ モ ン ス ト レ ー シ ョ ン が 行 わ れ た 。 医 師 あ る い は 心 理 臨 床 に 携 わ る 参 加 者 に 、 ケ ー ス の 提 供 が 依 頼 さ れ 、 立 候 補 に よ っ て 扱 う ケ ー ス が 決 定 さ れ た 。 そ の ケ ー ス に 対 す る ス ー パ ー バ イ ズ の デ モ ン ス ト レ ー シ ョ ン を 、 参 加 者 全 員 で 観 察 ・ 共 有 ・ 議 論 す る と い う 形 式 で 実 施 さ れ た 。 本 ワ ー ク シ ョ ッ プ は ク ロ ー ズ ド な 形 式 で 行 わ れ 、 学 内 外 か ら の 20 名 (う ち 外 国 人 参 加 者 11 名) の 参 加 者 が あ っ た 。 講 義 と 実 習 が 組 み 合 わ さ れ た 、 非 常 に 刺 激 的 で 有 意 義 な ワ ー ク シ ョ ッ プ で あ っ た 。 2 日 目 と 3 日 目 に は 、 健 康 と 病 い に 関 す る ナ ラ テ ィ ヴ 研 究 や 、 メ ン タ ル ヘ ル ス ・ ケ ア に 関 す る ナ ラ テ ィ ヴ 研 究 が 複 数 発 表 さ れ た 。 各 日 と も 、 学 内 外 か ら 40 名 (う ち 外 国 人 参 加 者 19 名) の 参 加 者 が あ り 、 非 常 に 活 発 な 議 論 が 展 開 さ れ た 。 4 日 目 に は 、 ア ン ナ フ ロ イ ト セ ン タ ー な ら び に タ ビ ス

トック・クリニックを見学し、各現場における、子どもを対象とした心理臨床やインタビュー、心理臨床トレーニングに関する紹介・報告を受けた。学内外から7名（うち外国人参加者0名、現地在住の日本人1名）の参加者があった。各現場で勤務する職員や心理の専門家との間で、実のある密な質疑応答が活発に行われた。

第5回共催シンポジウム

「日本理論心理学会第55回大会公開シンポジウム」

企画：苧阪直行・大塚結喜

主催：日本理論心理学会

共催：京都大学グローバル COEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2009年11月7日 14:15-17:25

場所：京都大学文学部新館第3講義室

概要：テーマ：人はなぜ笑うのか？

企画・司会：苧阪 直行（京都大学大学院文学研究科）

14:15-14:25 苧阪直行 開会挨拶 「笑い和社会脳 –イントロダクション–」

14:25-15:15 森下伸也 「日本人の笑い和社会文化 –宗教社会学的立場から–」

15:15-16:05 野澤孝司 「社会神経科学としての笑い研究 –ユーモアの神経科学研究の視点から–」

16:05-16:55 森正義彦 「人はなぜ笑うのか？ –理論心理学的考察：笑いのメカニズムについて–」

16:55-17:25 全体討論

成果：笑いについて文化・宗教的側面から考えるとともに、理論面からも検討を行なった。さらに、社会脳の視点から笑いがもつ社会的・生物的側面を探った。笑いやユーモアの脳内機構についてのはじめての企画であり、意義ある集会であった。学内外から32名（うち外国人参加者0名）の参加者があり、活発な議論が行われた。

後援シンポジウム

「霊長類の心と社会」

企画：松沢哲郎

主催：京都大学霊長類研究所

共催：日本学術会議心の先端研究拠点

日時：2010年3月22-23日 9:00-18:00

場所：百周年時計台記念館 国際交流ホールⅡ

講師：Professor Frans de Waal (Emory University, USA), Professor William McGrew (Cambridge University, UK)

概要：概要：日本学術振興会の先端学術交流事業により、3人の著名な外国人学者を日本に招聘するとともに、それと関連した若手の外国人研究者（ポスドクないし大学院生）8人を日本に招聘した。今回の国際シンポジウムでは、そのうちの2名の著名研究者、すなわちフランス・ドゥバルとウィリアム・マグルーの2名を主賓として、霊長類の心と社会をテーマに国際シンポジウムをおこない、研究の最前線の意見交換をおこなった。

成果：外国人参加者は、主賓の2名に加えて、リンダ・マーシャント教授（米、マイアミ大学）の3名がシニアの研究者である。若手は7人が参加し、いずれも口頭発表した。ケンプ

リッジ大学から4人（パコ・ベルトラーニ、ソーニャ・コスキー、カトリーナ・コープス、スザーナ・カルバーリョ）、エモリー大学のマリーニ・サチャック、マックスプランク進化人類学研究所のアンナ・セラーノ、ニューリスボン大学のキムバリー・ホッキングスの7人である。すなわち外国人の合計は10人だった。なお霊長類研究所の外国人大学生のアンドリュー・マッキントッシュ（カナダ）、クリストファー・マーチン（米国）、ユ・リラ（韓国）の3人が加わった。それから、韓国から参加したジェイ・チェ教授（梨花女子大学）とその大学院生4名の5名が加わった。つまり、外国人の参加者の合計は18人である。日本人参加者は約40人。口頭発表とポスター発表により最新の成果を交換した。

■ ワークショップ

第7回主催ワークショップ

「感情学 affectology の展望」

企画：鈴木晶子・藤田和生

日時：2009年7月11日（土） 9:50-18:00

場所：京都大学文学研究科新館第1講義室

概要：感情という概念は、思想史的には、パッション、受苦、情念、情動、情緒、美を感じる能力、趣味、判断力、審美眼、感性といった様々な概念と親近性をもつ。いわば、論理や理性といったものと対立する概念として、その時代の思想状況に合わせて、論理では押えられないもの、理性とは異なるもの、理性にとって他なるものを指し示す名称としての働きをもっていた。とはいえ、感情に関わる概念群は、例えば人間を人間たらしめているもの、人間の人間らしさの証明をし得るものとして、人間性、人間的なるものを象徴する重要な要素としても位置づけられてきた。しかし、そうした人間中心の世界観もまた今や崩れてきている。生きものにとっての感情とは何か、生きものの知恵として感情をみることは可能か？ これまで、哲学や歴史、心理学、脳研究など人間に関する諸科学においてそれぞれの方法論によって感情にアプローチしてきた諸知見をもちより、感情の機能、進化、発達、神経機構、病理、感情と歴史、文化、社会、感情と教育、社会政策などをキーワードとした新たな研究領域を拓くことは可能かもしれない。こうした関心から、今回、感情についての科学・学術という意味での総合的な領域（Science and Humanities）を立ち上げていくための契機となるような対話の場を企画した。

プログラム

09:50 ご挨拶 藤田和生（京都大学文学研究科）

10:00～12:00 セッション1：感情科学 Affective Science

司会 藤田和生（京都大学文学研究科）

10:00 楠見 孝（京都大学教育学研究科）

ノスタルジア：記憶・感情、消費者行動と世代差

10:30 板倉昭二（京都大学文学研究科）

感情発達研究と子ども観の変遷

11:00 船橋新太郎（京都大学こころの未来研究センター）

ミラーニューロン：感情研究に貢献するか？

11:30 討論

遠藤利彦（東京大学教育学研究科）

13:30～15:30 セッション2：感情の人文学（Humanities of Affect）

司会 鈴木晶子（京都大学教育学研究科）

13:30 鈴木晶子（京都大学教育学研究科）

感情と接触 ―思想史の立場から

14:00 佐藤卓己（京都大学教育学研究科）

世論と感情 ―メディアと公共性の視点から

14:30 矢野智司（京都大学教育学研究科）

擬人法の感情論

15:00 討論

星乃治彦（福岡大学）

山名 淳（東京学芸大学）

16:00～17:30 セッション3：ラウンドテーブル討論「感情学の構築に向けて」

司会 藤田和生（京都大学文学研究科）

報告者（アルファベット順）藤田和生・船橋新太郎・星乃治彦・板倉昭二・楠見 孝・
佐藤卓己・鈴木晶子・山名 淳・矢野智司

17:30 ご挨拶 鈴木晶子（京都大学教育学研究科）

成 果：報告者を含め参加者は学内外から50名（うち外国人は1名）。感情学の可能性について、学際的な見地から精力的な議論を行った。とりわけ、自然科学的観点、人文・社会学的観点の双方を視野に入れることで、感情という現象を捉えるために、どのような新たな視角が獲得できるかについて、それぞれの研究分野との繋がりから意見聴取を行った。大型プロジェクトとして感情学を今後さらに展開していくことを確認した。

第8回主催ワークショップ

「子供を育てることの普遍性と特殊性～文化と進化とこころの未来（2）」

企 画：平石界・内田由紀子

日 時：2009年8月28日（金）12:30～14:30

場 所：立命館大学

概 要：子供を産み育てるという営みは、人類以前から何億年も止むことなく続いてきたものである。そこには霊長類やその他の動物とも共通する普遍的な面もあれば、ヒトだけに特徴的な面、そして時代や文化によって変化してきた面があるだろう。話題提供者の柏木と柿沼は、現代に生きる人間（日本人・中国人・米国人）やチンパンジーなどの「子育て」の実証データから、子育てを形作る普遍性や文化特殊性について検討を行ってきた。また沢山は江戸時代の人々の子産み・子育てと、その背後にある「いのち」の問題を研究している。このような視点からは、同じ日本という土地に暮らした我々の遺伝的祖先である江戸の人たちが持つ共通性と、現代とは異なる文化的要素の双方が、子育てに与える影響を知ることが可能であろう。三名の研究者の報告を軸に、「子育て」にまつわる人間心理の普遍性と特殊性、そして文化による差異を検討する。生物が生物であるためのもっとも基本的な「生殖」という命をつなぐ行為において、人間性（Human Nature）が、いかに柔軟に変化しうるのか、そして変化しない要素は何であるのかを考えたい。

■話題提供者

柿沼美紀（日本獣医生命科学大学）

沢山美果子（岡山大学）

柏木恵子（東京女子大学）

■指定討論者

平石界（京都大学こころの未来研究センター）

成 果：柿沼美紀氏は、ラットやチンパンジーにおける「子育てスイッチ」の研究を紹介することを通じ、ヒトと他の種で子育てについて共通する点、異なる点を議論した。またモンゴルの子育てにおける父親の役割についても紹介し、文化による影響についても論じた。沢山美果子氏は、近世日本（江戸時代）の子育てを、主として氏の捨て子研究を中心に紹介し、子どもを生むこと、生まないこと、育てること、育てないことの要因を論じた。その際に「家」という単位が果たした役割についても議論した。柏木恵子氏は、現代の日本では、かつてとは異なり、子どもは、自ら選んで産むものとなっていることを指摘した。そして、自己の選択の結果として子どもを産むために、自分自身の成長といった欲求との葛藤が生じ、それが少子化に繋がっているのではないかと論じた。また心理学は「女性を家に引き留める心理学」となってはならないとの提言を行った。ワークショップの参加者は30名ほどであった。夫婦がフルタイムの共働きで、妻よりも子育てを担ってきた男性研究者からの質問・コメントも寄せられるなど、子どもを育てるという問題について、幅広い視点から議論をすることができた。

第9回主催ワークショップ

「メディアの生成—聖俗と社会関係資本から考える」

企 画：佐藤卓己

日 時：2009年11月6日（金）15:00-18:00

場 所：京都大学楽友会館 大会議室

概 要：このシンポジウムは、メディアの文化研究の新たな可能性を探るべく開催した。加藤秀俊『メディアの発生—私説 日本芸能史』は、「聖と俗をむすぶもの」というメディアの原義から、歌舞伎、落語、演歌、さらに日本各地の祝祭行事などを考察した日本文化のメディア論である。本ワークショップでは、「加藤メディア論」の集大成と呼ぶべき豊富なテキストを素材として、まず比較文化研究者・佐伯順子氏と社会心理学者・柴内康文氏に新しい「メディア」研究の可能性を語っていただいた。佐伯氏は『遊女の文化史』以来、聖俗をめぐるジェンダー研究を展開されてきた。柴内氏はパットナム『孤独なボウリング』の翻訳者でもあり、情報化と社会関係資本について研究を続けている。三人のパネル討議をふまえて、参加者全員で「メディア論」の射程を探っていった。司会と論点整理は佐藤卓己が行った。

成 果：京都大学教育学研究科におけるメディア研究の大先達である加藤秀俊（元放送教育センター長）をお招きし、また気鋭の研究者が応答する形式で、新たなメディア研究の方向を議論する場を提供することを目的としていた。司会を務めた佐藤卓己が最初に「メディア」概念の総論を行い、3人のパネラーが発表と討論を行った。それらの討議を基に最終的にフロアも含めて全体討論を行った。学内外から約80名の参加者があり、活発な議論が行われた。

第10回主催ワークショップ

「哲学への権利——教育哲学と哲学教育のあいだ」

企画：小野文生

主催：ユニットD

日時：2010年3月13日(土)

場所：京都大学大学院人間・環境学研究科

概要：国際哲学コレッジの実践、およびその実践の関係者のインタビューからなる映画『哲学への権利』が問題としているのは、端的に「哲学と教育」である。また、その活動は、ある種の教育哲学を体現するべく、ある特定のスタイルの哲学教育を実践していると理解できる。他方、近年、とくに教育学は、資格科目としての実効性と有用性が検証に付され、その出自である人文知というよりはむしろ工学モデルにのっとり社会科学へ編成され、実践的あるいは臨床的なものへとその重心をシフトしつつある。変化を迫られつつある教育学がその将来的な展望を得るために、哲学をはじめとする人文知といかなる対話を開くことができるだろうか。「教育と哲学」の関係、さらに言えば、「教育哲学と哲学教育」の関係——この二重の「と」の場所を思考するために、教育学者と哲学者の対話を通じて、教育と哲学の来たるべき道筋を照らし出す。

【第1部】上映会：13時30分～15時10分 ドキュメンタリー映画「哲学への権利：国際哲学コレッジの軌跡」（西山雄二監督、2009年）

【第2部】討議：15時30分～17時30分

パネリスト：西山雄二（東京大学大学院総合文化研究科） 森田伸子（日本女子大学人間社会学部） 大河内泰樹（京都産業大学文化学部） 山名 淳（京都大学大学院教育学研究科）

司会：小野文生（京都大学大学院教育学研究科・グローバルCOE）

【第3部】意見交換会：18時～20時30分

成果：最初にドキュメンタリー映画『哲学への権利』の上映をおこない、それをうけて討議「哲学への権利——教育哲学と哲学教育のあいだ」をおこなった。パネリストは、哲学（西山氏、大河内氏）と教育学（森田氏、山名氏）、ドイツ（大河内氏、山名氏）とフランス（西山氏、森田氏）、あるいは教員養成制度との関連から教育哲学を構想する者（山名氏）とフランス流の人文知や物を読み、書くという原初的な日常経験から教育哲学を構想する者（森田氏）、哲学の持つ実践可能性をテキスト読解と理論化のうちに見る者（大河内氏）と社会運動としての哲学の可能性を模索する者（西山氏）というふうに、さまざまな交叉（キアスム）が生じるよう工夫して選定され、その「効果」は討議のなかにもうまく反映されていた。討議課題の「教育哲学と哲学教育のあいだ」は、領域交叉への問いであると同時に、実践と制度の相互連関への問いを扱うものとして設定されていた。教育哲学は、教育という広義の日常実践において存在しうるもの（たとえば、「あの人には教育哲学があるね」などといわれる場合に想定されるもの）であると同時に、教育学の一分野として存在し、とくに教員養成制度と結びつきつつ、一つの学問領域、科目、講座、学会として制度化されている。同様の構造は哲学についても存在しているが、教育哲学の場合と比してどのような共通性と差異があるだろうか。そしてまた、哲学を「教える」という実践に関して、その共通性と差異はどのように再分節化されうるだろうか。そうした問いが、前提として根底にあった。西山氏は、「教育哲学と哲学教育のあいだ」というタイトルの「妙」についてきわめて肌理細やかな解説をほどこしながら、教育や哲学が生きるものの本質そのものに近い実践であることを参加者に想起させた。そして教育と哲学、あるいは教育哲学と哲学教育の「あいだ」を架橋するものを、(1) 限定的

／被限定的な場所、(2) プログラムないしカリキュラムの存在のパラドックス、(3) 真理への関係としての無償性、という3つの観点から論じた。森田氏は、映画に出てくる「手のカット」に着目しながら、手のしぐさはまさにことばで伝えようとして伝わらないものの象徴であり、哲学は雄弁さと同時に答えのなさや伝達不可能なものの伝達を内包していると指摘した。また、不登校の子どもたちの告白録を事例に挙げつつ、「なぜ生きるのか?」という子どもの問いに答えられるのは哲学だけであるにもかかわらず、そうした哲学教育が日本において決定的に不在であることの問題を指摘した。森田氏のことばは、われわれへの「問いかけ」であり「警鐘」であると同時に、哲学を教えることの「可能性」と「勇気」を示すものだった。大河内氏は、この映画がキリストと福音書の関係のごとく「デリダ語録」のクリシェによって塗りこめられてしまう危うさを指摘することによっていったん距離をとりつつも、国際哲学コレッジのような哲学実践が「存在しうる」という可能性をまざまざと見せてくれるという点で、映画を評価したいと述べた。また、「映画に出てくる西山監督のナレーションがなぜフランス語なのか?」と問い、国際哲学コレッジの「国際性」について、あるいはそこで展開されている「啓蒙」の性質について、鋭い疑問を投げかけた。たしかに、たとえば、かりに日本語によるナレーションをさし挟んでいたとすれば、その方が「異物としての言語」、「思考のノイズ」のようなものをこの実践の基本コンセプトである領域交叉性(intersection)と共鳴させえたかもしれない、と想像を掻き立てられた。山名氏は、臨機応変なユーモアを交えながら、しかし周到に準備されたレジュメに基づいて「なぜ教育哲学者はラディカルさにブレーキをかけてしまうのか?」という問いに向かい合う形で所論を展開した。近年の日本の教育哲学の学界内の諸言説とデリダの哲学実践とがどのように接合可能で、またどのようにすれ違うのかを丁寧に腑分けしつつ、学校という「現場」から常にチェックされる運命にある教育哲学は、現場と強く結びつくことで理論的足場が掘り崩されるという脆弱さや逆説性のようなものを抱え込んでいるため、国際哲学コレッジのような「哲学」の実験を無条件に追随することはできないと指摘。にもかかわらず、そこには「学校とは何か?」という教育制度への困難ではあるが果敢であくなく問いかけが実践されており、教育学にとってもきわめて示唆が多いことを強調した。企画者として最後に一つ強調しておこう、この映画では「哲学への権利」のみならず、「哲学への愛」もまた語られている。「哲学」が本来「知への愛」であるならば、「哲学への愛」は「知への愛への愛」というように累乗された愛を意味する。これは、知を愛する具体的な〈誰か〉への愛であり、端的にいえば〈師〉への愛、〈師〉への追慕である。映画に出てくる人々の語りは、〈師〉と〈弟子〉の共有した時間経験、記憶の経験が語りなおされたものであるが、このことはきわめて象徴的な意味をもつといえる。なぜなら、それは、哲学には「時間」が決定的に重要な契機となるという事実をわれわれに突き付けるからである。それは、「哲学に必要な時間とはどのようなたぐいのものか?」「教育に必要な時間とはどのようなたぐいのものか?」という、根本的であり、しかし大学制度の現在進行形に身を置くわれわれにとってもきわめて切実な問題に勇気をもって向き合うよう、われわれをいざなうものであろう。参加者は、文理をこえて、また学部1回生から、院生、教員まで、あるいは大学関係者のみならず高校教員や在野の実践家など一般参加者を含め、約130名が集い、予想以上に盛会となった。全体討議の時間内ではとても扱いきれないほどさまざまな意見が出され、話し足りない人々が会を終えた後も輪を作って議論を続けていた。

第4回共催ワークショップ

「メディア文化政策における《博覧の世紀》の可能性」

企 画：佐藤卓己

共 催：2009年度基盤研究（B）「ソフト・パワー構築に向けたメディア文化政策の国際比較研究（代表・佐藤卓己）」

日 時：2009年10月23日（金）17:30-20:00

場 所：京都大学教育学研究科烏丸キャンパス

概 要：福間良明・難波功士・谷本美穂（編）『博覧の世紀』（梓出版、2009年）を素材としてメディア文化政策の可能性を探究すべく企画を行った。メイン・コメンテーターには森明子・国立民族学博物館研究戦略センター教授を迎え、都市の文化人類学という視点から地方博覧会における「ローカリティ」概念の多様性について議論を行った。

コメント：森明子（国立民族博物館）白戸健一郎（京都大学大学院生涯教育学講座）松永智子（京都大学大学院生涯教育学講座）

応答：福間良明（立命館大学産業社会学部）難波功士（関西学院大学社会学部）谷本奈穂（関西大学総合情報学部）

成 果：参加者はメディア研究、社会学、歴史学、政治学、宗教学、サブカルチャーなどの視点から特に地方博覧会に焦点を絞って議論した。企業広告、パヴィリオン、家庭電化、洋服、「食」と百貨店物産展、宗教、コンパニオン、アニメ、オタク、植民地主義と大衆芸能、北海道、国防科学技術、聖戦など、まなざし、まなざされる時代の感性を読み解く可能性が示された。他にも、日本における博覧会の起源とその国際関係、博覧会と百貨店との連続性、80年代以降に増加し始めた博覧会キャラクターの意義など、今後一層深めるべき課題も提示された。学内外から21名の参加者があり、活発な議論が行われた。

若手研究者養成プログラム及び研究開発コロキウム

海外留学資金

若手研究者の育成及び海外との研究協力の推進を目的として、大学院生が、一定期間、海外の研究機関に在留し、研究を実施できるよう支援するものである。すなわち、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に、「募集人員 10 人程度（審査適格の者のみ採択）、申請額は 1 件 60 万円以内」として公募を行い、4 人の応募者の中から、厳正な審査により 4 件を採択した。下表に採択された 4 件の内容を示す。

氏名： 柴原 真知子（教育学研究科 博士課程 1 年）
研究題目： **Work-based learning** に基づく医療教育者養成プログラムの実際と受講者の学習経験についての調査研究
期間： 2009 年 10 月 3 日～2009 年 12 月 11 日
渡航先： ロンドン大学（イギリス）
交付額： 600 千円
指導教員： 渡邊 洋子

氏名： 高岡 祥子（文学研究科 博士課程 2 年）
研究題目： 物体選択課題においてイヌがヒトに示す「信頼」の日独比較
およびヒト - イヌ関係が動物観に及ぼす影響の検討
期間： 2009 年 8 月 7 日～2009 年 8 月 25 日
渡航先： ベルリン自由大学他（ドイツ）
交付額： 520 千円
指導教員： 藤田 和生

氏名： 竹内 みちる（人間・環境学研究科 博士課程 3 年）
研究題目： アメリカと日本における個人主義的価値観・生産性価値観と老い
期間： 2009 年 6 月 17 日～2009 年 9 月 14 日
渡航先： Swarthmore College 他（アメリカ合衆国）
交付額： 600 千円
指導教員： 杉万 俊夫

氏名： 竹腰 千絵（教育学研究科 博士課程 3 年）
研究題目： イギリス高等教育におけるチュートリアル の 伝 播 と 変 容
－教員の大学間移動を手がかりとして－
期間： 2009 年 8 月 4 日～2009 年 9 月 24 日
渡航先： オックスフォード大学（イギリス）
交付額： 600 千円
指導教員： 杉本 均

院生養成プログラム

院生養成プログラムは、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」の研究プロジェクトに関連する優れた研究計画に対し、科学研究費に準ずる形式で大学院生の個別研究プロジェクトを支援するものである。すなわち、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に「募集人員 20 人程度、申請額は 1 件 30 万円以内または 45 万円以内(国際学会発表を含む場合)」として公募を行い、38 人の応募者の中から、厳正な審査により 22 件を採択した。下表に採択された 22 件の内容を示す。

平成 21 年度大学院養成プログラム研究発表会は、2010 年 3 月 29 日(月) 京都大学教育学部第 1 講義室および第 2 講義室において実施された。

氏 名 研究テーマ	所属部局	学 年	指導教員	交付額(千円)
井上 烈 研究テーマ 「フリースクールスタッフにおける感情ワークスキルの内在化過程」	教育学研究科	博士 1 年	稲垣 恭子	300
梅村 高太郎 研究テーマ 「心身症の心理療法において生じる“動き”についての心理臨床学的研究」	教育学研究科	博士 3 年	河合 俊雄	450
大家 聡樹 研究テーマ 「超越について」	教育学研究科	博士 3 年	桑原 知子	300
小川 絢子 研究テーマ 「幼児期における自己の教示行為と他者の感情理解との関連性」	教育学研究科	博士 3 年	子安 増生	450
河野 一紀 研究テーマ 「心理臨床と哲学—その思想的背景と言語観からの研究」	教育学研究科	博士 2 年	田中 康裕	450
木戸 彩恵 研究テーマ 「日常的対話行為のナラティブ分析—化粧による自己 - 他者間の関係性及び軋轢の調整の検討」	教育学研究科	博士 2 年	山田 洋子	300
齋藤 桂 研究テーマ 「言語マイノリティの子どもに対する教育の公正性と適切性の研究」	教育学研究科	博士 3 年	杉本 均	300
坂野 逸紀 研究テーマ 「瞬間シーンカテゴリ認識における局所的情報処理の寄与に関する研究」	人間・環境学研究科	博士 1 年	斎木 潤	450
笹倉 尚子 研究テーマ 「心理臨床におけるフィクショナルリティ(虚構性)に関する研究—クライエントによって表現される“虚構”に着目して—」	教育学研究科	博士 3 年	皆藤 章	300
高橋 優佳 研究テーマ 「造形のあり方に関する主観的体験の心理臨床学的研究」	教育学研究科	博士 1 年	田中 康裕	450
高橋 洋一 研究テーマ 「医療従事者の伝達技法とその養成に関する教育学研究」	教育学研究科	博士 3 年	鈴木 晶子	300
田邊 亜澄 研究テーマ 「自然風景画像処理におけるワーキングメモリシステムのはたらき」	文学研究科	博士 3 年	苅阪 直行	450
田村 綾菜 研究テーマ 「対人葛藤場面における児童の謝罪の発達の变化」	教育学研究科	博士 3 年	子安 増生	450
照屋 信治 研究テーマ 「近代沖縄教育史の基礎的研究—沖縄教育会機関誌『琉球教育』『沖縄教育』の整理と分析—」	教育学研究科	博士 3 年	駒込 武	300

東畑 開人	教育学研究科	博士 3 年	皆藤 章	300
研究テーマ「心理臨床における美の問題」				
布井 雅人	教育学研究科	博士 1 年	吉川 左紀子	450
研究テーマ「「数」が選好判断に及ぼす影響」				
野村 光江	教育学研究科	博士 3 年	吉川 左紀子	300
研究テーマ「コミュニケーションにおける表情認知と人物表象に関する実験的検討」				
馬場 智子	教育学研究科	博士 2 年	杉本 均	450
研究テーマ「タイにおける価値教育の理念・政策・実践的特質に関する研究—「他者理解」という概念を中心に—」				
森田 健一	教育学研究科	博士 3 年	桑原 知子	300
研究テーマ「記憶という主観的体験に関する心理臨床学的研究」				
矢追 健	文学研究科	博士 2 年	苅阪 直行	300
研究テーマ「自己は「特別」なのか?—fMRI を用いた検討—」				
李 霞	教育学研究科	博士 3 年	杉本 均	300
研究テーマ「中国における「質素教育」に関する研究—「主体性」研究と関連させて—」				

研究開発コロキウム

研究開発コロキウムとは、大学院生の学術研究活動の発展を図るため、本プログラムに関連する優れた研究計画に対し、科学研究費に準ずる形式でその研究の一部を助成するものである。採択された研究プロジェクトは、原則として、本プログラムの関係諸委員会と調整のうえ、新たに設置される大学院科目「研究開発コロキウム」として編成され、授業時間割に組み込まれた。すなわち、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に「最大 10 件程度、申請額は 1 件 50 万円以内」として公募を行い、10 件の応募の中から、厳正な審査により 10 件を採択した。下表に採択された 10 件の内容を示す。

研究代表者：	竹家 一美（教育学研究科 博士課程 3 年）
研究分担者：	竹内 みちる、鮫島 輝美、西山 直子、竹内 一真
研究題目：	相互性としてのケア —かかわりが育む家族、教育、医療のナラティブ—
交付額：	440 千円
指導教員：	やまだ ようこ
研究代表者：	赤上 裕幸（教育学研究科 博士課程 2 年）
研究分担者：	長崎 励朗、白戸 健一郎、松永 智子
研究題目：	越境する文化政策
交付額：	440 千円
指導教員：	佐藤 卓己
研究代表者：	黄 儒芬（教育学研究科 博士課程 1 年）
研究分担者：	小原 優貴、李 霞、工藤 瞳
研究題目：	アジア・南米・アフリカにおける教育の機会均等に関する研究 —比較教育学的アプローチによる理論と実践の考察—
交付額：	440 千円
指導教員：	杉本 均
研究代表者：	桐村 豪文（教育学研究科 博士課程 2 年）
研究分担者：	松岡 朋佳、江上 直樹、中本 佳紀、劉 昕、吉井 勝彦
研究題目：	実践を支える教育行財政制度の可能性と限界(2)
交付額：	440 千円
指導教員：	高見 茂
研究代表者：	鮫島 輝美（人間・環境学研究科 博士課程 2 年）
研究分担者：	竹内 みちる、竹家 一美
研究題目：	介護における「負担」観から新たな価値観の創造に向けて
交付額：	490 千円
指導教員：	杉万 俊夫
研究代表者：	勝原 摩耶（文学研究科 博士課程 2 年）
研究分担者：	矢追 健、源 健宏、田邊 亜澄
研究題目：	情動脳とワーキングメモリの実行制御系との関連
交付額：	440 千円
指導教員：	苧阪 直行
研究代表者：	藤井 真樹（人間・環境学研究科 博士課程 2 年）
研究分担者：	勝浦 眞仁、山崎 徳子、平野 拓朗
研究題目：	関係発達研究にかかる「間主観性」概念の現状と可能性 —子どもの自己形成過程における意味に着目して—
交付額：	390 千円
指導教員：	岡田 敬司
研究代表者：	坂井 祐円（教育学研究科 博士課程 1 年）
研究分担者：	小木曾 由佳、井藤 元、柄澤 郁子
研究題目：	人間形成における超越性の問題についての臨床教育学的研究 —自己変容・ケア・関係性—
交付額：	490 千円
指導教員：	西平 直

研究代表者：	黒田 真由美（教育学研究科 博士課程 3 年）
研究分担者：	小林 信一、高橋 菜穂子
研究題目：	ビデオ観察とナラティブ分析の方法論
交付額：	490 千円
指導教員：	やまだ ようこ
研究代表者：	野口 素子（教育学研究科 博士課程 3 年）
研究分担者：	溝川 藍、小宮 あすか、嶺本 和沙
研究題目：	感情表出が受け手の行動プロセスに及ぼす影響 —感情の社会的機能に着目して—
交付額：	490 千円
指導教員：	吉川 左紀子

修士論文及び博士論文

平成21年度に各研究科に提出された心理学関係の修士論文および博士論文を記載した。(なおアンダーラインは、拠点形成事業者ならびに研究協力者である。)

修士論文

文学研究科提出分

別役透 齧歯類の環境探索に伴う外界認識の比較認知科学的検討

主査：藤田和生（文・教授）

副査：櫻井芳雄（文・教授）、板倉昭二（文・准教授）、荳阪直行（文・教授）、蘆田宏（文・准教授）

教育学研究科提出分

伊達平和 後期近代におけるセクシュアルマイノリティの社会運動の多様性とその動員に関する研究

主査：岩井八郎（教・教授）

副査：稲垣恭子（教・教授）、前平泰志（教・教授）

江上直樹 キャリア教育政策における普及要因

主査：高見茂（教・教授）

副査：金子勉（教・准教授）、鈴木晶子（教・教授）

瀧上皓一朗 近世日本儒者の思想実践とその社会的意味
—三浦梅園・脇蘭室・帆足万里を比較して—

主査：辻本雅史（教・教授）

副査：前平泰志（教・教授）、駒込武（教・准教授）

藤村彩夏 1930年代におけるデューイのコミュニティ・スクール論
—クラップによるコミュニティ・スクールの実践を手がかりに—

主査：田中耕治（教・教授）

副査：西岡加名恵（教・准教授）、前平泰志（教・教授）

丘恩卿 大学生の英語学習における学習方略の変容とその効果

主査：大塚雄作（高等教育・教授）

副査：松下佳代（高等教育・教授）、楠見孝（教・教授）

本部かの子 SoTL という理念に見る教えることと学ぶことの関係

主査：田中毎実（高等教育・教授）

副査：田口真奈（高等教育・准教授）、高見茂（教・教授）

本間涼子 課題モデルの複雑さが展望的記憶課題の遂行に与える影響

主査：齊藤智（教・准教授）

副査：楠見孝（教・教授）、及川恵（高等教育・准教授）

堀口真宏 海岸救援者における語り

—SCT、インタビューからみられる「つながり」に着目して—

主査：大山泰宏（教・准教授）

副査：高橋靖恵（教・准教授）、稲垣恭子（教・教授）

石川英子 「母と子育てを支える思想の歴史的変遷に関する一考察」
愛情中心主義と努力主義の規定的葛藤を軸として」

主査：辻本雅史（教・教授）

副査：杉本均（教・教授）、明和政子（教・准教授）

磯村知徳 沈黙に対する反応・体験の相違

—対人恐怖心性尺度・自閉症スペクトラム指数（AQ）を用いて—

主査：田中康裕（教・准教授）

副査：河合俊雄（こころの未来・教授）、吉川左紀子（こころの未来・教授）

金愛花 小林宗作におけるリトミックの受容と展開

主査：山名淳（教・准教授）

副査：鈴木晶子（教・教授）、西平直（教・教授）

加藤のぞみ 知的障がい児をもつ母親の内的変容 —母子関係に着目して—

- 主査：角野善宏（教・教授）
副査：高橋靖恵（教・准教授）、明和政子（教・准教授）
- 河井亨 大学生の学習におけるコミュニティ・ブリッジング
主査：溝上慎一（高等教育・准教授）
副査：松下佳代（高等教育・教授）、南部広孝（教・准教授）
- 小山英恵 フリッツ・イエーデの音楽教育論に関する一考察
主査：西岡加名恵（教・准教授）
副査：田中耕治（教・教授）、稲垣恭子（教・教授）
- 工藤瞳 ペルーの働く子どもの運動 —MANTHOCの社会的・理論的背景—
主査：杉本均（教・教授）
副査：南部広孝（教・准教授）、前平泰志（教・教授）
- 國崎貴弘 「私」を記録する行為としての写真撮影 —撮り続ける人々の語りから—
主査：皆藤章（教・教授）
副査：角野善宏（教・教授）、佐藤卓己（教・准教授）
- 栗田季佳 障害者に対する両価的ステレオタイプの検討
主査：楠見孝（教・教授）
副査：吉川左紀子（こころの未来・教授）、岩井八郎（教・教授）
- 劉昕 中国における独立学院の現状と課題
主査：高見茂（教・教授）
副査：南部広孝（教・准教授）、田中耕治（教・教授）
- 前田拓人 三澤勝衛の風土学に関する一考察
主査：鈴木晶子（教・教授）
副査：山名淳（教・准教授）、前平泰志（教・教授）
- 松下佳弘 占領期における朝鮮人学校政策の展開 —京都府・滋賀県の事例から—
主査：駒込武（教・准教授）
副査：辻本雅史（教・教授）、杉本均（教・教授）
- 宮田真知 存在への違和感に関する一考察 —語られる違和感体験を通して—
主査：田中康裕（教・准教授）
副査：桑原知子（教・教授）、駒込武（教・准教授）
- 永山智之 二者状況から三者状況に移行する場面における自他の捉え方を巡る体験とふれ合い
恐怖的心性・対人恐怖心性
主査：田中康裕（教・准教授）
副査：大山泰宏（教・准教授）、溝上慎一（高等教育・准教授）
- 中 陽佑 オーストラリア・ビクトリア州における教員の質保証システム
—任期付き採用教員の正式採用プロセスに焦点を当てて—
主査：杉本均（教・教授）
副査：西岡加名恵（教・准教授）、大山泰宏（教・准教授）
- 中本佳紀 「教育勅語」の成立要因に関する政策科学的分析
—山県・井上・元田の戦略的行動に着目して—
主査：高見茂（教・教授）
副査：辻本雅史（教・教授）、前平泰志（教・教授）
- 中村仁 「演奏法熟達における場の形成」
主査：鈴木晶子（教・教授）
副査：山名淳（教・准教授）、楠見孝（教・教授）
- 中村育子 世界・私・自覚の関連 —上田閑照の二重性の思想から教育学へ—
主査：矢野智司（教・教授）
副査：西平直（教・教授）、山名淳（教・准教授）
- グエンティ・ホンハウ 教育関係における根元語としての「接触」
—ブーバー対話思想の力学—
主査：西平直（教・教授）
副査：矢野智司（教・教授）、皆藤章（教・教授）
- 西浦太郎 幼少期・思春期における複数文化との接触・同化が人格形成と心理的葛藤に及ぼす

影響について ―帰国子女の風景構成法を手掛かりに―

主査：桑原知子（教・教授）

副査：河合俊雄（こころの未来・教授）、杉本均（教・教授）

越智美幸 中学校における別室登校の機能と役割

主査：桑原知子（教・教授）

副査：大山泰宏（教・准教授）、田中耕治（教・教授）

岡田薪子 「悪筆矯正」をめぐる教育空間

主査：稲垣恭子（教・教授）

副査：岩井八郎（教・教授）、前平泰志（教・教授）

奥村好美 オランダにおける初等学校の自己評価 ―支援ツール「ゼボ」に注目して―

主査：田中耕治（教・教授）

副査：西岡加名恵（教・准教授）、高見茂（教・教授）

小野加奈子 戦前期女子ミッション・スクールにおけるマナーの教育に関する一考察
―神戸女学院を中心として―

主査：稲垣恭子（教・教授）

副査：岩井八郎（教・教授）、渡邊洋子（教・准教授）

大下卓司 ジョン・ペリーの数学教育論に関する一考察

主査：田中耕治（教・教授）

副査：西岡加名恵（教・准教授）、杉本均（教・教授）

塩原佳典 明治初年代における「教育」のメディアとその地域的展開

主査：辻本雅史（教・教授）

副査：駒込武（教・准教授）、佐藤卓己（教・准教授）

高橋菜穂子 職員の語りからとらえる児童養護施設の支援実践

―家庭、学校、児童相談所とのつながりに着目して―

主査：山田洋子（教・教授）

副査：明和政子（教・准教授）、桑原知子（教・教授）

竹内一真 ナラティブ・アプローチから捉える京舞の技能伝承

―参与観察とライフストーリーインタビューを基に―

主査：山田洋子（教・教授）

副査：明和政子（教・准教授）、大山泰宏（教・准教授）

田中崇恵 主体における“異”なるものについての考察

―境界がもたらす生命感をめぐって―

主査：桑原知子（教・教授）

副査：大山泰宏（教・准教授）、鎌田東二（こころの未来・教授）

寺沢元太 「養育」の両義性が生み出す価値体験

―M.J.ランゲフェルドの発達理論を手がかりに―

主査：矢野智司（教・教授）

副査：斉藤直子（教・准教授）、田中每実（高等教育・教授）

山本はるか 西郷竹彦の文芸教育理論の検討 ―「せりあがる授業」の分析を通して―

主査：西岡加名恵（教・准教授）

副査：田中耕治（教・教授）、楠見孝（教・教授）

若井貴裕 庄司和晃の理科教育論に関する一考察

―科学観の形成という主張に着目して―

主査：田中耕治（教・教授）

副査：西岡加名恵（教・准教授）、桑原知子（教・教授）

張周周 育児休業後の女性の仕事復帰と学習機会

―大学の女性医師支援を事例として―

主査：渡邊洋子（教・准教授）

副査：前平泰志（教・教授）、稲垣恭子（教・教授）

人間・環境学研究科提出分

陳穎 四川大震災被災地におけるコミュニティ復興に関するアクターネットワーク理論的考察

主査：杉万俊夫（人環・教授）

副査：永田素彦（人環・准教授）、吉田純（人環・教授）

陳蕾 視覚探索課題時の注意の制御スタイルにおける文化の影響

主査：齋木潤（人環・教授）

副査：大東祥孝（人環・教授）、船橋新太郎（こころの未来・教授）

高曉霞 日本人中国語学習者の自律性を育成するために動機づけを高める方法の考察

—期待×価値理論に焦点を当てて

主査：岡田敬司（人環・教授）

副査：小山静子（人環・教授）、大木充（人環・教授）

菊野雄一郎 課題間相関と遺伝子多型解析を用いた視覚的注意機能の個人差に関する認知遺伝学的研究

主査：齋木潤（人環・教授）

副査：船橋新太郎（こころの未来・教授）、大東祥孝（人環・教授）

松野泰大 心理物理学の逆相関法を用いた探索非対称性の生起過程の検討

主査：齋木潤（人環・教授）

副査：船橋新太郎（こころの未来・教授）、大東祥孝（人環・教授）

小原一樹 セルフエージェンシー感が生じる対象の観察経験が運動干渉に及ぼす影響

主査：松村道一（人環・教授）

副査：齋木潤（人環・教授）、石原昭彦（人環・教授）

佐々木素晴 イギリスにおける学校体罰への態度について：19世紀中葉以降における公教育を中心に

主査：小山静子（人環・教授）

副査：岡田敬司（人環・教授）、川島昭夫（人環・教授）

高尾知憲 旧村単位の住民自治システム構築運動：智頭町山形地区の事例

主査：杉万俊夫（人環・教授）

副査：高橋由典（人環・教授）、永田素彦（人環・准教授）

谷口真穂 色字共感覚における文字と色の連合の生起課程 ～新奇漢字を用いた検討～

主査：齋木潤（人環・教授）

副査：大東祥孝（人環・教授）、船橋新太郎（こころの未来・教授）

上原信太郎 運動前短時間の体性感覚刺激による運動技能向上と運動学習の促進

主査：松村道一（人環・教授）

副査：小田伸午（人環・教授）、石原昭彦（人環・教授）

吉岡綾子 色字共感覚における文字と共感覚色の連合様式の研究

主査：齋木潤（人環・教授）

副査：船橋新太郎（こころの未来・教授）、大東祥孝（人環・教授）

こころの未来研究センター提出分

菱田一仁 話さない／話せないという体験についての心理臨床学的研究

主査：河合俊雄（こころの未来・教授）

副査：角野善宏（教・教授）、鈴木晶子（教・教授）

北村麻美 日本の在宅ホスピスにおける現状と課題 —地域医療連携の構築に向けて—

主査：カール・ベッカー（こころの未来・教授）

副査：高橋由典（人環・教授）、多賀茂（人環・教授）

小木曾由佳 個性化とプラグマティズム：ジェイムズ思想によるユング心理学再考

主査：河合俊雄（こころの未来・教授）

副査：桑原知子（教・教授）、斉藤直子（教・准教授）

奥野元子 ストレス関連疾患に対する「瞑想」の有効性について

主査：カール・ベッカー（こころの未来・教授）

副査：杉万俊夫（人環・教授）、吉田純（人環・教授）
 澤井努 石門心学と「心の習慣」 —宗教現象学的な視座から—
 主査：カール・ベッカー（こころの未来・教授）
 副査：杉万俊夫（人環・教授）、高橋由典（人環・教授）
 田内真惟人 ヒト前頭眼野におけるトポグラフィックマップ：fMRI 研究
 主査：船橋新太郎（こころの未来・教授）
 副査：齋木 潤（人環・教授）、大東祥孝（人環・教授）
 内野亮平 表情が行動傾向に与える影響
 主査：吉川左紀子（こころの未来・教授）
 副査：楠見孝（教・教授）、稲垣恭子（教・教授）

博士論文

文学研究科提出分

課程博士

松吉大輔 視覚的ワーキングメモリの容量制約と神経機構
 主査：苅阪直行（文・教授）
 副査：櫻井芳雄（文・教授）、蘆田宏（文・准教授）
 嶋田容子 乳児音声に対する成人の聴力的感受性の変容
 主査：板倉昭二（文・准教授）
 副査：藤田和生（文・教授）、高田明（アジア・アフリカ・准教授）

教育学研究科提出分

課程博士

古野裕子 居場所に向けられたまなざしの分析
 —室内画を通してみた〈わたし〉の在り方の多様性—
 主査：桑原知子（教・教授）
 副査：皆藤章（教・教授）、河合俊雄（こころの未来・教授）
 石川裕之 韓国における才能教育制度の構造と機能に関する研究
 —「ヤーマス」化する教育システム—
 主査：杉本均（教・教授）
 副査：南部広孝（教・准教授）、田中耕治（教・教授）
 前原由喜夫 高次認知と社会認知を支える作動記憶に関する研究
 主査：齊藤智（教・准教授）
 副査：子安増生（教・教授）、吉川左紀子（こころの未来・教授）
 佐々木玲仁 風景構成法の機序に関する研究
 主査：桑原知子（教・教授）
 副査：皆藤章（教・教授）、角野善宏（教・教授）
 高木綾 異質な自分との内的関わりについて—青年期を軸に—
 主査：桑原知子（教・教授）
 副査：田中康裕（教・准教授）、大山泰宏（教・准教授）
 平知宏 比喩理解における解釈多様性と身体化認知
 主査：楠見孝（教・教授）
 副査：齊藤智（教・准教授）、子安増生（教・教授）
 田中慶江 心理臨床におけるまなざし体験の生成
 主査：皆藤章（教・教授）
 副査：高橋靖恵（教・准教授）、田中康裕（教・准教授）
 東畑開人 心理臨床における美の問題
 主査：皆藤章（教・教授）
 副査：角野善宏（教・教授）、桑原知子（教・教授）

論文博士

丸島令子 中年期の発達課題とパーソナリティに関する研究－世代性の発達研究－

主査：伊藤良子（教・教授）

副査：田中康裕（教・准教授）、桑原知子（教・教授）

人間・環境学研究科提出分

課程博士

廣瀬智士 脳内運動制御機構を利用した視覚情報処理

主査：松村道一（人環・教授）

副査：内藤栄一（ATR 脳情報研究所）・主任研究員、船橋新太郎（こころの未来・教授）、
小田伸午（高等教育・教授）

山本哲也 ヒト奥行き知覚過程における多重性に関する脳機能イメージング法による研究

主査：齋木潤（人環・教授）

副査：大東祥孝（人環・教授）、船橋新太郎（こころの未来・教授）、江島義道（京都工芸
繊維大学）・学長

こころの未来研究センター提出分

課程博士

田中（山本） 佳世子 学校でいかに生と死を語るか

－「いのちの大切さ」を教えることをめぐって－

主査：カール・ベッカー（こころの未来・教授）

副査：杉万俊夫（人環・教授）、吉田純（人環・教授）、得丸定子（上越教育大学・教授）

業 績

2009年4月～2010年3月の期間の業績（公刊予定のものを含む）を、著書、論文（査読有り）、論文（査読なし）、紀要（査読有り）、紀要（査読なし）、総説、科研等報告、翻訳、辞典・事典、書評、招待講演、講演、受賞歴、新聞記事等のメディアからの取材または依頼など、自身の著作物への書評、各種メディアでの研究成果の公表など、社会的貢献など、その他の順に並べた。これは、グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」の教員・研究員・院生・ポスドクなど、全構成メンバーのこの一年間の活動記録であり、必ずしもグローバルCOEプログラムの補助金による成果だけを収録したものではない。

下線は教員メンバー（教授、准教授、助教、COE研究員）であることを示す。

1. 著書

- 足立幾磨 (2009). 霊長類は顔をどのように見分けていますか 京都大学霊長類研究所新しい霊長類学, 講談社, 201-205.
- 赤沢真世 (2009). コラム 12 小学校英語の導入 田中耕治・西岡加名恵 (編) 「活用する力」を育てる授業と評価—中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの提案, 学事出版, 138-138.
- 赤沢真世 (2009). 第2章4 阿原成光と英語教育 田中耕治 (編) 続・時代を拓いた教師たち, 日本標準, 113-124.
- 赤沢真世 (2009). 第3章 初等中等教育の促進 第1節 戦後学習指導要領の変遷（ゆとり教育まで）田慧生・田中耕治 (編) 21世紀的日本教育改革—中日学者的視点, 中国中央教育科学出版社, 50-62.
- 赤沢真世 (印刷中). 第5章 小学校外国語活動の授業 若本夏美 (編) 質の高い学力を保障する授業と評価, 日本標準
- 赤沢真世 (印刷中). 英語教育のカリキュラム編成と評価—大阪府河内長野市立天野小学校の実践に対する研究者の視点 東京学芸大学教員養成カリキュラム研究開発センター地域・日本・世界と小学校英語—「小学校英語」実践の取り組みと課題—
- 蘆田宏 (印刷中). 運動視 北岡明佳 (編) 知覚心理学, ミネルヴァ書房
- 蘆田宏 (印刷中). 感覚・知覚 Overview 京都大学心理学連合 (編) 『心理学概論』 ナカニシヤ出版
- 蘆田宏 (印刷中). 感覚・知覚の統合 京都大学心理学連合 (編) 『心理学概論』 ナカニシヤ出版
- 蘆田宏 (印刷中). fMRI 実験の基礎知識 芋阪直行 (編) 脳イメージング入門・心理学からのアプローチ, 培風館
- カール・ベッカー (2009). こころのはたらき 河合俊雄 (編) こころにおける身体・身体におけるこころ 日本評論社, 123-129.
- カール・ベッカー (2009). 死後の世界の様相 山折哲雄 (編) 日本人と「死の準備」角川SSC新書, 157-169.
- カール・ベッカー (2009). 21世紀のキーワードは「抑制」岩崎利一 (編) 釣耕苑対談集 巴心文庫, 206-219.
- カール・ベッカー (2009). リスク社会と幸福感を歪曲した言説—仏教的な批評 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かつて—幸福感を紡ぐ心理学・教育学 ナカニシヤ出版, 190-192.
- カール・ベッカー (2009). いのち教育と日本のスピリチュアリティ カール・ベッカー・弓山達也 (編) いのち・教育・スピリチュアリティ 大正大学出版会, 101-138.
- カール・ベッカー (2009). カール・ベッカー・弓山達也 (編) いのち・教育・スピリチュアリティ 大正大学出版会
- カール・ベッカー (2009). 死の現状—ホスピスから「生と死の教育」へ カール・ベッカー・山本佳世子 (訳) (編) 愛する者の死とどう向き合うか—悲嘆の癒し 晃洋書房, 125-128.
- カール・ベッカー (2009). おわりに代えて—欧米が日本から学び取った死の叡智 カール・ベッカー・山本佳世子 (訳) (編) 愛する者の死とどう向き合うか—悲嘆の癒し 晃洋書房, 201-208.
- カール・ベッカー (2009). カール・ベッカー・山本佳世子 (訳) (編) 愛する者の死とどう向き合うか—悲嘆の癒し
- カール・ベッカー (2009). 愛する者の死とどう向き合うか—悲嘆の癒し
- カール・ベッカー・近藤恵 (印刷中). 死の受容 心理学概論 ナカニシヤ出版
- Dalsky, D. (2010). Academic writing in the hybrid classroom. A. Tajino, T. Stewart, & D. Dalsky. (Eds) *Writing for academic purposes: Eisakubun wo sostugyoshite eigoronbun wo kaku*. Hitsuji Press.
- Dalsky, D. (2010). Researching an academic paper. A. Tajino, T. Stewart, & D. Dalsky (Eds) *Writing for*

- academic purposes: Eisakubun wo sostugyoshite eigoronbun wo kaku.* Hitsuji Press.
- Dalsky, D. & Stewart, T. (2010). Citing sources and writing the references section. A. Tajino, T. Stewart, & D. Dalsky (Eds) *Writing for academic purposes: Eisakubun wo sostugyoshite eigoronbun wo kaku.* Hitsuji Press.
- 船橋新太郎 (印刷中). 刺激的な世界—注意欠陥/多動性障害と前頭葉機能— 岩田誠・河村満 (編) 発達と脳—コミュニケーション・スキルの獲得過程, 医学書院
- 船橋新太郎 (2010). ワーキングメモリの心理・生理・イメージング 乾敏郎・吉川左紀子 (編) よくわかる認知科学, ミネルヴァ書房
- 船橋新太郎 (印刷中). 脳の構造 京都大学心理学連合 (編) 『心理学概論』 ナカニシヤ出版
- 古川裕之 (2009). 風景構成法における“あうんの呼吸”-主体との関連で 皆藤章 (編) 風景構成法の臨床 現代のエスプリ 505, ぎょうせい, 87-95.
- 古川裕之 (2009). 風景構成法における身体性 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 心理臨床関係における身体 京大心理臨床シリーズ9 創元社, 115-122.
- グエンティ ホンハウ・ユージン、アクセノフ・李節子 (2010). 当事者の声から無国籍の現状を知る—パネルディスカッション 陳天璽 (編) 忘れられた人々 日本における「無国籍者」, 明石書店, 63-110.
- 林美里 (2009). 45: ヒト以外の霊長類も道具を使いますか, 52: ものまねができますか 京都大学霊長類研究所 (編) 新しい霊長類学—人を深く知るための100問100答—, 講談社ブルーバックス, 148166-150168.
- 原知子・矢野智司 (編) 臨床の知: 心理臨床学と教育人間学からの問い
- 平井久世 (2009). 心理臨床における「触れる」こと 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ9 心理臨床関係における身体, 創元社, 181-181.
- 平石界 (2009). 赤ちゃんポストの古今東西 柏木恵子 (編) やわらかアカデミズム「よくわかる家族心理学」, ミネルヴァ書房, 102-103.
- 平石界 (2009). 「思いやりと利他行動」「信頼」 乾敏郎・川口潤・吉川左紀子 (編) やわらかアカデミズム「よくわかる認知科学」, ミネルヴァ書房, 146-149.
- 平石界 (印刷中). 進化と人間行動 唐沢穰・村本由紀子 (編) 日本社会心理学会50周年記念企画 第3巻「社会と個人のダイナミクス」, 誠信書房
- 平石界 (印刷中). 人文科学 日本進化学会10周年記念編集委員会 (編) 日本進化学会10周年記念出版「進化のすべて」, 共立出版
- 平石界 (印刷中). 認知の個人差の進化心理学的意味 箱田裕司 (編) 現代の認知心理学第7巻「認知の個人差」, 北大路書房
- 平石界 (印刷中). 赤ちゃんポストの人間行動進化的意味 根ヶ山光一・柏木恵子 (編) 子育ての進化と文化, 有斐閣書籍
- 細尾萌子 (2009). バカロレア試験制度 フランス教育学会フランス教育の伝統と革新, 大学教育出版, 152-160.
- 市原有希子 (2009). 思春期と、思春期を経たあり方 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ9 心理臨床関係における身体, 創元社, 182-182.
- 伊村知子 (2009). ヒトのように「影」を手がかりにして物の形や動きを見ますか? 京都大学霊長類研究所 (編) 新しい霊長類学: 人を深く知るための100問100答., 講談社, 185-188.
- 伊村知子 (2009). チンパンジーと3次元世界: 平面に奥行きを見る 科学 79, 岩波書店, 922-923.
- 乾敏郎・吉川左紀子・川口潤 (編) (2010)よくわかる認知科学. ミネルヴァ書房
- 井関龍太 (2009). 思い出そうとするほど忘れてしまう?—検索誘導性忘却— 西本武彦・大藪泰・福澤一吉・越川房子 (編) テキスト 現代心理学入門, 川島書店, 223-223.
- 井関龍太 (2009). ワーキングメモリ・スパンは練習次第で上がる?—ワーキングメモリ・スパンと方略訓練— 西本武彦・大藪泰・福澤一吉・越川房子 (編) ワーキングメモリ・スパンは練習次第で上がる?—ワーキングメモリ・スパンと方略訓練—, 川島書店, 227-227.
- 板倉昭二 (2009). 進化と行動 大藪泰 (編) 現代心理学入門, 川島書店
- 板倉昭二 (2009). ロボットに心は宿るか—他者に心を見出す過程 開一夫・長谷川寿一 (編) ソーシャル・ブレインズ
- 板倉昭二 (印刷中). 注意と発達 三浦利章・原田悦子 (編) 現代の認知心理学 第4巻, 北大路書房

- 井谷信彦 (印刷中). 宙吊りにされた『知』の形式：危機に関わる『知』としての『臨床の知』, 創元社
- 井藤美由紀 (2009). 死別の悲しみとそのかなた 岡部健・竹之内裕文 (編) どう生き どう死ぬかー現場から考える死生学, 弓箭書院, 205-223.
- 鍛冶まどか (2009). 風景構成法における空間の生成過程 皆藤章 (編) 現代のエスプリ『風景構成法の臨床』, 109-119.
- 皆藤章 (2009). 体験の語りを巡って 誠信書房
- 皆藤章 (2009). 風景構成法の臨床 ギョウセイ, 5-22.
- 皆藤章 (2009). カウンセリングからみた人間の成長 新曜社, 87-112.
- 皆藤章 (2009). 河合隼雄という臨床家 谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄 (編) 岩波書店, 123-136.
- 角野善宏 (2009). 「症状をもつ」とはどういうこと？—主な援助の対象①神経症・うつ病・人格障害・統合失調症 伊藤良子 (編) 臨床心理学—全体的存在として人間を理解する』, ミネルヴァ書房, 58-78.
- 角野善宏 (2009). 風景構成法と樹木画法 皆藤章 (編) 風景構成法の臨床, 108, ギョウセイ, 129-142.
- 角野善宏 (2009). スーパーヴィジョンの体験から 谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄 (編) 臨床家 河合隼雄, 岩波書店, 137-153.
- 鎌田東二 (2009). 神と仏の出逢う国 角川学芸出版
- 鎌田東二 (2009). 超訳 古事記 ミシマ社
- 鎌田東二 (2009). モノ学の冒険 鎌田東二 (編) 創元社
- 鎌田東二 (2010). 平安京のコスモロジー 鎌田東二 (編) 創元社
- 鎌田東二 (2010). 霊の発見 鎌田東二・五木寛之 (編) 角川出版
- 勝原 摩耶 (印刷中). 言語性ワーキングメモリとリーディングスパンテスト 荳阪直行 (編) 脳イメージング入門—心理学からのアプローチ, 培風館
- 河合俊雄 (2009). 中空と鬼っ子 — 河合隼雄の臨床の思想 中沢新一・河合俊雄思想家 河合隼雄, 117-146.
- 河合俊雄 (2009). 心とモノの魂について 鎌田東二, 87-98.
- 河合俊雄 (2009). 心理療法からみた幸福感 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学, ナカニシヤ出版, 184-185.
- 河合俊雄 (2009). 臨床家・河合隼雄 谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄臨床家 河合隼雄, 岩波書店, 3-12.
- 河合俊雄 (2009). 河合隼雄と日本神話 日本神話と心の構造, 岩波書店, 243-256.
- 河崎美保 (印刷中). 学習集団内の相互作用①相互作用の形式に注目する, 学習集団内の相互作用②子どもの能力差と社会的関係に注目する 松村暢隆 (編) ワードマップ・認知的個性—教育的支援に生かす—, 新曜社
- 川崎良孝 (2009). 「英米における無料原則の由来と動向」 塩見昇・山口源治郎 (編) 『新図書館法と現代の図書館』, 日本図書館協会, 312-331.
- 川崎良孝 (2010). I 総論 A. 図書館とは何か, B. 図書館と社会, C. 図書館情報学 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会 (編) 図書館ハンドブック (第6版補訂版), 2-41.
- 金晓明・沈麗云・章騫・川崎良孝 (2009). 上海図書館とアウトリーチ・サービス
- 河野一紀 (2009). ことばと身体の直接性—臨床につなげる知の考察 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 心理臨床関係における身体 創元社, 184-191.
- 高峽・項純 (2009). 以培養生存能力为目标课程改革 (生きる力をめざすカリキュラム改革) 田慧生・田中耕治・高峽 (編) 21 世紀的日本教育改革—中日学者の視点 (21 世紀における日本教育改革—中日学者の視点), 教育科学出版社, 79-107.
- 小山英恵 (2009). コラム 8 音楽家がとらえる鑑賞力 西岡加名恵・田中耕治 (編) 「活用する力」を育てる授業と評価 中学校—パフォーマンス課題とルーブリックの提案, 学事出版, 98-98.
- 小山静子 (2009). 戦後教育のジェンダー秩序, 勁草書房, 1-251.
- 小山静子 (2010). メディアによる女学生批判と高等女学校教育 辻本雅史 (編) 知の伝達メディアの歴史研究, 214-235.
- 子安増生 (2009). 先の手を読む—思考・問題解決・推理 繁榊算男・丹野義彦 (編) 心理学の謎を解く—初めての心理学講義, 医学出版, 73-96.
- 子安増生 (2009). 「教室空間」「連合説と認知説」「フォローアップ研究」「芸術と教育」「メディアと教育」

- の5項目 二宮克美・子安増生 (編) キーワードコレクション 教育心理学, 新曜社
- 子安増生 (2009). 心が活きる教育に向かって 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学, ナカニシヤ出版, 1-16.
- 子安増生 (2009). 子どもはいつから幸福を感じるか 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学, ナカニシヤ出版, 193-194.
- 子安増生 (2009). 教育学研究科・教育学部の改革と現状—1 教育の改革 京都大学教育学部六十年史編集委員会 (編) 京都大学教育学部六十年史, 京都大学教育学部六十年史編集委員会, 37-58.
- 子安増生 (2009). 21世紀COEとグローバルCOE 教育の改革 京都大学教育学部六十年史編集委員会 (編) 京都大学教育学部六十年史, 京都大学教育学部六十年史編集委員会, 373-376.
- 子安増生 (2009). 「心の理論」の発達 榊原洋一 (編) 別冊発達30. アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助, ミネルヴァ書房, 105-112.
- 久代恵介 (2009). Velocity Storage Integrator (VSI) 内野善生・古屋信彦 (編) めまいと平衡障害, 金原出版, 24-29.
- 楠見孝 (2009). 暗黙知: 経験による知恵とは何か 小口孝司・楠見孝 (編) 仕事のスキル, 北大路書房, 6-20.
- 楠見孝・上市秀雄 (2009). 人は健康リスクをどのようにみているか 吉川肇子 (編) 健康リスクコミュニケーションの手引き, ナカニシヤ出版, 96-115.
- 楠見孝 (2009). 大人の学び: 熟達化と市民リテラシー 渡部信一 (編) 「学び」の認知科学事典, 大修館書店, 250-263.
- 楠見孝 (2009). 判断のバイアス 乾敏郎・川口 潤・吉川左紀子 (編) よくわかる認知科学, ミネルバ書房, 120-121.
- 楠見孝 (印刷中). 批判的思考と高次リテラシー 楠見孝 (編) 現代の認知心理学 3「思考と言語」, 北大路書房
- 楠見孝 (印刷中). 思考と推論 意思決定 京都大学心理学連合 (編) 『心理学概論』 ナカニシヤ出版
- 楠見孝 (印刷中). 臨床知への認知心理学的アプローチ 矢野智司・桑原知子 (編) 臨床の知—臨床心理学と教育人間学からの問い, 創元社
- 桑原知子・鳴岩伸生・川部哲也・佐々木玲仁・加藤奈奈子 (2009). 南極に生きるころ 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かって 幸福感を紡ぐ心理学・教育学 ナカニシヤ出版, 124-145.
- 桑原知子 (2009). 心理臨床における罪 北山修・山下達彦 (編) 罪の日本語臨床, 創元社, 136-147.
- 桑原知子 (2009). 河合隼雄語録—事例に寄せて (解説) 谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄 (編) 臨床家 河合隼雄, 岩波書店, 57-60.
- Kyoto University Academic Vocabulary Research Group and Kenkyusha (2009). *Kyoto University data-based academic vocabulary: Basic English words 1110*. Kenkyusha
- Lewis, C., Koyasu, M., Oh, S., Ogawa, S., Short, B., & Huang, Z. (2009). Culture, executive function and social understanding. Lewis, C., & Carpendale, J.I.M. (Eds) *Social Interaction and the Development of Executive Function. Monograph in the series New Directions in Child and Adolescent Development, Issue 123.*, San Francisco: Jossey Bass., 69-85.
- 松井華子 (2009). 風景構成法における彩色過程 皆藤章 (編) 現代のエスプリ 505, 120-128.
- 松木邦裕 (2009). 精神分析体験: ビオンの宇宙 岩崎学術出版社, 1-232.
- 松木邦裕 (2010). 分析実践の進展 創元社
- 松木邦裕 (2009). パーソナリティ障害のメタサイコロジー 松木邦裕・福井敏 (編) パーソナリティ障害の精神分析的アプローチ 金剛出版, 30-41.
- 松木邦裕 (2009). マネージメントで行うことと注意すること 松木邦裕・福井敏 (編) パーソナリティ障害の精神分析的アプローチ 金剛出版, 196-213.
- 松木邦裕 (2009). 悲しみと抑うつ 氏原寛 (編) 心理臨床の広がり 新曜社, 53-86.
- 松木邦裕 (2009). 精神分析療法 青木省三・中川彰子 (編) 精神療法の実際 中山書店, 80-90.
- 松木邦裕 (2009). 精神分析的療法 久保千春 (編) 心身医学標準テキスト 第3版 医学書院, 291-296.
- 松下佳代 (2009). 能力と幸福、そして幸福感—強さと弱さ— 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学, ナカニシヤ出版, 37-60.
- 松下佳代 (2010). 学びの評価 佐伯胖 (監修)・渡部信一 (編) 「学び」の認知科学事典, 442-458.

- 松下佳代 (編) (印刷中). 〈新しい能力〉は教育を変えるか, ミネルヴァ書房
- 松下佳代 (印刷中). 大学における「学びの転換」とは—unlearn 概念による検討— 東北大学高等教育開発推進センター (編) 大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来, 東北大学出版会 5-15.
- Mattig, R. (2009). *Rock und Pop als Ritual. Über das Erwachsenwerden in der Mediengesellschaft*. Transcript.
- Mattig, R. (2009). Offenheit - eine Herausforderung für die Pädagogik. Michael Göhlich, & Jörg Zirfas (Eds) *Der Mensch als Maß der Erziehung. Festschrift für Christoph Wulf*, Belz, 165-172.
- 溝上慎一 (2009). 授業・授業外学習による学習タイプと能力や知識の変化・大学教育満足度との関連性—単位制度の実質化を見据えて— 山田礼子 (編) 大学教育を科学する—学生の教育評価の国際比較— 東信堂, 119-133.
- 森田健一 (2009). 指圧にみる心理臨床 伊藤良子・大山泰宏・角野善弘 (編) 心理臨床関係における身体 京大心理臨床シリーズ第9巻, 創元社, 138-138.
- 森田美弥子・高橋靖恵・高橋昇 (2009). 実践ロールシャッハ法 ナカニシヤ出版, 1-171.
- 森田美弥子・高橋靖恵・高橋昇・杉村和美・中原睦美 (印刷中) 実践ロールシャッハ法 ナカニシヤ出版
- Myowa-Yamakoshi, M. (in press) Early social cognition in chimpanzees (Pan troglodytes) In: Suddendorf, E., Ross, S. Matsuzawa, T (Eds.) *The Mind of Chimpanzee*. Chicago University Press.
- Myowa-Yamakoshi, M. & Yamakoshi, G. (in press) Play behaviors involving the use of objects in young chimpanzees at Bossou. In: Matsuzawa, T. Sugiyama, Y (Eds.) *The Chimpanzees of Bossou and Nimba: A Cultural Primatology*, Tokyo: Springer-Verlag Tokyo.
- Myowa-Yamakoshi, M., & Tomonaga, M. (2009). Evolutionary origin of social communication. de Haan, M, & Gunnar, M.R. *Handbook of Developmental Social Neuroscience*, 207-221.
- 明和政子 (2009). 人間らしい遊びとは?—遊びから探る人間の心の発達と進化 亀井伸孝 (編) 遊びの人類学, 昭和堂, 135-164.
- 明和政子 (2009). 紙上討論 心の発達と進化 日本児童研究所 児童心理学の進歩, 金子書房, 332-335.
- 明和政子 (2009). 紙上討論 心の発達と進化 回答 日本児童研究所 児童心理学の進歩, 金子書房, 356-360.
- 明和政子 (2009). 霊長類の新生児模倣 開一夫・長谷川寿一 (編) ソーシャルブレインズ, 67-68.
- 明和政子 (2010). ヒトとサル親子関係 杉山幸丸 (編) 人とサルの違いがわかる本, オーム社, 101-118.
- 明和政子 (印刷中). 胎児・新生児期の身体マッピング能力 五十嵐隆 (編) 小児科臨床ピクシス, 中山書店
- 明和政子 (印刷中). 霊長類のアロマザリング 柏木恵子・根ヶ山光一 (編) 「子育ての進化と文化」, 有斐閣
- 明和政子 (印刷中). 発達初期の有能性 杉村伸一郎 (編) 「心理学ポイント・シリーズ・幼児心理学」, 学文社
- 長岡千賀 (2009). 同調性: シンクロニー 乾敏郎・川口潤・吉川左紀子 (編) よくわかる認知科学, ミネルヴァ書房
- 長岡千賀 (印刷中). 会話の「間」 三浦佳世 (編) 現代の認知心理学 第1巻 知覚と感性 1, 北大路書房
- 永田素彦・大川智船 (2009). 住民会議で環境の将来像をデザインする 吉岡崇仁 (編) 環境意識調査法, 勁草書房, 133-171.
- 永田素彦 (印刷中). リスク社会と科学技術 京都大学大学院エネルギー科学研究科エネルギー社会・環境科学専攻エネルギー・環境・社会—現代技術社会論, 丸善
- 南部広孝 (2009). 中国高等教育独学試験制度の展開, 東信堂
- 西平直 (2009). 世阿弥の稽古哲学 東京大学出版会, 1-296.
- 西岡加名恵 (2009). 教育評価と授業研究 日本教育方法学会 (編) 日本の授業研究 下, 学文社, 117-126.
- 西岡加名恵 (2009). 「活用する力」を育てる授業と評価・中学校 田中耕治・西岡加名恵 (編) 西浦太郎 (印刷中). 「対決! フロイト vs ユング」 山中康裕 (編) ナツメ社
- 野口寿一 (2009). 小児科への入院をめぐる心と身体 伊藤良子・大山泰宏・角野善弘 (編) 京大心理臨床シリーズ第8巻 身体の病と心理臨床 創元社, 134-134.
- 布柴靖枝 (2009). 子どもが直面しやすい心身の危機とその援助 宮前理 (編) 子ども理解とカウンセリング

- グ 八千代出版, 119-128.
- 布柴靖枝 (2009). 子どもの心の発達とカウンセリング 宮前理 (編) 子ども理解とカウンセリング 八千代出版, 165-180.
- 布柴靖枝 (2009). 授業に生かすカウンセリング 宮前理 (編) 子ども理解とカウンセリング 八千代出版, 181-193.
- 布柴靖枝 (2009). 心理療法の理論と実際 宮前理 (編) 子ども理解とカウンセリング 八千代出版, 208-211.
- 布柴靖枝 (2009). カウンセリングを学ぶための体験学習 宮前理 (編) 子ども理解とカウンセリング 八千代出版, 213-229.
- 大塚結喜 (印刷中). ワーキングメモリとは 荳阪直行 (編) 脳イメージング入門—心理学からのアプローチ, 培風館
- 大塚結喜 (印刷中). 高齢者のワーキングメモリを支える神経基盤 荳阪直行 (編) 脳イメージング入門—心理学からのアプローチ, 培風館
- 大塚結喜 (印刷中). 心の理論の個人差に関わる脳領域 荳阪直行 (編) 脳イメージング入門—心理学からのアプローチ, 培風館
- 大塚雄作・南部広孝 (2009). 体制創新と人材培養 田慧生・田中耕治 (編) 21 世紀的日本教育改革—中日学者的視点, 教育科学出版, 110-137.
- 大山泰宏 (2009). 文化の観点からみた風景構成法 皆藤章 (編) 現代のエスプリ 風景構成法の心理臨床 505, ぎょうせい, 32-43.
- 大山泰宏 (2009). 序論：心理臨床関係における新たな身体論へ 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ 9 心理臨床関係における身体 創元社, 13-20.
- 大山泰宏 (2009). 心理療法の社会文化的背景 村瀬嘉代子・岸本寛史 (編) 臨床心理学増刊号第 1 巻 対人援助の技とこころ—心理療法再入門 金剛出版, 48-53.
- 尾崎真奈美 (2010). ポジティブ心理学とスピリチュアリティ、現代のエスプリ 512, 188-198.
- 荳阪直行 (2009). メタ記憶とワーキングメモリの脳内表現—社会脳をめぐる自己知 (TOMS) と他者知 (TOMO) の問題— 清水寛之 (編) メタ記憶, 北大路書房, 105-118.
- 荳阪直行 (2010). 笑い脳：社会脳からのアプローチ (岩波科学ライブラリー), 岩波書店
- 尾崎真奈美・堀毛一也・大竹恵子・本多明生・松岡和生・安久津洋巳・小玉正博・小塩真司・外山美樹・伊藤正哉・大坊郁夫・上出寛子・日向野智子・唐澤真弓・菅知絵美・小林知博・吉田綾乃・堀毛裕子・織田信男 (2010). ポジティブ心理学とスピリチュアリティ 堀毛一也 (編) 現代のエスプリ ポジティブ心理学の展開, 512, ぎょうせい, 188-198.
- 佐伯恵里奈 (2009). 系列位置効果 野瀬出 (編) 淑徳大学通信教育学部テキスト・心理学基礎実験, 丸善, 55-64.
- Saito, N. (2009). Reconstruction in Dewey's Pragmatism: Home, Neighborhood, and Otherness A.G. Rud, Jim Garrison. & Lynda Stone (Eds) *John Dewey at 150: Reflections for a New Century* Purdue University Press, 84-95.
- Saito, N. (in print). Leaving and Bequeathing: Friendship, Emersonian moral perfectionism and the gleam of light John T. Lysaker & William Rossi (Eds) *Emerson and Thoreau: Figures of Friendship* Indiana University Press.
- 齋藤直子 (2009). 去る教師・遺す教師：カベルによる『ウォールデン』解釈と「解釈の政治学」
- 齋木潤 (2009). 視覚性ワーキングメモリ、チェンジブラインドネス 子安増生・二宮克美 (編) キーワードコレクション 心理学フロンティア, 新曜社, 10-17.
- 齋木潤 (2009). 情報の統合 1 (心理)、注意の生物学的過程 乾敏郎・吉川左紀子 (編) よくわかる認知科学, ミネルヴァ書房, 54-59.
- 齊藤智 (印刷中). 実行機能とワーキングメモリ 無藤 隆・子安増生 (編) 発達心理学 I, 東京大学出版会
- 齊藤智 (印刷中). 注意とワーキングメモリ 三浦利章・原田悦子 (編) 注意と安全, 北大路書房
- 齊藤智 (印刷中). 第 5 章「学習・記憶」の「Overview」および「記憶」 京都大学心理学連合 (編) 『心理学概論』 ナカニシヤ出版
- 坂本真士・及川恵・伊藤拓・西河正行 (2009). 大学生における精神的不適応予防に関する研究 風間書房
- 櫻井芳雄 (2009). ブレイン—マシン・インタフェースでわかる高齢脳の力 脳の世紀推進会議 (編) 脳を知る・創る・守る・育む, クバプロ, 11, 115-138.

- 佐藤学・広田照幸 (2009). 矢野智司・今井康雄・秋田喜代美 (編) 変貌する教育学
- 佐藤学・広田照幸・矢野智司 (2009). 限界への教育学に向けて—不可能性と可能性とを横断する銀河鉄道
矢野智司・今井康雄・秋田喜代美 (編) 変貌する教育学, 世織書房, 21-44.
- Sato, T., Wakabayashi, K., Nameda, A., Yasuda, Y., & Watanabe, Y. (印刷中). Understanding a person as a whole: Transcending the Anglo-American methodolatry and Continental-European holism through a look at dynamic emergence processes Toomela A., & Valsiner, J. (Eds) *Methodological thinking in psychology: 60 years gone astray?* Information Age Publishing.
- 佐藤卓己 (2009). ヒューマニティーズ 歴史学, 1-143.
- 佐藤卓己 (2009). 《NHK青年の主張》における幸福感のゆくえ 子安増生 (編) 心が生きる教育に向かつて—幸福感を紡ぐ心理学・教育学, ナカニシヤ出版, 19-36.
- 佐藤卓己 (2009). 野間清治—「雑誌王」の立身出世主義 土屋礼子 (編) 近代日本メディア人物誌—創業者・経営者編, ミネルヴァ書房, 183-190.
- 佐藤卓己 (2009). テレビが映した「反乱」 毎日新聞社 (編) 1968年に日本と世界で起こったこと, 毎日新聞社, 38-42.
- 佐藤卓己 (2009). リップマン『世論』のステレオタイプ 井上俊・伊藤公雄 (編) 社会学ベーシックス 第6巻 メディア・情報・消費社会, 世界思想社, 65-74.
- 佐藤卓己 (2010). 「テレビ的教養」のメディア史 辻本雅史 (編) 知の伝達メディアの歴史研究, 思文閣出版, 54-67.
- 佐藤弥・魚野翔太・十一元三 (2009). 広汎性発達障害の神経基盤 須田治 (編) 子どもへの発達支援のエッセンス 2: 情動的な人間関係の問題への対応, 金子書房, 205-226.
- 佐藤弥・魚野翔太・鈴木直人 (2010). 情動 村上郁也 (編) イラストレクチャー 認知神経科学—心理学と脳科学が解くこころの仕組み—, オーム社, 197-214.
- 千秋佳世 (2009). 自我体験と身体 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 京大心理臨床シリーズ9 心理臨床関係における身体, 174-189.
- Shikishima, C., Hiraishi, K., Yamagata S., Sugimoto, Y, Takemura, R., Ozaki, K., Okada, M., Toda, T., & Ando, J. (2009). Is g an entity? A Japanese twin study using syllogisms and intelligence tests. *Intelligence*, 37, 256-267.
- Stewart, T., & Dalsky, D. (2010). Writing the body section. A. Tajino, T. Stewart, & D. Dalsky. (Eds) *Writing for academic purposes: Eisakubun wo sostugyoshite eigoronbun wo kaku*. Hitsuji Press.
- 杉万俊夫 (2009). 共育空間を創造する地域活性化: ビジョン喪失リスクへの挑戦 子安増生 (編) 心が生きる教育に向かつて—幸福感を紡ぐ心理学・教育学, ナカニシヤ出版, 103-123.
- 杉万俊夫 (2009). リスクの組織論 吉川榮和 (編) 新リスク学ハンドブック, 三松株式会社, 371-388.
- 杉本均 (2009). シンガポールにおける児童生徒の資質・能力 藤田英典・大桃敏行 (編) 学校改革 (広田照幸監修 リーディングス日本の教育と社会), 日本図書センター, 11, 390-404.
- 杉本均 (2009). アジア教育研究報告 杉本均 (編), 京都大学大学院教育学研究科, 9号, 1-78.
- 平知宏 (印刷中). 比喩の理解と身体化認知 楠見孝 (編) 現代の認知心理学 3, 北大路書房
- 高橋靖恵 (2009). 「健康教育の基礎」, 「質的データ」, 「学生相談」, 「ジェンダーと教育」 二宮克美・子安増生 (編) キーワードコレクション 教育心理学 新曜社, 62-65, 132-135, 158-161, 192-195.
- 高橋靖恵 (2009). 青年期問題と家族ストレス 日本家族心理学会 (編) 「家族のストレス」 金子書房, 42-53.
- 高見茂 (2009). 地方財政リスク危機とリスク管理 日本教育行政学会研究推進委員会 (編) 学校と大学のガバナンス改革, 教育開発研究所, 54-69.
- 高見茂 (2009). 一、21世紀教育再生的基本構想為法律保障、二、日本教育財政的若干思考 田中耕治・田慧生 (編) 21世紀的日本教育改革, 教育科学出版社, 2-16.
- 高見茂 (2009). 学校経営と教育法規 河上亮一・高見茂 (編) 教員免許更新講習テキスト, 昭和堂, 110-115.
- 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵 (2009). 新しい時代の教育課程・改訂版, 有斐閣
- 田中耕治・西岡加名恵・赤沢真世 (2009). 以学力問題為中心的改革 実践探索 田慧生・田中耕治 (編) 21世紀的日本教育改革, 教育科学出版社, 50-78.
- 田中耕治 (2009). 『実践記録』の性格と方法をめぐって 田中耕治 (編) 時代を拓いた教師たち—実践から教育を問い直す—, 日本標準, 14-24.

- 田中耕治 (2009). 玉田泰太郎と理科授業の創造—『到達目標』の設定と『学習課題方式』の提唱 田中耕治 (編) 時代を拓いた教師たち—実践から教育を問い直す—, 日本標準, 101-112.
- 田中耕治 (2009). 目標達成アプローチ 日本教育方法学会 (編) 日本の授業研究—Lesson Study in Japan—授業研究の方法と形態<下巻>, 72-81.
- 田中慶江 (2009). 見つめから生まれてくるもの 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編) 心理臨床における身体 創元社, 140-149.
- 東畑閑人 (印刷中). 芸術への影響 山中康裕 (編) 対決! フロイト vs ユング ナツメ社
- 徳永俊太 (2009). 歴史学と歴史教育 西岡加名恵 (編) 「活用する力」を育てる授業と評価・中学校, 日本標準, 47-47.
- 富松良介 (2009). 被虐待児の風景構成法から. 皆藤章 (編) 現代のエスプリ『風景構成法の臨床』505, ぎょうせい, 143-154.
- 辻本雅史 (2009). 教育思想史 今井康雄 (編), 有斐閣, 207-225.
- 辻本雅史 (2009). 教育を「江戸」から考える, NHK出版, 1-195.
- 辻本雅史 (2009). 「学び」の認知科学事典 渡部信一 (編), 大修館書店, 62-80.
- 辻本雅史 (2010). 知の伝達メディアの歴史研究—教育史像の再構築 辻本雅史 (編), 思文閣出版
- 内田由紀子 (2009). 文化と心 遠藤由美 (編) 社会心理学—社会で生きる人のいとなみを探る (いちばんはじめに読む心理学の本2), ミネルヴァ書房, 161-180.
- 内田由紀子 (2010). 文化と幸福感 西村健・藤本修・白樫三四郎・高橋依子 (編) メンタルヘルスへのアプローチ: 臨床心理学、社会心理学、精神医学を融合して, ナカニシヤ出版, 104-116.
- 梅村高太郎 (2009). 鏡に映る私—自己意識に潜む神経症とそれを越えていく動き 伊藤良子・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シリーズ9 心理臨床関係における身体, 創元社, 158-165.
- 渡邊洋子 (2009). 生涯学習概念的成立 主編 田慧生 (日) 田中耕治・執行主編高峽 (編) 21世紀的日本教育改革—中日学者的視点, 教育科学出版
- 渡邊洋子 (2009). 生涯学習概念的成立 田中耕治・田慧生 (編) 21世紀の日本教育改革の動向—日中教育学者の視点, 教育科学出版
- やまだようこ (2009). 仕合わせをむすぶナラティブ 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かつて—幸福感を紡ぐ心理学・教育学, ナカニシヤ出版, 188-189.
- 山名淳 (2009). ヘルバルトから新教育へ 今井康雄 (編) 教育思想史, 有斐閣, 183-203.
- 山名淳 (2009). 生活改革のひび割れた構成物としての新教育 広田照幸・今井康雄 (編) 変貌する教育学, 世織書房, 177-214.
- 矢野智司・今井康雄・秋田喜代美・佐藤学・広田照幸 (編) (2009). 変貌する教育学 世織書房
- 矢野智司 (2009). 限界への教育学に向けて—不可能性と可能性とを横断する銀河鉄道
- 矢野智司・今井康雄・秋田喜代美・佐藤学・広田照幸 (編) 変貌する教育学 世織書房, 21-44.
- 矢追健 (印刷中). 「自己」と「他者」の認識にかかわる脳内神経基盤 荳阪直行 (編) 脳イメージング入門—心理学からのアプローチ, 培風館
- 安田裕子 (2010). 子どもに恵まれないこと 岡本祐子 (編) 成人発達臨床心理学ハンドブック—個と関係性からライフサイクルを観る, ナカニシヤ出版
- 吉川左紀子 (2009). こころを「見る」ということ—心理学のこころみ 川添信介・高橋康夫・吉沢健吉 (編) こころの謎 kokoro の未来, 京都大学学術出版会

2. 論文 (査読有り)

- Adachi, I, Kuwahata, H, Fujita, K, Tomonaga, M., & Matsuzawa, T (2009). Plasticity of ability to form cross-modal representations in infant Japanese macaques *Developmental Science*, 12, 446-452.
- Adachi, I (2009). Cross-modal representations in non-human animals: A new framework of studies of social concepts *Interaction Studies*, 10, 225-251.
- Adachi, I, Chou, DP, & Hampton, RR (2009). Thatcher effect in monkeys demonstrates conservation of face perception across primates *Current Biology*, 19, 1270-1273.

- Adams, R. B. Jr. · Rule, N. O. · Franklin, R. G. Jr. · Wang, E. · Stevenson, M. T. · Yoshikawa, S., Nomura, M., Sato, W., Kveraga, K., & Ambady, N. (2010). Cross-cultural reading the mind in the eyes: An fMRI investigation *Journal of Cognitive Neuroscience*, 22, 97-108.
- 赤上裕幸 (2009). 活字から活映へー水野新幸と『映画教育(活映)』ー マス・コミュニケーション研究, 75, 111-128.
- 赤上裕幸 (2009). 『国民教化メディア』としての映画ー映画法 (1939年) の評価をめぐってー 日本社会教育学会紀要, 45, 1-9.
- 赤上裕幸 (印刷中). 『文化映画』の可能性ー啓蒙と娯楽のメディアミックス 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56
- Anderson, J. R., Kuroshima, H., Paukner, A., & Fujita, K. (2009). Capuchin monkeys (*Cebus apella*) respond to video images of themselves *Animal Cognition*, 12, 55-62.
- Anderson, J. R., Awazu, S., & Fujita, K. (2009). Colour vs. quantity as cues in reverse-reward-competent squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*) *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 62, 673-680.
- Anderson, J. R., Kuroshima, H., & Fujita, K. (in press). Delay of gratification in capuchin monkeys (*Cebus apella*) and squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*) *Journal of Comparative Psychology*.
- Annme, T. (in press). Implications of Social Competence among Thirty-Month-Old Toddlers. *A Theory of Mind Perspective*.
- Asada, K., Tomiwa, K., Okada, M., & Itakura, S. (2010). Atypical verbal communication pattern according to others' attention in children with Williams syndrome *Research in Developmental Disabilities*, 31, 452-457.
- Carvalho, S., Biro, D., McGrew, W. C., & Matsuzawa, T. (2009). Tool-composite reuse in wild chimpanzees (*Pan troglodytes*): archaeologically invisible steps in the technological evolution of early hominins? *Animal Cognition*, 12, S103-S114.
- 趙卿我 (印刷中). 韓国の「遂行評価(performance assessment)」をめぐる政策と課題 カリキュラム研究
- Choi, K., Hirose, H., Sakurai, Y., Iijima, T., & Koike, Y. (2009). Prediction of arm trajectory from the neural activity of the primary motor cortex with modular connectionist architecture *Neural Networks* 22, 1214-1223.
- Craist J., Frigaszy D, Hayashi M., Matsuzawa, T. (2009). Dynamic in-hand movements in adult and young juvenile chimpanzees (*Pan troglodytes*) *American Journal of Physical Anthropology*, 138, 274-285.
- Duffy, S., Toriyama, R., Itakura, S., Kitayama, S. (2009). Development of cultural strategies of attention in North American and Japanese children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 102, 351-359.
- Falk, C.F., Heine, S.J., Yuki, M., Takemura, K. (2009). Why do Westerners self-enhance more than East Asians? *European Journal of Personality*, 23, 183-203.
- 藤井真樹 (印刷中). 保育の場における関与観察者の存在の意味を探るーある園児に投げかけられた言葉をめぐる考察からー 保育学研究, 48
- Fujimura, T., Sato, W., & Suzuki, N. (in press). Facial expression arousal level modulates facial mimicry *International Journal of Psychophysiology*
- 藤野秀則・青柳西蔵・石井裕剛・下田 宏・作田 博・吉川榮和・杉万俊夫 (2009). 「独自のデータベース」に対する愛着の醸成促進方法の提案 ヒューマンファクターズ, 14, 45-54.
- Fujita, K. (2009). Metamemory in tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*) *Animal Cognition*, 12, 575-585.
- 藤田和生・黒島妃香・服部裕子・高橋 真・森本 陽・瀧本彩加・佐藤義明 (2009). フサオマキザルの知性と感情 (Intellectual and affective processes of tufted capuchin monkeys) 霊長類研究, 24, 241-263.
- 藤田和生 (2009). フサオマキザルの社会的知性 (Social intelligence in tufted capuchin monkeys) 動物心理学研究, 59, 117-130.
- 船橋新太郎 (2009). 前頭前野におけるワーキングメモリの神経生理学的研究ーその40年の歩みー 霊長類研究, 24, 273-287.
- Hagura, N., Oouchida, Y., Aramaki, Y., Okada, T., Matsumura, M., Sadato, N., & Naito, E. (2009). Visuokinesthetic Perception of Hand Movement Is Mediated by Cerebro-Cerebellar Interaction between the Left Cerebellum and Right Parietal Cortex *Cerebral Cortex*, 19, 176-186.

- 半澤礼之 (2009). 大学1年生における学業に対するリアリティショックとその対処—学業を重視して大学に入学した心理学専攻の学生を対象とした面接調査から— 青年心理学研究, 21, 31-51.
- 原田宗忠・西田麻衣子・山田裕子・國立淳子・杉原百合子・武地 一 (2009). 初期アルツハイマー型認知症の高齢者における不安と自己の側面 日本認知症ケア学会誌, 8, 40-50.
- Harada, T., Itakura, S., Xu F., Lee, S., Nakashita, S., Saito, D. N., & Sadato, N. (2009). Neural correlates of the judgment of lying: a functional magnetic resonance imaging study. *Neuroscience Research*, 63, 24-34.
- Hattori, Y., Kuroshima, H., & Fujita, K. (2009). Tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*) show understanding of human attentional states when requesting food held by a human *Animal Cognition*, 13, 87-92.
- Hattori, Y., Kano, F., & Tomonaga, M. (In press). Differential sensitivity to conspecific and allospecific cues in chimpanzees and humans: A comparative eye-tracking study. *Biology letters*
- Hayashi M., Sekine S., & Tanaka M. (2009). Copying a model stack of colored blocks by chimpanzees and humans. *Interaction Studies*, 10, 130-149.
- Hayashi, M., Takeshita, H. (2009). Stacking of irregularly shaped blocks in chimpanzees (*Pan troglodytes*) and young humans (*Homo sapiens*) *Animal Cognition*, S1, S49-S58.
- 林子博 (2010). 近世武士忠誠観における公と私—士道論と葉隠を中心に— 教育史フォーラム, 5, 3-20.
- 林美里 (2009). チンパンジーの認知発達研究—その方法と実際— 文化人類学研究, 10, 13-27.
- 開一夫・板倉昭二 (2009). 特集・アンドロイドやエージェントに感じる人の存在感「ロボットによる認知発達研究—アンドロイドはヒトなのかモノなのか—」 日本バーチャルリアリティ学会誌 (JOURNAL OF THE VIRTUAL OF JAPAN), 14, 12-17.
- 平山るみ・楠見孝 (2008). 健康食品の効能とリスク判断に及ぼすサンプルサイズ情報の影響 日本リスク研究学会誌, 19, 43-48.
- 平山るみ・田中優子・河崎美保・楠見孝 (2009). 日本語版批判的思考能力尺度の構成と性質の検討: コーネル批判的思考テスト・レベルZを用いて 日本教育工学会論文誌, 33, 441-448.
- Hirose, N., & Osaka, N. (2009). Object substitution masking induced by illusory masks: Evidence for higher object-level locus of interference. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 35, 931-938.
- Hirose, N., & Osaka, N. (2009). Asymmetry in object substitution masking occurs relative to the direction of spatial attention shift. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 36, 25-37.
- Hirose, S., Oouchida, Y., Matsumura, M., & Naito, E. (2009). Viewing hand grip enhances observer's grip force in a body-part-specific manner *Neuroreport*, 20, 1477-1480.
- Hirose, S., Oouchida, Y., Matsumura, M., & Naito, E. (2010). Human rostral dorsal premotor cortex mediates graspability judgment of external objects by evaluating hand motor capability *Brain Research*, 1313, 134-142.
- Hockings, K. J., Anderson, J. R., & Matsuzawa, T. (2009). Use of Wild and Cultivated Foods by Chimpanzees at Bossou, Republic of Guinea: Feeding Dynamics in a Human-Influenced Environment *American Journal of Primatology*, 71, 1-11.
- 本所恵 (2009). スウェーデンの高校における必修科目の教育目標—数学の全国学力テストの検討を中心に— 教育方法学研究, 34, 13-24.
- 本所恵 (2009). スウェーデンの全国学力テストにおけるパフォーマンス課題—数学のグループ・ディスカッションを評価する— 教育目標・評価学会紀要, 19, 16-26.
- Humle, T., & Matsuzawa, T. (2009). Laterality in hand use across four tool-use behaviors among the wild chimpanzees of Bossou, Guinea, West Africa *American Journal of Primatology*, 70, 40-48.
- Humle, T., Snowdon, C. T., & Matsuzawa, T. (2009). Social influences on ant-dipping acquisition in the wild chimpanzees (*Pan troglodytes verus*) of Bossou, Guinea, West Africa *Animal Cognition*, 12, S37-S48.
- 池田華子 (2009). シモーヌ・ヴェイユの「創造的注意」—「関係」における創造性の恢復に向けて— 『教育哲学研究』, 99, 83-101.
- 池内耕作・広瀬悠三 (印刷中). 楽器作りの教育の実践と意義—道徳性から宗教性への視点に立って— キリスト教教育論集, 18
- Imura, T., & Tomonaga, M. (2009). Moving shadows contribute to the corridor illusion in a chimpanzee (*Pan troglodytes*) *Journal of Comparative Psychology*, 123, 280-286.

- Inou, S., & Matsuzawa, T. (2009). Acquisition and memory of sequence order in young and adult chimpanzees (Pan troglodytes) *Animal Cognition*, 12, S59-S69.
- 井関龍太 (2009). 読みの目標はテキスト情報の再活性化に影響するか?—矛盾パラダイムによる検討—
読書科学, 52, 3-11.
- 石岡学 (2009). 戦前期の小学校職業指導における「教育的眼差し」の意味・機能 人間・環境学, 18, 1.
- 井藤 元 (2010). ゲーテ『ファウスト』の神智学的解明—シュタイナー人間形成論の縮図 ホリスティック
教育研究, 13
- Kanakogi, Y., & Itakura, S. (in press). The link between perception and action in early infancy: From a
view of the direct matching hypothesis *Japanese Psychological Research*
- 鹿子木康弘・森口佑介・板倉昭二 (2009). 内省能力と二次的信念の理解との発達の関連: 再帰的な思考の
役割から 発達心理学研究, 20, 419-427.
- 鹿子木康弘・板倉昭二 (2009). 乳児の目標帰属研究とその神経基盤 心理学評論, 52, 63-74.
- 金子勉 (2009). 大学論の原点—フンボルト理念の再検討— 教育学研究, 76, 208-219.
- Kano, F., & Tomonaga, M. (In press). Attention to emotional scenes including whole-body expressions
in chimpanzees (Pan troglodytes) *Journal of comparative psychology*
- Kano, F., & Tomonaga, M. (2009). How chimpanzees look at pictures: A comparative eye-tracking
study *Proceedings of the Royal Society Series, B* 276, 1949-1955.
- Kano, F., & Tomonaga, M. (2010). Face scanning in chimpanzees and humans: Continuity and
discontinuity *Animal Behaviour*, 79, 227-235.
- 河合淳子・野口剛 (印刷中). 日本人学生の留学志向に関する実証的研究—京都大学生アンケート・インタ
ビュー調査にみる「留学志向の三層構造」— 留学生指導・交流研究, 12
- Kawai, T. (2009). Union and separation in the therapy of pervasive developmental disorders and
ADHD *Journal of Analytical Psychology*, 54, 659-675.
- Kawakami, F., Kawakami, K., Tomonaga, M., & Takai-Kawakami, K. (2009). Can we observe
spontaneous smiles in 1-year-olds? *Infant Behavior & Development*, 32, 416-421.
- 河崎美保 (印刷中). 誤解法聴取による正解法理解促進効果: 小学5年生の算数授業場面における検討 発達
心理学研究
- 川崎良孝 (2010). 公立図書館在美国全境服务的实现过程 上海图书馆学会・上海图书馆『图书馆杂志』, 29,
56-59, 68.
- Kei Mochizuki, & Shintaro Funahashi (2009). Effect of Emotional Distracters on Cognitive
Decision-Making in Cambridge Gambling Task. *Psychologia*, 52, 122-136.
- Kihara, K., Ikeda, T., Matsuyoshi, D., Hirose, N., Mima, T., Fukuyama, H., & Osaka, N. (in press).
Differential Contributions of the Intraparietal Sulcus and the Inferior Parietal Lobe to
Attentional Blink. *Journal of Cognitive Neuroscience*
- 小原優貴 (2009). インドにおける貧困層対象の私立学校の台頭とその存続メカニズムに関する研究—デリ
ー・シャードラ地区の無認可学校を事例として— 比較教育学研究, 39, 131-150.
- Kojima, T. (2009). How do we use distance representation based on spatial terms? *Cognitive
Processing*, 10, S237-S239.
- 小島隆次 (2009). 視点変化が左右の指示領域に及ぼす影響 日本認知言語学会論文集 9, 500-506.
- Komeda, H., Kawasaki, M., Tsunemi, K., & Kusumi, T. (2009). Differences between estimating
protagonists' emotions and evaluating readers' emotions in narrative comprehension.
Cognition & Emotion, 23, 135-151.
- 河野一紀 (2009). 心理臨床におけることばと偶有性—Davidson Dの哲学とFreud Sの精神分析を通して
の一考察 心理臨床学研究, 27, 53-64.
- Kuramori, M., Iwaki, T., & Kusumi, T. (2009). Emergence of form and function in a visual image
combination. *Psychologia: An International Journal of Psychological Sciences*, 52(1), 50-66.
- Kurita, T., & Kusumi, T. (2009). Implicit and Explicit Attitudes toward People with Disabilities and
Effects of the Internal and External Sources of Motivation in Moderating Prejudice
Psychologia, 52, 253-260.
- 栗田季佳・楠見孝 (印刷中). 「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果—接触経験との関
連から— 教育心理学研究
- Kusumi, T., Matsuda, K., & Sugimori, E. (印刷中). The effect of aging on nostalgia in consumer's Ad
processing *Psychological Research*, 52
- 楠見孝・中本敬子・子安増生 (2010). 痛みの比喩表現の身体感覚と認知の構造 心理学研究, 80, 467-475.

- Kutsuki, A., Kuroki, M., Egami, S., Ogura, T., Itakura, S., & JCS (2009). Individual differences in changes in infants' interest towards social signals in relation to developmental index. *Infant Behavior and Development*, 32, 381-391.
- Kutsuki, A., Ogura, T., Egami, S., Itakura, S., & JCS (2009). Development of infants' request expressions from 11 to 15 months. *Psychological Reports*, 105, 865-878.
- Lingnau, A., Ashida, H., Wall, M. B., & Smith, A. T. (2009). Speed encoding in human visual cortex revealed by fMRI adaptation *Journal of Vision*, 9, 1-14.
- Maehara, Y., & Saito, S. (2009). The processing-storage relationship in working memory span: From a perspective of a representation-based interference view *Psychologia*, 52, 1-12.
- Martinez, L., & Matsuzawa, T. (in press). Effect of species-specificity in auditory-visual intermodal matching in a chimpanzee (*Pan troglodytes*) and humans *Behavioural Processes*
- Martinez, L., & Matsuzawa, T. (2009). Visual and auditory conditional position discrimination in chimpanzees (*Pan troglodytes*). *Behavioural Processes*, 82, 90-94.
- Martinez, L., & Matsuzawa, T. (2009). Auditory-visual intermodal matching based on individual recognition in a chimpanzee (*Pan troglodytes*) *Animal Cognition*, 12, S71-S85.
- 松永智子 (2010). 頭本元貞における発信型英語メディアの軌跡 教育史フォーラム, 5
- Matsuno, T., & Fujita, K. (2009). A comparative psychophysical approach to visual perception in primates *Primates*, 50, 121-130.
- Matsuzawa, T. (2009). Symbolic representation of number in chimpanzees *Current opinion in Neurobiology*, 19, 92-98.
- Matsuzawa, T. (2009). Q & A Tetsuro Matsuzawa *Current Biology*, 19, R310-R312.
- Matsuzawa, T. (2009). The chimpanzee mind: in search of the evolutionary roots of the human mind *Animal Cognition*, 12, S1-S9.
- Miyamoto, Y., Uchida, Y., & Ellsworth, P. C. (2009). Culture and mixed emotions: Co-occurrence of positive and negative emotions in Japan and the U.S. *Emotion*
- Miyata, H., Itakura, S., & Fujita, K. (2009). Planning in human children (*Homo sapiens*) assessed by maze problems on the touch screen *Journal of Comparative Psychology*, 123, 69-78.
- 溝上慎一・中間玲子・山田剛史・森朋子 (2009). 学習タイプ (授業・授業外学習) による知識・技能の獲得差の検討 大学教育学会誌, 31, 112-119.
- Mochizuki, K., & Funahashi, S. (2009). Effect of emotional distracters on cognitive decision-making in Cambridge gambling task. *Psychologia*, 52, 122-136.
- Moises Kirk, C. F. (in press). Assessing changes in performance and monitoring processes in individual and collaborative tests according to students' metacognitive skills *European Journal of Cognitive Psychology*
- Moises Kirk, C. F. (2009). Confidence judgments in real classroom settings: Monitoring performance in different types of tests *International Journal of Psychology*, 44, 93-108.
- Moriguchi, Y., Okumura, Y., Kanakogi, Y., & Itakura, S. (印刷中). Japanese children's difficulty with false belief understanding: Is it real or apparent? *Psychologia*.
- 森本洋介 (2009). カナダ・オンタリオ州における学習者の評価方法に関する考察: 王立委員会報告書『学ぶことを好きになるために』を手掛かりに 教育目標・評価学会紀要, 19, 47-56.
- Murai, C., & Tomonaga, M. (2009). Fear responses of Japanese monkeys to scale models *Journal of Ethology*, 27, 1-10.
- 森田健一 (2010). においによる記憶想起についての心理臨床学的考察: 非言語的な無意識の動きに着目して 心理臨床学研究, 27, 664-674.
- Takeshita, H., Myowa-Yamakoshi, M., & Hirata, S. (2009). The supine position of postnatal human infants: Implications for the development of cognitive intelligence *Interaction Studies*, 10, 252-268.
- 明和政子 (2009). 身体マッピング能力の基盤を探る ベビーサイエンス, 8, 2-13.
- 鍋田智広・楠見孝 (2009). Deese-Roediger-McDermott (DRM) 手続きを用いた虚偽記憶研究—虚偽記憶の発生過程と主観的想起経験— 心理学評論, 52, 545-575.
- 永岑光恵・楠見孝 (2009). 脳神経科学リテラシーをどう評価するか: 教育評価用の質問紙作成の試み 科学技術コミュニケーション, 7, 119-132.
- 永田素彦・吉岡崇仁・大川智船 (2010). 流域環境の多様な属性に対する住民の選好評価のためのシナリオアンケート手法の開発 実験社会心理学研究, 49, 170-179.
- Nakamura, N., Watanabe, S., Betsuyaku, T., & Fujita, K. (in press). Do bantams (*Gallus gallus domesticus*) amodally complete? An analysis of visual search performance *Journal of Comparative Psychology*

- Nakamura, N., Watanabe, S., & Fujita, K. (2009). Further analysis of perception of reversed Müller-Lyer figures for pigeons (*Columba livia*) *Perceptual and Motor Skills*, 108, 239-250.
- Nakamura, N., Watanabe, S., & Fujita, K. (2009). Further analysis of perception of the standard Müller-Lyer figures in pigeons (*Columba livia*) and humans (*Homo sapiens*): Effects of length of brackets *Journal of Comparative Psychology*, 123, 287-294.
- 中野江梨子 (印刷中). PDIの前後における風景構成法体験の変化について—作品の主観的な「感じ」に関するSD法評定の変化とインタビューから— 心理臨床学研究, 26
- Nakao, H., & Itakura, S. (2009). An integrated view of empathy: Psychology, philosophy, and neuroscience. *Integrative Psychological & Behavioral Science*, 10, 1007-1012.
- Nakato, E., Otsuka, Y., Konuma, H., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Tomonaga, M. (2009). Perception of illusory shift of eye gaze direction by infants *Infant Behavior & Development*, 32, 422-428.
- 西平直 (2009). 発達と超越の交叉反転としての『超越性』—世阿弥『伝書』を手がかりとして 教育哲学研究, 100, 263-278.
- 西平直 (2009). 死んでゆく不思議・生まれてくる不思議—子どもたちにどう伝えるか 大谷学報 332号, 89, 78-100.
- 西平直 (印刷中). 無心の誘惑・無心の強迫—無心・信仰・スピリチュアリティ 宗教研究 (日本宗教学会)
- Nishiyama, N., & Yamada, Y. (2009). Visual Narratives of Grandparent-Parent-Child Relationships from the Perspective of Young Adult Granddaughters. *International Society for the Study of Behavioural Development Bulletin*, 56, 2-6.
- 野口素子・吉川左紀子 (2010). 表情表出による情動調整が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響—不一致表出に着目して— 対人社会心理学研究, 10, 147-154.
- 野口寿一 (in press). TATの一変法「第2物語法」の試み 箱庭療法学研究, 23
- 小川絢子・子安増生 (印刷中). 幼児期における他者の誤信念に基づく行動への理由づけと実行機能の関連性 発達心理学研究
- 及川恵・坂本真士 (印刷中). 抑うつ対処の自己効力感の向上を目的とした実践に関する効果研究—大学の授業を活用して— 健康心理学研究, 22
- Okanda, M., Itakura, S. (2010). When do children exhibit a yes bias? *Child Development*, 81, 568-580.
- Okanda, M., & Itakura, S. (in press). Do bilingual children exhibit a yes bias to yes-no questions?: Relationship between children's yes bias and verbal ability *International Journal of Bilingualism*
- Okanda, M. (in press). Do bilingual children exhibit a yes bias to yes-no questions? Relationship between children's yes bias and verbal ability.
- Okanda, M., & Itakura, S. (in press). When do children exhibit a yes bias? *Child Development*.
- Okumura, Y., Moriguchi, Y., Kanakogi, Y., & Itakura, S. (in press). Japanese children's difficulty with false belief understanding: Is it real or apparent? *Psychologia*.
- 小野文生 (2009). 教育と宗教・超越の〈紐帯〉を思考することについて—『教育哲学研究』の半世紀を読み直す 教育哲学研究, 100, 243-262.
- 小野文生 (印刷中). ブーバー思想の弁証法的構造、あるいはユダヤ悲劇の根源—『ゴグとマゴグ』における悲劇の歴史のアレゴリーについて 京都ユダヤ思想, 1
- 大石真吾 (印刷中). 箱庭制作における砂の作用に関する研究—作り手の主観的体験にもとづいて— 箱庭療法学研究, 22
- Osaka, N. (2009). Walk related mimic word activates the extra-striate visual cortex in the human brain: An fMRI study *Behavioral Brain Research*, 198, 186-189.
- Osaka, N., & Osaka, M. (2009). Gaze-related mimic word activates the frontal eye field and related network in the human brain: an fMRI study. *Neuroscience Letters*, 461, 65-68.
- 荳阪満里子・荳阪直行 (2009). 記憶と言葉の理解をつなぐワーキングメモリ 言語, 38, 46-53.
- Otsuka, Y., Osaka, N., Ikeda, T., & Osaka, M. (2009). Individual differences in the theory of mind and superior temporal sulcus. *Neuroscience Letters*, 463, 150-153.
- Paxton, R., Basile, B.M., Adachi, I., Suzuki, W.A., Wilson, M.E., & Hampton, R.R. (in press). Rhesus monkeys (*Macaca mulatta*) rapidly learn to select dominant individuals in videos of artificial social interactions between unfamiliar conspecifics *Journal of Comparative Psychology*
- Pot, P., Hayashi, M., & Matsuzawa, T. (2009). Spatial construction skills of chimpanzees (*Pan troglodytes*) and young human children (*Homo sapiens sapiens*) *Developmental Science*, 12, 536-548.

- Rule, N. O., Ambady, N., Adams, R. B. Jr., Ozono, H., Nakashima, S., Yoshikawa, S., & Watabe, M. (in press). Polling the face: Prediction and consensus across cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*
- Saeki, E., & Saito, S. (2009). Verbal representation in task order control: An examination with transition and task cues in random task switching. *Memory & Cognition*, 37, 1040-1050.
- Saiki, J. (2009). Functional roles of memory for feature-location binding in event perception: Investigation with spatiotemporal visual search. *Visual Cognition*, 17, 212-231.
- Saiki, J., & Miyatsuji, H. (2009). Estimated capacity of object files in visual short-term memory is not improved by retrieval cueing. *Journal of Vision*, 9, 1-15.
- Saito, N. (2009). Finding Perfect Pitch: Reading Perfectionist Narrative with Stanley Cavell *Philosophy of Education*, 2009
- Saito, N. (2009). Beyond monolingualism: Philosophy as translation and the understanding of other cultures *Ethics and Education*, 5, 131-139.
- Saito, N., Standish, P. (2009). "What's the problem with problem-solving?: Language, skepticism and pragmatism *Contemporary Pragmatism*, 6, 153-167.
- Saito, N. (2009). Ourselves in Translation: Stanley Cavell and Philosophy as Autobiography *Journal of Philosophy of Education*, 43, 253-267.
- Saito, S., Jarrold, C., Riby, D. M. (2009). Exploring the forgetting mechanisms in working memory: Evidence from a reasoning span test. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 62, 1401-1419.
- 坂井祐円 (2009). 魂の癒しといのちの根源性—スピリチュアルケア研究会の歩みを通して— 南山宗教文化研究所報, 19, 52-66.
- 坂本安・高橋靖恵 (2009). 友人関係における心理的距離のズレと疎外感の関連 青年心理学研究, 21, 69-81.
- Sakurai, Y., Takahashi, S., & Nomura, M. (2009). Dynamic changes of firing frequency and synchrony of the rat hippocampal neurons caused by BMI *Proceeding of 3rd International Symposium on Mobiligence*, 206-210.
- 笹倉尚子 (印刷中). 漫画やアニメについて他者に語るプロセス 心理臨床学研究, 28
- Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., Yoshikawa, S. (2009). Commonalities in the neural mechanisms underlying automatic attentional shifts by gaze, gestures, and symbols *Neuroimage*, 45, 984-992.
- Sato, W., & Yoshikawa, S. (2009). Anti-expressions: Artificial control stimuli for emotional facial expressions regarding visual properties *Social Behavior and Personality*, 37, 491-502.
- Sato, W., Uono, S., Matsuura, N., & Toichi, M. (2009). Misrecognition of facial expressions in delinquents Child and Adolescent *Psychiatry and Mental Health*, 3, 27
- Sato, W., Kochiyama, T., & Yoshikawa, S. (2010). Amygdala activity in response to forward versus backward dynamic facial expressions *Brain Research*, 1315, 92-99.
- Sato, W., & Yoshikawa, S. (2010). Detection of emotional facial expressions and anti-expressions *Visual Cognition*, 18, 369-388.
- Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S. (in press). Automatic attentional shifts by gaze, gestures, and symbols. *Psychologia*
- Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S. (in press). Amygdala integrates emotional expression and gaze direction in response to dynamic facial expressions *Neuroimage*
- Sato, W., Uono, S., Okada, T., Toichi, M. (in press). Impairment of unconscious, but not conscious, gaze-triggered attention orienting in Asperger's disorder *Research in Autism Spectrum Disorders*
- Schug, J., Yuki, M., Horikawa, H., Takemura, K. (2009). Similarity attraction and actually selecting similar others: How cross-societal differences in relational mobility affect interpersonal similarity in Japan and the United States *Asian Journal of Social Psychology*, 12, 95-103.
- 清水亜紀子 (2009). 「自己の二重性の意識化」としての自我体験 パーソナリティー研究, 17, 231-249.
- 清水亜紀子 (印刷中). 「分離のかなしみ」を共に生き抜くことの意義—癌を生きる男児との遊戯療法を手がかりに— 心理臨床学研究, 28
- Shineha, R., Kawakami, M., Kawakami, K., Nagata, M., Tada, T., & Kato, K. (in press). Familiarity and prudence of the Japanese public with research into induced pluripotent stem cells, and their desire for its proper regulation *Stem Cell, Reviews and Report*, 6
- Shinomoto, S., Kim, H., Shimokawa, T., Matsuno, N., Funahashi, S., Shima, K., Fujita, I., Tamura, H., Doi, T., Kawano, K., Inaba, N., Fukushima, K., Kurkin, S., Kurata, K., Taira, M., Tsutsui, K.,

- Komatsu, H., Ogawa, T., Koida, K., Tanji, J., & Toyama, K. (2009). Relating neuronal firing patterns to functional differentiation of cerebral cortex. *PLoS Computational Biology*, 5, 1-10.
- 塩原佳典 (2009). 明治前期における「貞享騒動」物語の変容 信濃, 61, 45-62.
- 塩原佳典 (2009). 明治10年代前半における義民伝承のメディア史的考察 教育史フォーラム, 4, 27-45.
- Shirai, N., Imura, T., Hattori, Y., Adachi, I., Ichihara, S., Kanazawa, S., Yamaguchi, KM, & Tomonaga, M (in press). Asymmetric perception of radial expansion/contraction in Japanese macaque (*Macaca fuscata*) infants *Experimental Brain Research*
- 白戸健一郎 (2010). 近藤春雄におけるメディア文化政策論の展開 教育史フォーラム, 5
- Siegal, M., Surian, L., Matsuo, A., Geraci, A., Iozzi, L., Okumura, Y., & Itakura, S (2010). Bilingualism accentuates children's conversational understanding. *PLoS ONE*, 5, e9004
- 蘇米雅 (印刷中). 時代要請としての地域「共同性」の創造 集団力学, 27
- 杉万俊夫 (2009). 人間科学における主観的言説の重要性 集団力学, 26, 1-13.
- 杉万俊夫 (印刷中). 「集団主義—個人主義」をめぐる3つのトレンドと現代日本社会 集団力学, 27
- Kuwabara, T., Sudo, H., Haganaka, C., Nishijima, M., Morita, K., Hasegawa, C., & Oyama, Y. (2008). A Study on the New Paradigm in Collaborations Between Teachers and School Counselors *Psychologia*, 267-279.
- 平 知宏・中本敬子・木戸口英樹・木村洋太・常深浩平・楠見孝 (2009). 具体文および抽象文を用いた行為・文一致効果の実験的検証 認知心理学研究, 7, 57-66.
- Takahama, S., Miyauchi, S., & Saiki, J. (2009). Neural basis for dynamic updating of object representation in visual working memory. *NeuroImage*, 49, 3394-3403.
- Takahashi, M., Lauwereyns, J., Sakurai, Y., & Tsukada, M. (2009). A code for spatial alternation during fixation in rat hippocampal CA1 neurons *Journal of Neurophysiology*, 102, 556-567.
- Takahashi, S., & Sakurai, Y. (2009). Information in small neuronal ensemble activity in the hippocampal CA1 during delayed non-matching to sample performance in rats *BMC Neuroscience*, 10, 1-11.
- Takahashi, S., & Sakurai, Y. (2009). Sub-millisecond firing synchrony of closely neighboring pyramidal neurons in hippocampal CA1 of rats during delayed non-matching to sample task *Frontiers in Neural Circuits*, 3, 1-18.
- 高岡祥子 (2009). イヌ・ヒト間の社会的やり取りから見たイヌの社会的知性 動物心理学研究, 59, 15-23.
- Takebayashi, M., & Funahashi, S. (2009). Monkeys exhibit preference for biologically non-significant visual stimuli. *Psychologia*, 52, 147-161.
- 武寛子・乾美紀・鈴木隆子・楠和樹・田村徳子 (2009). グアテマラにおけるコミュニティ運営学校の役割 アジア教育研究報告, 9, 5-22.
- 田村徳子 (2009). グアテマラにおけるコミュニティ運営学校の役割 杉本均 (編) アジア教育研究報告, 9, 5-22.
- Takemura, K., Yuki, M., Ohtsubo, Y. (in press). Attending inside or outside: A Japan-US comparison of spontaneous memory of group information *Asian Journal of Social Psychology*
- 竹中菜苗 (2009). 「見えないもの」への名付けとしての〈異人〉—柳田国男の『遠野物語』を手掛かりに ユング心理学研究, 2, 79-100.
- 竹中菜苗 (発表予定). 自閉症児のプレイセラピーの可能性—ある広汎性発達障害児の事例検討から 心理臨床学研究
- 竹内みちる・樂木章子・杉万俊夫 (印刷中). 産むことと育てることを分離する社会規範の可能性: NPO法人「環の会」の事例から 集団力学
- Takimoto, A., Kuroshima, H., & Fujita, K. (2010). Capuchin monkeys (*Cebus apella*) are sensitive to others' reward: an experimental analysis of food-choice for conspecifics. *Animal Cognition*, 13, 249-261.
- Tanabe, A., & Osaka, N. (2009). Picture span test: Measuring visual working memory capacity involved in remembering and comprehension. *Behavior Research Methods* 41, 309-317.
- 田中耕治 (2009). 学力調査における質と平等の問題—『真正の評価』論からみえてくるもの— 教育新世界, 57, 2-8.
- 田中耕治 (2009). 学力調査に見る日本の子どもの特徴と弱点—算数学力に焦点を当てて— 児童心理, 890, 18-24.
- 田中耕治 (2009). 『信じて疑う』読解力の育成—PISAが問う国語教育のあり方— 臨時増刊:国語教育, 708, 23-25.
- 田中耕治 (2009). 指導要録の改善点—各教科の『観点』と『評定』について— 指導と評価, 656, 9-12.

- Tanaka, M., & Yamamoto, S. (2009). Token transfer between mother and offspring chimpanzees (Pan troglodytes): mother-offspring interaction in a competitive situation *Animal Cognition*, 12, 19-26.
- Tanaka, M., & Uchikoshi, M. (2010). Visual preference in a human-reared agile gibbon (Hylobates agilis) *Primates* 51, 63-67.
- Tanaka, Y. (2009). On Dissociation as a Psychological Phenomena *Psychologia*, 2008 51, 239-257.
- 田中慶江 (2009). まなざし体験の生成 心理臨床学研究 27, 409-419.
- Tomonaga, M., & Imura, T. (2009). Faces capture the visuospatial attention of chimpanzees (Pan troglodytes): Evidence from a cueing experiment *Frontiers in Zoology*, 6, 14-14.
- Tomonaga, M., & Imura, T. (2010). Visual search for human gaze direction by a chimpanzee (Pan troglodytes) *PLoS ONE* 5, e9131-e9131.
- 東畑開人 (2009). 心理臨床における美の問題—三つの理論のまなざし 心理臨床学研究, 27, 570-580.
- 東畑開人 (2009). 玩具の存在論 箱庭療法学研究, 21, 3-17.
- Tsubomi, H., Ikeda, T., Hanakawa, T., Hirose, N., Fukuyama, H., & Osaka, N. (2009). Connectivity and signal intensity in the parieto-occipital cortex predicts top-down attentional effect in visual masking: an fMRI study based on individual differences. *Neuroimage*, 45, 587-597.
- Tsuji, A. (in press). Experience in the Very Moment of Writing: Reconsidering Walter Benjamin's Theory of Mimesis, *Journal of Philosophy of Education*, 125-136.
- 常深浩平・楠見孝 (2010). 物語理解を支える知覚・運動処理—擬似自伝的記憶モデルの試み— 心理学評論, 52, 529-544.
- Uchida, Y., Townsend, S.S.M, Markus, H. R., & Bergsieker, H. B. (2009). Emotions as Within or Between People? Cultural Variation in Lay Theories of Emotion Expression and Inference. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 1427-1439.
- Uchida, Y., Kitayama, S. (2009). Happiness and unhappiness in east and west: Themes and variations *Emotion*, 9, 441-456.
- 上市秀雄・楠見孝 (2010). 裁判員制度に対する参加意向・要望に影響を及ぼす認知・感情要因の関連性：定職の有無による比較 認知心理学研究, 17, 89-101.
- Ueno, A., Hirata, S., Fuwa, K., Sugama, K., Kusunoki, K., Matsuda, G., Fukushima, H., Hiraki, H., Tomonaga, M., & Hasegawa, T. (2010). Brain activity in an awake chimpanzee in response to the sound of her own name *Biology Letters*, -DOI 10.1098/rsbl.20233.
- Uono, S., Sato, W., & Toichi, M. (2009). Dynamic fearful gaze does not enhance attention orienting in individuals with Asperger's disorder *Brain and Cognition*, 71, 229-233.
- Uono, S., Sato, W., Michimata, C., Yoshikawa, S., & Toichi, M. (2009). Facilitation of gaze-triggered attention orienting by a fearful expression and its relationship to anxiety *Psychologia*, 52, 188-197.
- Uono, S., Sato, W., & Toichi, M. (2009). Dynamic fearful expressions enhance gaze-triggered attention orienting in high and low anxiety individuals *Social Behavior and Personality*, 37, 1313-1326.
- Uono, S., Sato, W., & Toichi, M. (2010). Brief report: Representational momentum for dynamic facial expressions in pervasive developmental disorder *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 40, 371-377.
- Ushitani, T., Imura, T., & Tomonaga, M. (in press). Object-based attention in chimpanzees (Pan troglodytes) *Vision Research*.
- Wagner, W., Kronberger, N., Nagata, M., Sen, R., Holtz, P., Palacios, F.F. (in press). An essentialist theory of Hybrids *Asian Journal of Social Psychology*
- 和崎光太郎 (2009). 世紀転換期における<修養>の変容 教育史フォーラム, 4
- Watanabe, Y., Takeda, K., Funahashi, S. (2009). Population vector analysis of primate mediodorsal thalamic activity during oculomotor delayed-response performance. *Cerebral Cortex*, 19, 1313-1321.
- 山田恭子・鍋田智広・岡かおり・中條和光 (2009). 虚再認の生起に及ぼす環境的文脈の効果 心理学研究, 80, 591-598.
- やまだようこ (印刷中). 時間の流れは不可逆的吗?—ビジュアル・ナラティブ「人生のイメージ地図」にみる、前進する、循環する、居るイメージ 質的心理学研究, 9
- Yamakawa, Y., Kanai, R., Matsumura, M., & Naito, E. (2009). Social Distance Evaluation in Human Parietal Cortex *Public Library of Science ONE* 4, e4360.

- Yamamoto, S., & Tanaka, M. (2009). How did altruism and reciprocity evolve in humans? Perspectives from experiments on chimpanzees (Pan troglodytes) *Interaction Studies*, 10, 150-182.
- Yamamoto, S., & Tanaka, M. (2009). Do chimpanzees (Pan troglodytes) spontaneously take turns in a reciprocal cooperation task? *Journal of Comparative Psychology*, 123, 242-249.
- Yamamoto, S., & Tanaka, M. (2009). Selfish strategies develop in social problem situations in chimpanzee (Pan troglodytes) mother-infant pairs *Animal Cognition*, 12, 27-36.
- Yamamoto, S., Humle T., & Tanaka, M. (2009). Chimpanzees Help Each Other upon Request *PLoS ONE*, 4, e7416.
- Yamamoto, S., & Tanaka, M. (2009). The influence of kin relationship and reciprocal context on chimpanzees' other-regarding preferences. *Animal Behaviour*, 79, 595-602.
- 山本和行 (2009). 一八九〇年代宮城県における国家教育社の活動—自由民権運動との連続／非連続に着目して— *日本教育史研究*, 28, 45-73.
- 山名淳 (印刷中). Changes in Japan's School Architecture Since the Contact with the West—An effort to bridge the interpretation from the disciplinary theory to the system theory *History of Education*, 39
- 山内隆史・楠見孝 (2009). 概念研究からみたオントロジー工学 認知科学, 17, 54-65.
- 山崎徳子 (2009). 自閉症児の母親はいかに子どもを「分かる」か対話から探る 自閉症児への向かい方 応用心理学研究, 34, 182-192.
- 山崎貴子 (2009). 戦前期日本の大衆婦人雑誌にみる職業婦人イメージの変容 教育社会学研究, 85, 93-112.
- Yaoi, K., Osaka, N., & Osaka, M. (2009). Is the self special in the dorsomedial prefrontal cortex? An fMRI study. *Social Neuroscience*, 4, 455-463.
- ヤユツ・ナパイ (2009). 台湾原住民族部落スマグスにおける観光事業と多分な教育・タイヤル住民の「部落を教室にする」実践 *日本台湾学会報*, 11, 177-198.
- 吉田右子・川崎良孝 (2009). 「アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究」 『図書館界』, 61, 2-15.

3. 論文 (査読なし)

- 陳蕾・齋木潤 (2010). 課題の切り替えが視覚探索課題に及ぼす影響 *Technical Report on Attention and Cognition*, 1-2.
- 古川裕之 (2010). 浮遊し「繋がらない」世界を生きる自閉傾向の9歳男児とのプレイセラピー 臨床心理事例研究, 35, 173-186.
- 羽山裕子 (2009). M.M.クレイのリーディング・リカバリー・プログラムに関する検討 京都大学卒業論文
- 羽山裕子 (2010). M.M.クレイのリーディング・リカバリー・プログラムの検討 関西教育学会年報
- Hirose, Y (in press). Kant's Concept of Haooiness: Within and Beyond Usefulness *Proceedings of the 3rd International Symposium between the Institute of Education, University of London(UK), and the Graduate School of Education, Kyoto University*.
- 細尾萌子 (2008). 昭和2年の中学校入学者選抜方法改正時における二つの評価論の位相——栃木県内中学校の昭和3年度入学考査の方針及び人物考査問題の分析を通じて—— *関西教育学会年報*, 32, 36-40.
- 井藤美由紀 (2010). 末期がん患者とその家族はどんな対応を望んでいたのか—遺族インタビューより— *がん患者ケア*, 3, 9-13.
- 角野善宏 (2009). 面接という場の「内」と「外」 *臨床心理事例研究* 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 35, 14-16.
- 鎌田東二 (2009). 『英霊の聲』と霊学シャーマニズム 三島由紀夫研究, 8, 鼎書房, 11-23.
- 鎌田東二 (2009). 雅楽のフォークロア—雅楽と平田篤胤『仙境異聞』の七生舞 神野藤昭夫・多忠輝 (編) 越境する雅楽文化 書肆フローラ, 213-229.
- 鎌田東二 (2009). アニミスティック・センシティビティと『生態智』を求めて *比較文明学会ニュースレター*, 51, 1
- 鎌田東二 (2009). 霊性の京都学—京都の生態智を求めて ① 月刊京都2009年10月号 白川書院
- 鎌田東二 (2009). 霊性の京都学—京都の生態智を求めて ② 月刊京都2009年11月号 白川書院
- 鎌田東二 (2009). 霊性の京都学—京都の生態智を求めて ③ 月刊京都2009年12月号 白川書院
- 鎌田東二 (2009). 霊性の京都学—京都の生態智を求めて ④ 月刊京都2010年1月号 白川書院
- 鎌田東二 (2009). 霊性の京都学—京都の生態智を求めて ⑤ 月刊京都2010年2月号 白川書院

- 鎌田東二 (2009). 霊性の京都学—京都の生態智を求めて ⑥ 月刊京都2010年3月号 白川書院
- 鎌田東二 (2009). 東山修験道から見た平安京生態智 地球人 13, ビイグ・ネット・プレス
- 鎌田東二 (2009). 患者本位の医療とスピリチュアリティ 地球人 14, ビイグ・ネット・プレス
- 金津将庸・山本洋紀・澤本伸克・福山秀直・齋木潤 (2009). ヒト頭頂間溝のトポグラフィック領域における視覚性短期記憶関連活動 電子情報通信学会技術研究報告, 109, 329-334.
- 河合俊雄 (2009). 日本における分析心理学 ユング心理学研究・日本における分析心理学, 1, 118-135.
- 河合俊雄 (2009). もの・内面・接点: 心理療法におけるこころ観を求めて もの学雑誌, 3, 60-70.
- 河合俊雄 (2009). 対人恐怖から発達障害まで: 主体確立の躓きの歴史 臨床心理学 9, 685-690.
- 菊野雄一郎 (2010). 課題間相関と遺伝子多型解析を用いた視覚的注意機能の個人差に関する認知遺伝学的研究 注意と認知研究会, 8, 1-2.
- 駒込武 (2009). 台湾史研究の動向と課題 日本台湾学会報, 11, 75-89.
- 子安増生 (2009). 発達心理学から見た望ましいカリキュラムと教育評価 クオリティ・エデュケーション (国際教育学会), 2, 59-77.
- Kurita, T. (2009). Implicit Association of Concepts and Attitudes. *Proceedings of the 2nd International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University (Japan) and the Institute of Education, University of London (UK)*. 107-110.
- 楠見孝・松田 憲・杉森絵里子 (2009). 広告と消費者心理: 単純接触効果による安心感とノスタルジア 基礎心理学研究, 28, 142-146.
- 桑原知子 (2009). 心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法⑧ずれる こころの科学, 145, 102-107.
- 桑原知子 (2009). 心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法⑨きる／きれる こころの科学, 146, 104-109.
- 桑原知子 (2009). 心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法⑩つなぐ／つながる こころの科学, 147, 102-107.
- 桑原知子 (2009). 心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法⑪はなす こころの科学, 148, 152-157.
- 桑原知子 (2010). 心理療法で何がおこっているのか—動詞でひもとく心理療法⑫よむ こころの科学, 149, 120-125.
- 桑原知子 (印刷中). 心理療法でなにがおこっているのか—動詞でひもとく心理療法⑬かく こころの科学, 150
- 李琦・齋木潤 (2010). 視覚的ワーキングメモリにおける特徴ベースの注意の効果 *Technical Report on Attention and Cognition*, 3, 1-2.
- 松木邦裕 (2009). ヒステリー—パーソナリティのひとつの母体として 精神分析研究, 53, 270-280.
- 松下佳代 (2009). 「主体的な学び」の原点—学習論の視座から— 大学教育学会誌, 31, 14-18.
- Mizokawa, A. (2009). Young children's social and cognitive development. Saito, N & Mattig, R (編) *Proceedings of the 2nd International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University (Japan) and the Institute of Education, University of London (UK)*, 171-174.
- 森崎志麻・大家聡樹・清水亜紀子・西田麻衣子・高橋紗也子・木下直紀・中川みず穂・藤江淳史・義江多恵子・根本眞弓・川端亨子 (印刷中). 1糖尿病における心理臨床の可能性—1型糖尿病患者の調査事例から「関係」についての語りを聴くことの意味を考える— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 13
- 森田健一 (2009). 学校現場をまなざす心理臨床学的視点 全国私立高等学校定時制連絡協議会会報 30, 34-39.
- 長岡千賀・小森政嗣 (2009). 心理臨床対話のマクロ的時間構造 信学技報, 109, 29-34.
- 長岡千賀・小森政嗣 (2009). 心理臨床面接におけるカウンセラーの瞬目に関する予備的検討 信学技報, 109, 35-38.
- 永田素彦 (2010). 特集の趣旨: 地域環境問題の社会心理学 実験社会心理学研究, 49, 168-169.
- Nakamura, N., Watanabe, S, Betsuyaku, T., Fujita, K. (2009). Do bantams amodally complete partly occluded figures? *The Japanese Journal of Psychonomic Science*, 28, 169-170.
- 中嶋智史・森本裕子・吉川左紀子 (2009). 表情認知における暗闇の効果 電子情報通信学会技術報告, HIP, 109, 41-46.
- 中嶋智史・森本裕子・吉川左紀子 (2010). 表情認知における周辺情報の影響 電子情報通信学会技術報告, HCS, 109, 27-28.
- 中野江梨子 (2009). 風景構成法における枠をめぐる 皆藤章 (編) 風景構成法の臨床, 75-86.

- 南部広孝 (2009). 中国の高等教育戦略 (前編) 急激な量的拡大と質の維持・向上に向けた改革の進展 リクルート カレッジマネジメント, 158, 50-53.
- 西平直 (印刷中). 世阿弥『伝書』の根底に潜む逆説的ダイナミズム—伝書理解のための補助線 能と狂言, 8
- 野口剛 (2009). 小説『細雪』に見るたしなみ・身体・階級 教育・社会・文化 12, 11-20.
- 野村光江・富城智子・竹本智子・城由香利・鈴木二三子・方岡愛・富田ひとみ・池田宏子・吉川左紀子 (2009). マスク使用と患者・看護師間コミュニケーション ヒューマンインタフェース学会研究報告集, 11, 29-33.
- 布井雅人・中嶋智史・吉川左紀子 (2009). 選好判断に他者の視線方向が及ぼす影響—人は多数派の選好にどのように流されるか? 電子情報通信学会技術研究報告HIP, 109, 47-51.
- 布柴靖枝 (2009). 中年期における夫婦 (カップル) ストレス 日本家族心理学会年報27 日本家族心理学会編 (編) 日本家族心理学会年報 27, 金子書房, 54-67.
- Ogawa, S., Fukushima, M., Tamura, A., & Ito, H. (2009). Are children with developmental disorders delayed in learning Theory of Mind? *Psychologia*, 52, 235-244.
- 岡田丈祐 (2010). 職業能力の獲得パターンに関する基礎的分析 JGSS研究論文集, 10, 239-250.
- 奥井遼 (印刷中). 見ることと語ること—二元論的思考をめぐる身体論の回答— モノ学・感性価値研究
- 荻阪直行 (2009). 意識と注意のトップダウン制御 分子精神医学, 9, 123-130.
- 大塚雄作 (2009). 教育力を向上させるFD カレッジマネジメント 157, リクルート, 5-9.
- 大塚雄作 (2009). 大学教員のライフサイクルと学問学習共同体への参画 大学教育学会誌, 31, 大学教育学会, 34-38.
- 齋藤直子 (2009). プラグマティズムと超越主義の自然観: SolutionからDissolutionへ 現代思想, 37, 260-285.
- 坂井祐円 (印刷中). 仏教はケアに向いている思想なのか—「梵天勧請」説話をめぐって— 臨床教育人間学
- 坂井祐円 (印刷中). 仏教思想からケアを考える—ケアにおける自己変容とケアする主体— 人間形成における「超越性」の問題—自己変容・ケア・関係性 (「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキウム研究成果報告書)
- 坂野 逸紀・齋木潤 (2010). 視覚統計量の要約における偏心度の影響 Technical Report on Attention and Cognition, 2010, 18-18
- Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S. (in press). Automatic attentional shifts by gaze, gestures, and symbols *Psychologia: An International Journal of Psychological Sciences*
- 佐藤卓己 (2009). 教育テレビから教養テレビへ (編) GALAC, 6月号, 12-15.
- 佐藤卓己 (2009). 天下無敵—戦後ジャーナリズム史が消した奇才・野依秀市—第1回 野依秀市というメディア 考える人, 28, 142-150.
- 佐藤卓己 (2009). 天下無敵—戦後ジャーナリズム史が消した奇才・野依秀市—第2回 野依式ジャーナリズムの原点 考える人, 29, 202-210.
- 佐藤卓己 (2009). 天下無敵—戦後ジャーナリズム史が消した奇才・野依秀市—第3回 “広告取り東洋—”の実業雑誌 考える人, 30, 202-210.
- 佐藤卓己 (2009). 天下無敵—戦後ジャーナリズム史が消した奇才・野依秀市—第4回 喧嘩ジャーナリズムの筆誅録 考える人, 31, 232-241.
- 佐藤弥 (2010). 情動の脳内機構: 恐怖 *Brain Medical* 21, 331-336.
- 杉万俊夫 (2009). 反対贈与としての「リーダーシップ」: ある過疎地域の活性化運動から 組織科学, 43, 16-26.
- 杉万俊夫 (2009). 「学習する組織」による安全文化の醸成 電気評論, 94, 9-14.
- 杉本均 (2009). 義務教育の弾力化—比較教育学の視点から 教育と医学, 672, 70-76.
- 杉本均・高見茂 (2009). 政策法規: 創新21世紀教育的宏現戦略 21世紀的日本教育改革—中日学者的視点, 2-27.
- 杉本均・高見茂 (2010). 21世紀の日本教育改革の動向 (No5の原文) 21世紀における日本の教育改革—日中学者の視点から—, 5-23.
- 平知宏・楠見孝 (2009). 比喩文の適切性評価に関わる主題と喩辞の認知 日本認知言語学会論文集, 9, 465-471.
- 平知宏・楠見孝 (印刷中). 比喩理解における主題と喩辞の意味変化: 無関連な意味の処理の観点から 日本認知言語学会論文集, 10
- 高橋洋一 (2009). 健常/障害を問う視座—医療コミュニケーションにおける「客観性」の再考に向けて—近代教育フォーラム, 18, 83-91.
- 高嶋雄介 (2009). 風景構成法の生成 皆藤章 (編) 現代のエスプリ, 505, 96-108.

- Tamura, A. (2009). Developmental changes of strategies to regulate emotional expression in childhood. *Psychologia*, 52, 245-252.
- Tanaka, Koji (2009). Academic Achievement Surveys and Educational Assessment ICER(organized by Education Research Institute, Seoul National University), *Global and Comparative Perspectives in Academic Competence, Evaluation and Quality Assurance*, 219-225.
- 田中毎実 (2009). <FDモデル> の構築可能性: シンポジウムⅢ<FDのダイナミクス—FDモデル構築に向けた今後の課題> 大学教育学会誌, 31, 76-79.
- 田中毎実 (2009). 教育哲学の教育現実構力について: 課題研究「教育研究のなかの教育哲学—その位置とアイデンティティを問う 教育哲学研究, 99, 28-33.
- 上田祥行・齋木潤 (2009). 三次元物体学習過程に依存した眼球運動の変化 Technical Report on Attention & Cognition, 2009, 9-9.
- 渡邊洋子 (2009). 医学教育において非医療系教育専門家が果たす役割とその意義 京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究, 1-14.
- やまだようこ (印刷中). 実践知と質的研究に共通する「ものの見方」と今後の問題 教育心理学年報, 2009年度
- やまだようこ (2009). 村上春樹『1Q84』の会話分析—ナラティブ・インタビューの問い方 斎藤清二 (編) N:ナラティブとケア—特集:ナラティブ・ベイスト・メディスンの展開, 1, 76-81.
- 矢野智司 (2009). 世界を開くメディアとしての図画・工作—対話をうながす『問いの—撃』はなぜ必要か 美育文化, 59, 13-17.
- 矢野智司 (2009). 教育思想史研究と教育思想研究と教育現実 近代教育フォーラム, 147-153.
- 矢野智司 (2009). 沸騰する教育人間学への誘い—絶対的な問いの探究は教育人間学に何をもたらすのか 教育哲学研究, 100, 329-343.
- 吉田敦彦・井藤 元・水田真由・河野桃子・瀬戸好子 (2009). シュタイナー教育を思想的に研究すること—ということ 近代教育フォーラム, 18, 215-227.
- 吉田正純 (2010). EU成人教育グルントヴィ計画の理念と実際—社会的インクルージョン、異文化間対話、アクティブ・シティズンシップ— 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 9, 59-71.

4. 紀要 (査読有り)

- 馬場 智子 (印刷中). タイ北部少数民族における教育機会の保障にかんする民族文化の役割 京都大学研究科研究科紀要, 56
- 藤井真樹 (2009). 方法としての間主観性—子どもの体験世界へ接近するために 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要, 3, 21-30.
- 福田斎 (印刷中). “対人不安”を呈し、“家”の中で暮らす10代女性との面接 臨床心理事例研究, 36
- 古川裕之 (2010). 描画作品の変化の意味について—表現心理学からの検討— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 223-235.
- 橋本 京子 (印刷中). ストレスフルイベントにおけるポジティブな認知のあり方について—ストレスフルイベントの深刻性および内容による差異の検討— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56
- 隼瀬悠里 (印刷中). ペルッティ・カンサネンの教師の教育学的思考論に関する一考察 京都大学教育学研究科紀要, 56, 85-96.
- 平井久世 (印刷中). 粘土製作における「触れる」ことについての—考察— 教育学研究科紀要 56
- 平野拓朗 (2010). 参与観察者のディレンマに注目した学級への参加に関する—考察—「正統的周辺参加」論を基軸として 京都大学大学院『人間・環境学』, 18, 13-25.
- 平山朋子・松下佳代 (2009). 理学療法教育における自生的FD 実践の検討—OSCE リフレクション法を契機として— 京都大学高等教育研究, 15, 15-26.
- 細尾萌子 (2010). フランスのバカロレア試験における評価観—問題作成と採点に関する議論の歴史的検討を通じて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 387-399.
- 市原有希子 (2010). 心理臨床におけるずれに関する研究—箱庭を介して— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 167-180.
- 井上明美 (2010). 風土の心理臨床学的研究—生きる場としての風土— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 181-194.
- 鎌田東二 (2009). 宗教と希望学 神奈川大学評論 64, 44-52.

- 井藤元 (2010). シュタイナーの『ファウスト』論—『ファウスト』解釈に秘められた「自由」の哲学— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56
- 鎌田東二 (2009). 宗教と希望学 神奈川大学評論, 64, 神奈川大学, 44-52.
- 勝浦眞仁 (印刷中). 発達心理学における「自分史」発表の教育的意義とは 夙川学院短期大学教育実践研究紀要, 2
- 木戸彩恵 (2010). ナラティブとしてのよそおい—他者と場所の対話的關係性の検討— 京都大学教育学研究科紀要, 56, 333-344.
- 桐村豪文 (印刷中). 教育行政領域における実証的研究の権威性の正当性に関する研究—No Child Left Behind Act of 2001 を事例とした第一次的検討— 京都大学大学院教育学研究科紀要
- 近藤 (有田) 恵・大石高典・内田由紀子・平石界 (2009). 研究者のウェルビーイング—対人関係がパフォーマンスと精神健康に与える影響— 京都大学文学部グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成を目指すアジア拠点 男女共同参画に資する調査研究」, 1, 15-15.
- 項純 (印刷中). 中国における素質教育をめざす基礎教育改革をめぐる論争 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56
- Koyasu, M. (2009). Young children's development of understanding self, other, and language. *Kyoto University Research Studies in Education*, 55, 1-13.
- 黒田真由美 (2010). 小学生の宛先による日本語発話と英語発話の使い分け—変化プロセスに注目して— 京都大学教育学研究科紀要, 56, 307-318.
- 松井華子 (2009). 風景構成法の彩色過程研究の可能性について 京都大学大学院教育学研究科紀要 55, 215-225.
- 松永智子 (2010). 創成期の『英語青年』 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 9
- 三好正彦 (印刷中). 「社会的インクルージョン実現に向けての学童保育の可能性—現状と今後の課題について」 人間・環境学, 17
- 溝川藍 (2010). ふり遊びの文脈における怒るふりの理解の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 439-451.
- 中川吉晴・村上祐介・小畑 タバサ 小都弥 (印刷中). 教育におけるスピリチュアリティ研究をめぐる最近の展開 ホリスティック教育協会
- 中井由佳子 (2010). 発達障がいを抱える人たちの心理療法に表れるイメージについて 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 265-277.
- 井上明美 (印刷中). 風土の心理臨床学的研究—生きる場としての風土— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56
- 西山直子 (2010). 世代間関係における Generativity の可能性—Narrative Approach の立場から— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 345-357.
- 布柴靖枝 (2010). クライエントの歴史性<historia>と物語生成の一考察—多世代的視点から見た病・症状の意味— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 237-250.
- 小川絢子 (2010). 不意移動ストーリーの読みなおしによる幼児の誤信念理解の促進—ワーキングメモリとの関連から— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 401-410.
- 大石真吾 (2010). 箱庭制作という場の特徴に関する一考察—2つの場をめぐる体験に着目して— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 209-222.
- 奥野信行・堀田佐知子・酒井ひろ子・板倉勲子・大野かおり・湯舟貞子・池西悦子・山本恭子・大納庸子・長尾匡子・真継和子・稲熊孝直・内橋美佳・カルデナス暁東・金原京子・川村千恵子 (2009). 新卒看護師のインターネット環境を利用した学習サポートに関するニーズ 園田学園女子大学論文集, 44, 77-89.
- 尾崎真奈美 (2009). ネガティビティを含んで超えるインテグラル・ポジティビティ 相模女子大学, 73A, 67-72.
- 李 霞 (2010). 文革後中国における児童の「主体性」育成研究に関する考察 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 57-70.
- 齋藤 桂 (2010). アメリカにおける学力テスト結果の比較分析研究—カリフォルニア州・ロサンゼルス統合学区を事例に— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 43-56.
- 佐々木麻子 (2010). 「帰国子女的心性」について—文化差体験が人格形成に及ぼす影響に関する一考察—

- 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 111-124.
- 笹倉尚子 (2010). 漫画やアニメについて他者に語るプロセス—他者に語る行為の背景について— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 195-208.
- 柴原真知子 (2010). 19 世紀における成人教育活動としての女性の職業支援—女性雇用促進協会の実践的取り組みから— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 1-14.
- 志波泰子 (2009). 2 歳児は誤信念を理解するだろうか—Perner と Leslie の論争を再考する— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55, 75-88.
- 志波泰子 (2010). 幼児期の「心の理論」獲得におけるメタ表象の役割 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 411-423.
- 竹家一美 (2010). 「降りる」選択をした中年期女性のライフストーリー —不妊治療を受けなかった理由— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 319-332.
- 高橋優佳 (2010). 造形表現の心理臨床的意義—青年期における個別粘土制作を通じて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 153-166.
- 照屋信治 (2010). 「県文化運動の機関」として『沖縄教育』—1923-1933 年までの誌面分析— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 293-306.
- 徳永俊太 (2010). アントニオ・ブルーサの歴史教育論 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 373-386.
- Wakamura, T., Suzuki, K., Toichi, M., Tamak, A., Horita, S., Matsugi, K., & Miyajima, A. (2009). Effects of body position during an afternoon nap on body temperature and heart rate variability in young healthy Japanese men 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要, 健康科学, 5, 17-21.
- 淀直子 (2010). 身体性という観点から捉えるプレイセラピー 京都大学大学院教育学研究科紀要, 第 56, 251-264.

5. 紀要 (査読なし)

- 畑野快 (2009). アイデンティティ形成プロセスに関する一考察—自己決定を指標として— 大阪教育大学発達人間学論叢, 13, 31-38.
- 広瀬悠三 (印刷中). 限界に立ち向かう世界市民—カントの世界市民的教育論構築への助走— 臨床教育人間学, 10
- 稲垣恭子 (2009). 武家娘と近代—「女のいくさ」と言説空間— 教育・社会・文化 12, 1-10.
- Ishizaki, T. (印刷中). A Response to Anna Strhan's Paper: A Clues for Discussing An-Other Religious Education 臨床教育人間学講座紀要, 10
- 井藤元 (2010). シュタイナーとゲーテ『メーテルヒェン』—『メーテルヒェン』解釈に秘匿されたシュタイナーの人間形成論 臨床教育人間学, 10
- 鎌田東二 (2009). 神道と文学と芸能 アエリオン, 8, 白百合女子大学
- 川崎佳代子・川崎良孝訳 (2008). 「ボストン公立図書館と日曜開館問題 (1864-1872 年)」 『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』, 7, 87-134.
- 川崎良孝 (2008). 「最近の図書館研究の状況：批判的図書館 (史) 研究を中心として」 『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』, 7, 1-10.
- 河野一紀 (印刷中). "意味と真理について—Davidson, D. と Lacan, J. の理論を通しての一考察" 京都大学大学院教育学研究科附属 臨床教育実践研究センター紀要, 13
- 前平泰志 (2009). ガストン・ピノーを語る：人と仕事 京都大学・生涯教育学・図書館学 9, 177-184.
- 松井華子 (2009). 下着の窃盗を繰り返し逮捕されたことをきっかけに來談した 40 代男性との面接 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 35, 132-140.
- 溝上慎一 (2009). 自己成長モードが大学生を教養に導く 世界思想, 36, 世界思想社, 35-39.
- 森崎志麻・大家聡樹・清水亜紀子・西田麻衣子・高橋紗也子・木下直紀・中川みず穂・藤江淳史・義江多恵子・根本眞弓・川端亨子 (印刷中). 糖尿病における心理臨床の可能性—1 型糖尿病患者の調査事例から「関係」についての語りを聴くことの意味を考える— 京都大学大学院教育学研究科付属臨床教育実践研究センター紀要, 13
- 永田素彦 (印刷中). 長浜—学習するコミュニティ 人環フォーラム, 26

- 西嶋雅樹 (印刷中). 適応概念と適応指導教室 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 13
- 西嶋雅樹 (2009). 漫画『蟲師』にみる心理学的イメージについての考察 甲南大学学生相談室紀要, 17, 39-51.
- 小川絢子 (2009). 他者の誤った行動に対する幼児の理由づけに抑制制御が及ぼす影響 発達研究, 23, 39-48.
- 尾崎真奈美 (2009). スピリチュアリティのサイエンスとアート断章 相模女子大学人間社会学部, 7, 115-127.
- Saito, K. (印刷中). EFL Learners and Expression of Voice: Response to 'Ventriloquising the Voice: Writing in the University' 臨床教育人間学, 年報第 10 号
- 猿山隆子 (2008). 『新潟日報』「生活記録」欄の展開 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 8, 135-145.
- 笹倉尚子 (印刷中). 虚構を語ることと心理臨床 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 12
- 白戸健一郎 (2010). 中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説 生涯教育学・図書館情報学研究, 9
- Shu, Y. (2010). Is Equality Enough to Face Others? 臨床教育人間学, 10, 104-106.
- 高嶋雄介・畑中千紘・井上嘉孝・古川裕之 (印刷中). 空間との関わりに表れる日本人のこころ トイレ空間の誕生と変遷— 京都大学カウンセリングセンター紀要,
- 高嶋雄介・井上嘉孝・竹中菜苗 (2009). 相談室アーカイブ 臨床心理事例研究 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 36, 69-93.
- 高柳充利 (印刷中). 幼児教育と教師教育の言語の獲得—カベルがウィトゲンシュタインに読む、クリプキの懐疑、エマソンの偉才、アウグスティヌスの言葉— 臨床教育人間学, 10
- 高柳充利 (in press). Response to Amanda Fulford's 'Ventriloquising the Voice: Writing in the University' 臨床教育人間学, 10
- 竹内一真 (2009). 心理学の課題としての無形文化財保護 教育方法の探究, 12, 33-40.
- 田村綾菜 (2009). 児童の日常場面における謝罪—小学校低学年を対象としたインタビュー調査から— 発達研究, 23, 247-249.
- 田中史子・清水亜紀子・大家聡樹 (2009). 糖尿病治療にみる心理臨床的関わりの可能性—治療教育の歴史的概観を通して 京都大学臨床心理実践センター紀要, 12, 101-111.
- 田中每実 (2009). FDのダイナミックス 大学教育学会課題研究報告書
- 田中康裕 (2009). 心理療法における内側と外側 臨床心理事例研究 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 35, 17-19.
- Tsuiji, A. (印刷中). Experience in the Very Moment of Writing/Learning: A Response to Ian Munday's 'Derrida, Butler and an Education in Otherness' 臨床教育人間学, 9
- 辻 喜代司 (2009). 庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期「ふだん記」運動の場合— 京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究, 9, 73-88.
- 山崎貴子 (2009). 近代日本における「たしなみ」への関心の高まりとその変容—礼儀作法書刊行動向の分析から— 『教育・社会・文化』研究紀要, 12, 21-40.

6. 総説

- 瀧上皓一郎・塩原佳典 (2009). 大学院生協議会の二十年 京都大学教育学部六十年史, 168-171.
- Fujita, K., & Ushitani, T. (2009). Perceptual logics in a comparative perspective: the case of amodal completion Watanabe, S., Blaisdell, A. P., Huber, L., & Young, A. (Eds) *Rational animals, irrational humans*, 201-214.
- Fujita, K., Nakamura, N., Sakai, A., Watanabe, S., & Ushitani, T (in press). Amodal completion and illusory perception in birds and primates Lazareva, O., Shimizu, T., & Wasserman, E. (Eds) *How animals see the world: Behavior, biology, and evolution of vision*.
- Fujita, K. (in press). Seeing what is not there: Illusion, completion, and spatio-temporal boundary formation in comparative perspective. Wasserman, E. A., & Zentall, T. R. (Eds) *Handbook of*

Comparative Cognition.

- 藤田和生 (2009). メタ記憶の進化 清水寛之 (編) メタ記憶—記憶のモニタリングとコントロール, 173-199.
- 藤田和生 (2009). 動物の幸福と人の幸福 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学— 146-166.
- 藤田和生 (2009). 内的表象操作の比較認知科学 波多野誼余夫 (編) 国際高等研究所「思考の脳内メカニズム」報告書, 43-60.
- 藤田和生 (2009). 欺き・協力・優しさ・ねたみ—フサオマキザルの社会的知性— 関西実験動物研究会会報, 31, 39-48.
- Funahashi, S. (印刷中). Metacognition: a new method to study the nature of the mind.
- 船橋新太郎 (2009). 注意欠陥・多動性障害と前頭葉機能 情動研究会報, 4
- 林美里 (2009). チンパンジーの生活と知性 発達, 119, 99-107.
- 林美里 (2009). チンパンジーの誕生会 科学, 79, 1034-1035.
- 林美里 (2009). レオの闘病記 科学, 79, 1156-1157.
- 林美里 (2009). 発達と育児 科学, 80, 302-303.
- 林美里 (2009). チンパンジーの発達研究 生き物たちのつづれ織り, 2, 157-158.
- 板倉昭二 (2009). 赤ちゃんは何でも知っている—比較認知発達科学から見た赤ちゃんの脳と心— *iliholi*, 1, 49-58.
- 板倉昭二 (2009). アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助 榊原洋一 (編) 子どもの社会性の発達 別冊「発達」 30, 70-81.
- 皆藤章 (2009). 情動コントロール 糖尿病診療マスター 医学書院, 423-427.
- 狩野文浩・友永雅己 (2009). チンパンジーはどのように写真を見るか? (ちびっこチンパンジー第 89 回) 科学, 79, 518-519.
- 子安増生 (2009). 見過ごしていませんか? 思春期の準備期間 さんさい, 5, 8-11.
- 子安増生 (2010). 母と子の行動管理: 心を読む心の発達 小児歯科臨床, 15, 12-19.
- 楠見孝・中池竜一 (2009). 情報および IT 教育、IT 人材の養成 21 世紀における日本の教育改革—日中学者の視点, 95-117.
- 楠見孝・中池竜一 (2009). 情報技術教育: 注重情報应用能力の培養—日方視点: 課程體系建設與人才培养 田慧生・田中耕治 (編) 21 世紀的日本教育改革—中日学者的觀點, 224-225.
- 松木邦裕 (2009). コンテイニング概説 精神分析研究, 53, 377-380.
- 明和政子 (2009). 社会活動の進化 *BRAIN MEDICAL*, 21, 173-179.
- 西岡加名恵・田中耕治・滝川靖治・三藤あさみ・神原一之・前園律子・杉山利行・武田巨史・岡嶋一博・山村俊介・上田則康・木村裕・徳永俊太・石井英真・本所恵・小山英恵・鋒山泰弘・赤沢真世・項純・中池竜一 (2009). 科学的リテラシー 西岡加名恵・田中耕治 (編) 活用する力を育てる授業と評価 中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの可能性, 73-73.
- 大山泰宏 (2009). 米国における臨床心理士養成とスーパービジョン その 3 : スーパービジョンのシステム 日本臨床心理士会雑誌, 60, 45-48.
- 大山泰宏 (2009). 学生理解のための視点: 大学教育研究と心理臨床実践の視座から(シンポジウム「学生相談の視点から見た現代学生とこれからの学生支援」抄録) 甲南大学学生相談室紀要, 16, 34-40.
- 齋木潤 (2009). 視覚性短期記憶における結び付け問題 日本神経回路学会誌, 16, 12-21.
- 櫻井芳雄 (2009). ブレインマシン・インタフェースについて教えてください *Modern Physician*, 30, 214-216.
- 櫻井芳雄 (2009). ブレインマシン・インタフェースと神経回路網の可塑的な再編成 脳 2 1, 12, 42-47.
- 櫻井芳雄 (2009). 脳と機械をむすぶ—ブレインマシン・インタフェースの目指すところ 科学, 79, 535-537.
- 櫻井芳雄 (2010). 脳の情報表現を担うセル・アセンブリ: 局所的セル・アセンブリの検出 生物物理, 50
- 杉本均 (2010). マレーシアの高等教育の世界戦略 *The Daily NNA* 『知識探訪』, 8-8.
- 高見茂 (2009). 平成 21 年度補正予算と教育財源調達問題 教職研修 10 月号 巻頭論文, 7-9.
- 高見茂 (2009). 「スクール・ニューディール構想」が学校教育に与える影響 別冊教職研修 10 月号 巻頭講義, 11-14.

- 田中毎実 (2009). 学会紹介：大学教育研究フォーラム 民主教育協会雑誌『IDE 日本の高等教育』, 54-57.
- 友永雅己 (2009). 目はこころの窓—視線認知の比較認知発達 開一夫・長谷川寿一 (編) ソーシャルプレインズ—自己と他者を認知する脳, 131-158.
- 友永雅己 (2009). What is it like to be a chimp?—チンパンジーの比較認知研究の現状— 霊長類研究, 24, 265-272.
- 友永雅己 (2009). チンパンジー・犬山群から心の起源を探る (チンパンジー日記①). 京都大学グローバルCOE プログラム「生物の多様性と進化研究のための拠点形成—ゲノムからエコシステムまで—」 (発行) 生き物たちのつづれ織り, 1, 145-146.
- 友永雅己 (2009). 2+1—こころを支える 3つの時間軸 こころの未来, 3, 26-29.
- 友永雅己 (2010). 鏡の国のクレオ. (ちびっこチンパンジーと仲間たち (第97回)) 科学, 80, 150-151.
- 東畑開人 (2009). 日本の心理臨床学史—氏原寛にきく 心理臨床の広場, 2, 42-42.
- 東畑開人 (印刷中). 日本の心理臨床学史—佐藤忠司にきく前編 心理臨床の広場
- 辻本雅史 (2009). 「からだ」から「こころ」—江戸時代にみる人間形成の原理 子安増生 (編) 心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学, 176-177.
- 辻本雅史 (2009). 『学びの身体性』に学ぶ—「江戸」の視点による現代教育の相対化 『IKUEI NEWS』 (電通育英会), 48, 19-20.
- 渡邊洋子 (2009). 沖縄県南風原文化センター—歴史と出会う・文化と出会う・生き方と出会う 京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究, 213-214.
- やまだようこ (印刷中). 本というメディアとネット社会

7. 科研等報告書

- 赤上裕幸・長崎励朗・白戸健一郎・松永智子 (2010). 越境する文化政策 京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキウム研究成果報告書
- 赤沢真世 (印刷中). 第1部第3章アメリカにおける入門期読み書き指導の展開—ホール・ランゲージにおける読み理解を促す指導に着目して— 科学研究費基盤研究 (C)最終報告書
- 赤沢真世 (印刷中). 第2部第3章 田井小学校における『ごんぎつね』の授業 科学研究費基盤研究 (C)最終報告書
- 浅田恵美子 (2009). 「心理臨床における箱庭を介したかわりに関する研究—特別養護老人ホームでの調査から—」 研究開発コロキウム平成20年度研究成果報告書, 72-84.
- 趙卿我 (2009). 学習材 F・G スタンダードからルーブリックへの6つのステップ (平成19年度～平成21年度 科学研究費補助金基盤研究(C)「リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発」中間報告書), 121-129.
- 趙卿我 (2009). 日中韓の教育課程・教育評価改革の動向—韓国教育評価の改革及び最近の動向—『公開シンポジウム、国際教育研究フロンティア B』平成21年度 研究成果報告書 (教育実践コラボレーション・センター発行), 59-65.
- 趙卿我 (2010). 日韓の教育改革の行方—韓国における教育改革の動向—『公開シンポジウム、国際教育研究フロンティア B』平成22年度 研究成果報告書 (教育実践コラボレーション・センター発行), 125-142.
- 趙卿我 (印刷中). 韓国における「学業成就度評価」の実施動向—「遂行評価(performance assessment)」の分析を中心に— 研究代表者：田中耕治 (編) 平成19年度～平成21年度 科学研究費補助金基盤研究 C リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発 最終報告書
- 半澤礼之・田口真奈 (印刷中). 若手FD研究者ネットワーク(JFDN Jr.)—2009年度の活動報告と今後の展開について— 京都大学高等教育叢書 28 平成20年度採択特別教育研究経費報告書 大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 2009 28
- 半澤礼之・田口真奈・松下佳代 (印刷中). 文学研究科プレFDプロジェクト 京都大学高等教育叢書 28 平成20年度採択特別教育研究経費報告書 大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 2009 28
- 本所恵 (印刷中). 日本の民間研における読解力育成の理論と実践 研究代表者：田中耕治 (編) 平成19年度～平成21年度 科学研究費補助金基盤研究 C リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発 最終報告書

- 本所恵 (印刷中). スウェーデンにおけるナショナル・テスト——全国学力テストの役割再考に向けて—— 研究代表者: 田中耕治 (編) 平成 19 年度～平成 21 年度 科学研究費補助金基盤研究 C リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発 最終報告書
- 本所恵・細尾萌子 (2009). 3(3)理科「一貫教育カリキュラムにおける授業づくりの理論と実践」 研究開発コロキウム 平成 20 年度 研究成果報告書, 68-71.
- 本所恵 (2009). スウェーデンにおける学校と職業をつなぐ取り組み 研究代表者: 三宅征夫 (編) 諸外国におけるキャリア教育の実践 (学校におけるキャリア教育に関する総合的研究——児童生徒の社会的自立に求められる資質・能力を育むカリキュラムの在り方について——(中間報告書)), 31-37.
- 細尾萌子 (2009). 学習材 F・G スタンダードからルーブリックへの 6 つのステップ (平成 19 年度～平成 21 年度 科学研究費補助金基盤研究(C)「リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発」中間報告書), 142-149.
- 細尾萌子 (2010). フランスの全国学力テストにおける分析・活用方法——中学校 1 年の数学に注目して—— 研究代表者: 田中耕治 (編) 平成 19 年度～平成 21 年度 科学研究費補助金基盤研究 C リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発 最終報告書, 153-163.
- 細尾萌子・本所恵・徳永俊太・趙卿我・大下卓司・小山英恵・山本はるか・藤村彩夏・羽山裕子・中島雅子・棚橋彩香・柳原千絵 (2010). 思考力・判断力・表現力等の育成を目指す評価方法の開発と授業づくり. 京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーションセンター 研究開発コロキウム 平成 21 年度 研究成果報告書, 46-72.
- 井上 烈 (2008). 情報・メディア・コミュニケーションの社会的役割と機能に関する実証的研究 野口剛 (研究代表者) (編) 平成 19 年度グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」京都大学大学院教育学研究科、研究開発コロキウム研究成果報告書
- Ishizaki, T. (2009). A Response to Anna Strhan's Paper: A Clues for Discussing An-Other Religious Education The self, the Other and Language (II): Dialogue between Philosophy and Psychology in Proceedings of the 2nd International Colloquium between the Graduate School of Education Kyoto University (Japan) and the Institute of Education, University of London (UK)
- 井藤元 (2010). 「自由」獲得の前提としての「自己変容」—シュタイナー人間形成論における「自由」の内実
- 井藤美由紀 (2009). 自宅および緩和ケア病棟で看取りを経験した遺族の精神的負担とその対処方法に関する質的研究 平成 20 年度日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団調査・研究報告書第 8 号, 47-52.
- 皆藤章・大家聡樹・清水亜紀子 (2009). ジョスリン糖尿病センターとの心理臨床に関する共同研究体制の構築 臨床の知を創出する質的に高度な人材育成—京大型臨床の知創出プログラム— 20 年度 国際企画 成果報告書, 38-50.
- 柄澤郁子 (印刷中). メルロ＝ポンティにおける「意味(sens)」の生成:『知覚の現象学』の検討を中心に 坂井祐円 (代表者) 京都大学大学院教育学研究科「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキウム研究成果報告書
- 加藤奈奈子・大石真吾・佐々木麻子・千秋佳世・浅田剛正・高橋優佳・森崎志麻・山本尚代・浅田恵美子 (2009). 心理臨床における箱庭を介したかわりに関する研究—特別養護老人ホームでの調査から— 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」 研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書, 72-84.
- 加藤奈奈子・大石真吾・佐々木麻子・千秋佳世・浅田剛正・高橋優佳・森崎志麻・山本尚代・浅田恵美子 (2009). 「心理臨床における箱庭を介したかわりに関する研究—特別養護老人ホームでの調査から—」 研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書, 72-84.
- 桐村豪文 (印刷中). 京都大学の財務会計と平成 20 年度事業 高見茂 (研究代表者) (編) 科学研究費基盤研究 (B) 報告書
- 項純 (印刷中). 中国における質向上をめざす評価改革 研究代表者: 田中耕治 (編) 平成 19 年度～平成 21 年度 科学研究費補助金基盤研究 C リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発 最終報告書
- 河野一紀・松本拓磨・古川裕之 (印刷中). 心理臨床における知について 平成 21 年度大学院 GP 報告書
- 子安増生・別府哲・木下孝司・郷志徹・小川絢子・溝川藍 (2009). 「心の理論」の獲得と実行機能の発達

- 子安増生 (編) 科学研究費基盤研究 (B) 報告書, 1-168.
- 工藤瞳 (印刷中). ペルーの教育部門会計—公教育費と家計負担を中心に— 高見茂 (研究代表者) 科学研究費基盤研究 (B) 報告書
- 桑原知子 (2009). 子どものもつ力を育てるために～カウンセリングから見えてくるもの～ 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館 共同機構研修会講義要録
- 桑原知子 (2009). カウンセリング・アプローチ—子どもと保護者の心を理解する— 京都大学大学院教育学研究科平成 20 年度 成果報告書. E. FORUM 全国スクールリーダー育成研修 学校教育研究フェスタ講演録
- 李 霞 (印刷中). アジア・南米・アフリカにおける教育の機会均等に関する研究—比較教育学的アプローチによる理論と実践の考察—研究開発コロキウム平成 21 年度研究成果報告書 (京都大学大学院教育学研究科)
- 松井華子・千秋佳世・古川裕之・山本有恵 (2009). 風景構成法における彩色についての研究 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書, 96-105.
- 松下佳代 (2010). ISSOTL2009 参加報告 京都大学高等教育叢書 27, 389-407.
- 松下佳代・石川裕之・河崎美保 (2010). FD 連携企画ワーキンググループ 京都大学高等教育叢書 27, 258-262.
- 溝川藍 (2010). 情動表出制御の理解と「心の理論」の発達 子安増生 (研究代表者) (編) 科学研究費基盤研究 (B) 報告書, 17-18.
- 森崎志麻・大家聡樹・清水亜紀子・西田麻衣子・高橋紗也子 (印刷中). 糖尿病患者の「生きる」ことの心理臨床学的研究 研究開発コロキウム 平成 21 年度 研究成果報告書
- 中本佳紀 (2009). 大分県臼杵市の公会計改革と教育部門 高見茂 (研究代表者) (編) 科学研究費基盤研究 (B) 報告書
- 南部広孝 (2009). 中国における大学教育評価の展開—本科課程教学評価を中心に— 塚原修一大学経営の高度化とそれを支援する政策のあり方 (科学研究費補助金基盤研究 (B) 報告書), 99-117.
- 西田麻衣子・笹倉尚子・高橋紗也子 (印刷中). 高齢者心理臨床における「若い」に関する研究 研究開発コロキウム 平成 21 年度 研究成果報告書
- 西嶋雅樹 (印刷中). 乳幼児とのプレイセラピーにおける分離についての一考察 創造の臨床事例研究 6
- 小川絢子 (2009). 幼児期における「心の理論」と実行機能の発達. 子安増生 (研究代表者) (編) 科学研究費基盤研究 (B) 報告書 「心の理論」の獲得と実行機能の発達, 15-16.
- 大石真吾・加藤奈奈子・佐々木麻子・千秋佳世・高橋優佳・森崎志麻・浅田恵美子・井芹聖文 (2009). 『心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究—特別養護老人ホームでの調査から—』 大学院教育改革支援プログラム (大学院 GP)、研究開発コロキウム報告書
- 大石真吾・加藤奈奈子・千秋佳世・佐々木麻子・高橋優佳・森崎志麻・浅田恵美子・井芹聖文 (印刷中). 心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究—特別養護老人ホームでの調査から— 大学院生主体課題探究・討論 研究開発コロキウム 平成 22 年度 研究成果報告書
- 大下卓司・小山英恵 (印刷中). 第 11 章. 日本の学力テストをめぐる動向—平成 21 年度全国学力・学習状況調査の結果分析を中心に— 田中耕治 (研究代表者) (編) 平成 19 年度～平成 21 年度 科学研究費補助金基盤研究(C)「リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発」最終報告書, 192-197.
- 大家聡樹・田中史子・築山裕子・西田麻衣子・佐々木麻子・森崎志麻・清水亜紀子・高橋紗也子 (2009). 「糖尿病患者の「生きる」ことの心理臨床学的研究」 研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書, 118-131.
- 奥村好美 (2009). 学習材 C・D・E スタダードからルーブリックへの 6 つのステップ (平成 19 年度～平成 21 年度 科学研究費補助金基盤研究(C)「リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発」中間報告書), 130-141.
- 李 霞 (印刷中). アジア・南米・アフリカにおける教育の機会均等に関する研究—比較教育学的アプローチによる理論と実践の考察— 研究開発コロキウム平成 21 年度研究成果報告書 (京都大学大学院教育学研究科)
- 佐々木麻子・市原有希子・笹倉尚子・長谷川千紘・平井久世・高橋優佳・中野江梨子・岩城晶子・加藤の

- ぞみ (2009). 小児科領域における心理臨床の实践と他職種との連携に関する研究 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム報告書
- Sasaki, A. (印刷中). My Experience in the Dream Seminar 臨床の知を創出する質的に高度な人材養成—京大型臨床の知創出プログラム—平成 21 年度 国際企画成果報告書
- 佐々木麻子・長谷川千紘・平井久世・市原有希子・笹倉尚子・高橋優佳・中野江梨子・岩城晶子・加藤のぞみ (印刷中). 小児科領域における心理臨床の实践と他職種との連携に関する研究 大学院生主体課題探究・討論 研究開発コロキウム 平成 21 年度 研究成果報告書
- 杉本均 (2010). トランスナショナル・エデュケーションに関する総合的国際研究 中間報告書, 1-150.
- 田口真奈・半澤礼之 (印刷中). FD 共同実施ワーキンググループ 京都大学高等教育叢書 28 平成 20 年度採択特別教育研究経費報告書 大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 2009 28
- 高橋靖恵(研究代表者) (2009). 児童青年の対人関係障害に対する多次元的アセスメントによる理解と援助 (編) 科学研究費基盤研究 (B) 報告書
- 高柳充利 (in press). "Desire, Pleasure, and Education: The Perfection of the Teacher through the Pursuit of Happiness" "Proceedings of the 3rd International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University (Japan) and the Institute of Education, University of London (UK) Ha
- Takekoshi, C. (in press). British tutorials and Japanese seminars: approaches to students' development, in historical perspective Happiness and Personal Growth: Dialogue between philosophy, psychology, and comparative education
- 徳永俊太 (2009). イタリアの全国テストに関する一考察 —数学の問題に焦点をあてて— 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (一般) 平成 19~21 年度 研究代表者: 田中耕治 リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発 最終報告書
- 徳永俊太 (2009). プロジェクト TK の研究上の特色 —7 年間の共同授業研究を振り返って— 田中耕治 (編) 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (一般) 平成 19~21 年度 研究代表者: 田中耕治 リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発 最終報告書
- 辻 喜代司 (印刷中). 野殿・童仙房地域における生活の中の伝統行事のフィールドワーク—神社祭祀とその継承を中心として— (編) [教育実践コラボレーション・センター採択]研究開発コロキウム 平成 21 年度 研究成果報告書
- Usami, T. (印刷中). My experience in Dr. Giegerich's Dream Seminar 臨床の知を創出する質的に高度な人材養成—京大型臨床の知創出プログラム—平成 21 年度 国際企画成果報告書
- 宇佐美 朋子 (印刷中). ギーゲリッヒ博士の夢分析セミナーと ISAP でのシンポジウムに参加して. 臨床の知を創出する質的に高度な人材養成—京大型臨床の知創出プログラム—平成 21 年度 国際企画成果報告書
- 渡邊洋子 (2009). 報告書: 平成 19 年度~21 年度科学研究費補助金 (萌芽研究)「医療教育従事者の専門職研修に関する成人教育的実践研究—教育学専攻者を中心に」(研究代表者: 渡邊洋子), 1
- 山本有恵・千秋佳世・古川裕之 (2009). 臨床的方法としての「めぐる」ことに関する体験的研究 大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書, 146-159.
- 吉井勝彦 (印刷中). 熊本県宇城市の公会計改革と教育部門 高見茂 (研究代表者) (編) 科学研究費基盤研究 (B) 報告書

8. 翻訳

- 藤井康子 (印刷中). 霧社事件研究の課題 (呉密察) 日本台湾学会報, 12
- 沈麗云・櫻井待子・川崎良孝訳 (2009). 『中国の図書館と図書館学: 歴史と現在』 吳建中・邱五芳・金曉明・範井思・沈麗云著, 京都大学図書館情報学研究会, 177.
- 林子博訳 (2009). 「東亞儒學史中的《心經附註》」(澤井啓一 「東アジア儒学史における『心經附註』」、2009 年) 国立台湾大学 国際シンポジウム「東亞儒學與日本思想」
- 林子博訳 (2009). 「地域社會中的義民傳承的重述和媒體」(塩原佳典 「地域社会における義民傳承の語り直しとメディア」、2009 年) 国立台湾大学 国際シンポジウム「東亞儒學與日本思想」

- 林子博訳 (2009). 「近世日本儒者の思想実践及其社會意義——三浦梅園、脇蘭室、帆足万里的比較——」
(瀧上皓一朗 「近世日本儒者の思想実践とその社会的意味——三浦梅園・脇蘭室・帆足万里を比較して——」、2009 年) 国立台湾大学 国際シンポジウム「東亜儒学與日本思想」
- 星野豊監訳・齋藤桂訳 (2009). スクール・ロー (ネイサン・エセックス著) 星野豊・スクール・ロー研究会 (編), 学事出版
- 池田華子 (2010). 魂にみちた教育—子どもと教師のスピリチュアリティを育む— 中川吉晴監訳 (編) 晃洋書房, 19-45.
- 河合俊雄・田中康裕・高月玲子 (2009). 河合隼雄著『日本神話と心の構造』, 1-108.
- 川崎佳代子・川崎良孝訳 (2009) 『読書と読者：読書、図書館、コミュニティについての研究成果』 キャサリン・シュルドリック・ロスなど著, 343
- 川崎良孝訳・久野和子・藤野寛之 (2009). 『公立図書館の玄関に怪獣がいる：ポストモダンの消費資本主義は、どのようにして民主主義、市民教育、公益を脅かしているのか』 エド・デーモン・ジェロッキ著, 京都大学図書館情報学研究会, 130.
- 松本邦裕監訳 (2009). 「人生から学ぶ」 Casement, P. 2006 *Learning from Life*. Routledge 岩崎学術出版社, 1-265.
- 中川吉晴監訳 (2010). 魂にみちた教育—子どもと教師のスピリチュアリティを育む—, 晃洋書房, 19-45.
- 南部広孝訳 (2009). 中国文化とその基本的特徴 大塚豊監訳中国語の文化的基盤, 東信堂, 39-56.
- 南部広孝訳 (2009). 中国伝統文化の類型, 性質と基本精神 大塚豊監訳中国語の文化的基盤, 東信堂, 57-91.
- 西岡加名恵・鄭谷心 (訳) (2009) 「21 世紀的日本教育改革——中日学者的視点 (21 世紀における日本の教育改革——日中学者の視点から)」 中国教育科学出版社, 72-78.
- (2009). コンピテンス自己概念 (Novic, N. et al. (1996) *Competence Self-Concept*) 梶田叡一・浅田匡 (編) 自己概念研究ハンドブック (Bracken, B.A. (ed.) *Handbook of Self-Concept*, Wiley.)
- 小木曾由佳訳 (印刷中). 「表現と構築——箱庭療法の効果的メカニズム」 『箱庭療法学研究』・日本箱庭療法学会, 21
- 大山泰宏訳 (2009). コンピテンス自己概念 (Novic, N. et al. (1996) *Competence Self-Concept*)" 梶田叡一・浅田匡 (編) 自己概念研究ハンドブック (Bracken, B.A. (ed.) *Handbook of Self-Concept*, Wiley.) 金子書房
- 杉本均・李霞 (訳) (印刷中). 21 世紀日本教育改革の趨勢 21 世紀日本の教育改革--日中学者の观点--
- 杉本均 (2010). マレーシアにおけるトランスナショナル高等教育規制によるその効用と問題の比較考量 (編) トランスナショナル・エデュケーションに関する総合的国際研究 中間報告書, 113-128.
- 杉本均 (2010). トランスナショナル教育プロジェクト報告と勧告 (編) トランスナショナル・エデュケーションに関する総合的国際研究 中間報告書, 1-15.
- 田口瑛子・川崎良孝訳 (2009). 『図書館と図書館職：変革と挑戦の 60 年』 ジョージ・ボビンスキー著, 京都大学図書館情報学研究会, 246.
- 竹村幸祐 (2009). 『名誉と暴力：アメリカ南部の文化と心理』 (Nisbett, R. E., & Cohen, D. 1996 *Culture of honor: The psychology of violence in the South*. Westview Press.) 石井敬子・結城雅樹 (編), 1-40.
- 田中康裕・高月玲子 (2009). 河合隼雄著「アッシジの聖フランチェスコと日本の明恵上人」『思想家 河合隼雄』, 31-54.
- 張妙弟他・張周周訳・渡邊洋子 日本語校閲 (2009). 中国の伝統文化をめぐる状況と見解—日本「伝承文化と生涯学習」研究会との交流から— 京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究, 167-176.
- 張周周 (2009). 中国の伝統文化をめぐる状況と見解--日本「伝承文化活動」研究チームとの交流 渡邊洋子 (編) 研究計画報告書「伝承・習い事」文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究, 130-138.
- 山名淳・藤岡綾子 (共訳者) (2009). K.-P.ホルン「教員養成と一般教育科学」 教育哲学研究 100, 1-14.
- 山名淳 (2009). H.ケムニッツ「教師教育のスタンダードと教職の専門性」 グローバル世界におけるドイツの教師教育改革, 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター, 9-32.
- 山名淳 (2009). H.ケムニッツ「TIMSS と PISA はドイツの教師教育にどのような影響を与えているか」 グローバル世界におけるドイツの教師教育改革, 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究セン

ター, 51-63.

山名淳 (2009). C.クラマー/K.-P.ホルン/Fr.シュヴァイツァー「ドイツの大学生は教員養成の内容をどのように評価しているか」 グローバル世界におけるドイツの教師教育改革, 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター, 65-80.

9. 辞典・事典

赤沢真世 (2009). 授業の評価 田中耕治 (編) よくわかる教育課程, ミネルヴァ書房, 100-101.

赤沢真世 (2009). 総合的な学習の時間の評価 田中耕治 (編) よくわかる教育課程, ミネルヴァ書房, 150-151.

井藤元 (2009). 「ケアリング」, 「シュタイナーの教育と福祉」, 「スクールホーム」 サトウタツヤ・中村正 (編) 対人援助学キーワード集 晃洋書房

楠見孝 (2010). 批判的思考 海保博之・松原望 (監修) 思考と感情の事典, 朝倉書店, 330-331.

楠見孝 (印刷中). 文献解題 山梨正明『比喩と理解』, 茂呂雄二『なぜ人は書くのか』, 阿部純一ほか『人間の言語情報処理・言語理解の認知科学』 中村明 (編) 日本語 文章・文体・表現事典, 朝倉書店

永田素彦 (2009). 社会構成主義 日本社会心理学会, 丸善

坂井祐円 (2009). スピリチュアルケア、仏教カウンセリング 望月昭・サトウタツヤ・中村正 (編) 「対人援助学」キーワード集, 晃洋書房

佐藤卓己 (2009). 「メディア・イベント」「深夜放送」「号外」「スキャンダル」「24 時間テレビ」ほか 9 項目 小島美子 (編) 祭・芸能・行事大辞典, 朝倉書店

柴原真知子 (2010). 成人教育、女性センター、国立女性教育会館 ギョウセイ (編) 最新行政大事典, ギョウセイ

杉本均 (2010). ブータンの教育他 11 項目 (編) 比較教育学事典, 未定

高見茂 (2009). 収支に関する制度 白石 裕・葉養正明 (編) 必携学校小六法, 協同出版, 891-892.

内田由紀子 (2009). 文化的自己観 日本社会心理学会編 (編) 社会心理学事典, 丸善出版, 458-459.

10. 書評

金子勉 (印刷中). 図書紹介『フンボルト理念の終焉?—現代大学の新次元—』 教育学研究 77

小山静子 (2009). 『台湾女性史入門』 東方, 338, 28-30.

小山静子 (2009). 菅原亮芳編『受験・進学・学校』 教育学研究, 76, 131-132.

子安増生 (2009). 今月の本棚 (Book Review) 三宅和夫・高橋恵子編著『縦断研究の挑戦—発達を理解するために』 児童心理, 63, 140-140.

松木邦裕 (2009). 氏原寛著「カウンセリング実践史 心理臨床学研究, 27, 372-374.

松下佳代 (2009). 授業の研究 教師の学習—レッスンスタディへのいざない— 教育学研究, 246-247.

松下佳代 (印刷中). 大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに— IDE 現代の高等教育

明和政子 (2009). 『チンパンジー用物差し』でヒトを測る 環境と健康, 22, 116-119.

南部広孝 (2009). 書評 王傑 (杰) 著『中国高等教育の拡大と教育機会の変容』 (東信堂) 教育社会学研究, 85, 152-154.

佐藤卓己 (2009). メディア史の可能性:『占領期雑誌資料大系』を読む 図書, 3月号, 24-27.

佐藤卓己 (2009). 望田幸男『二つの戦後・二つの近代』 京都新聞

佐藤卓己 (2009). 福岡良明『「戦争体験」の戦後史』 諸君!, 5月号, 352-353.

佐藤卓己 (2009). 西川祐子『日記をつづるということ—国民教育装置とその逸脱』 日本経済新聞

佐藤卓己 (2009). 解説 中川一徳『メディアの支配者』 講談社文庫, 476-482.

佐藤卓己 (2009). 橋本俊詔『東京大学エリート養成機関の盛衰』 中国新聞ほか (共同通信社配信)

佐藤卓己 (2009). 片山慶隆『日露戦争と新聞』 産経新聞

11. 招待講演

Adachi, I. & Hampton, RR (2009). Auditory-visual Cross-modal Representations of Familiar

Conspecific in Rhesus Macaques

カール・ベッカー (2009). 学問から見たお浄土の理解 仏教看護・ビハラー学会 第5回年次大会

カール・ベッカー (2009). 生き方を考える 稲盛アカデミー特別客員講演

Fujita, K. (2009). Memory awareness in tufted capuchin monkeys Kyoto-Lancaster Joint

International Symposium on Psychological Science New Directions of Memory Research
(Invited talk)

藤田和生 (2009). ヒト以外の動物における奥行き感が関係すると思われる錯視 日本心理学会シンポジウム「奥行き感錯視を考える」(話題提供)

半澤礼之 (2009). 現代大学生の態度と行動 長崎大学FD サマーワークショップ

半澤礼之・田口真奈 (2009). 若手研究者がネットワークングすることで新たなFDには何が展望できるか 多次元的な学士力養成を担う総合的学修支援 公開シンポジウム

半澤礼之 (発表予定). いかにして大学院生は教育活動と出会うか 大学院生を対象としたプレFDの取り組みから 日本青年心理学会研究委員会企画ワークショップ

林美里 (2009). チンパンジーの発達研究 聖霊高校講演

林美里 (2009). チンパンジーの認知発達研究 ベネッセ公開シンポジウム

平山るみ (2009). 批判的思考態度尺度の改訂 日本教育心理学会第51回総会 自主シンポジウム「批判的思考の認知的構成要素とその測定」 話題提供

池田尊司 (2009). 美的評価に関わる脳内機構

伊村知子 (2009). 乳児の視覚世界 ベネッセ公開シンポジウム

伊村知子 (2009). チンパンジーの視覚世界 きょうされんナイトゼミナール

板倉昭二 (2009). 赤ちゃんの謎に迫る: 認知発達心理学から 日本心理学会公開シンポジウム

板倉昭二 (2009). Development of sociability. Departmental colloquium series in the Human Development and Applied Psychology Department of OISE/UT.

板倉昭二 (2009). Development of mentalizing in human infants. Emotional animals, Sensible humans International GCOE symposium.

角野善宏 (2009). 編集委員会企画シンポジウム「心理臨床学の輪郭—心理臨床学らしい研究の必須要件を考える」 日本心理臨床学会第28回秋季大会

角野善宏 (2009). 「スクールカウンセリングにおける箱庭療法」 日本箱庭療法学会第23回大会

角野善宏 (2009). 過食、解離などの症状の認められた思春期少女との面接過程 (古川真由美発表) 日本箱庭療法学会第23回大会

角野善宏 (2009). 日本箱庭療法学会地区研修会 日本箱庭療法学会

角野善宏 (2009). 日本箱庭療法学会地区研修会 日本箱庭療法学会

金子勉 (2009). 19世紀のドイツにおける大学の自由と自治 大学史研究会第32回大学史研究セミナー「学問の自由と大学自治—ドイツ・アメリカ・日本—」 話題提供

鹿子木康弘 (2009). 目標予測的な視線の発達—知覚と行為の関連から— 日本動物心理学会第69回大会自由集会「「身体」の知覚・認識研究の今後—比較発達によるアプローチ」 話題提供

川崎良孝 (2009). 2008年の図書館法改正: 意義と課題 上海図書館・上海市図書館学会 (2009年8月7日)

川崎良孝 (2010). 図書館集会室について考える 上海図書館・上海市図書館学会 (2010年1月7日)

川崎良孝 (2009). 図書館・図書館史研究の現状 筑波大学大学院図書館情報学研究科 (2009年12月14日)

川崎良孝 (2010). 中国の公共図書館 筑波大学大学院図書館情報学研究科 (2010年2月10日)

Koyasu, M. (2010). A unified theory of understanding the mind in young children. Invited talk at the University of Zaragoza.

Koyasu, M. (2010). Influences of optimism-pessimism and positive orientations on the sense of happiness. Invited talk at the University of Zaragoza

栗田季佳 (2010). 外国人児童生徒のための学習支援プログラム 第5回 可児市国際教室担当者会

桑原知子 (2009). 関係性の展開—拡散と深化— 日本心理臨床学会第28回秋季大会 シンポジスト

松下佳代 (2009). 大学における目標・評価の標準化の批判的検討—Tuning Projectを事例として— 教育目標・評価学会 中間研究集会シンポジウム「大学における教育学教育の目標・評価を考える—国境を越える質の保証がもたらすもの—」

- 松下佳代 (2009). Faculty づくりの取り組み—京大センターの場合— 関西大学教育開発支援センター設立記念フォーラム
- 松下佳代 (2009). 「汎用的(generic)」という神話 日本カリキュラム学会第 20 回大会課題研究Ⅱ『『生きる力』の時代におけるヒドウン・カリキュラムをどう捉えるべきか』
- 松下佳代 (2009). 大学教育のネットワーク—日本と世界— 京都大学基礎物理学研究所研究会「科学としての科学教育」
- 松下佳代 (2009). パフォーマンス評価の枠組み 河合塾池袋校講演
- 松下佳代 (2009). 京都大学センターによる FD の組織化: そのサスティナビリティとスケーラビリティ 日本教育工学会第 25 回全国大会全体シンポジウム「変革をささえる教育学: サスティナビリティとスケーラビリティ」
- 松下佳代 (2009). パフォーマンス評価—思考と表現を評価する— 小松市立矢田野小学校研究発表会
- 松下佳代 (2009). 学習論・能力論の立場から 教育目標・評価学会第 20 回大会公開シンポジウム「学力と評価の最前線」
- 松下佳代 (2009). 新しい評価のパラダイム—パフォーマンス評価の観点から— シンポジウム「学生を変容させる初年次教育」
- 松下佳代 (2010). 学びを評価する—パフォーマンス評価の試み— グローバル COE 共催シンポジウム「子どものこころの発達と教育—最新の研究成果に学ぶ—」
- 松下佳代 (2010). FD の視点からみた OSCE—OSCE リフレクション法から自生的 FD— 札幌医科大学 FD セミナー
- Matsuzawa, T. (2009). Imitation and memory: An evolutionary scenario for the uniqueness of human cognition International school of ethology 25th course: The primate mind: Built to connect with other minds
- Matsuzawa, T. (2009). Understanding the chimpanzee mind through both field and laboratory research 第 10 回 APRU 博士課程学生会議
- Matsuzawa, T. (2009). Trade-off theory of memory and symbolization in humans and chimpanzees SARMAC VIII
- Matsuzawa, T. (2009). My studies of chimpanzee mind both in the field and in the laboratory Annual meeting 2009 of the Korean Association of Biological Sciences
- Matsuzawa, T. (2009). Cognitive development in chimpanzees: A trade-off between memory and abstraction? Special Lecture: In communication of the 50th anniversary of Sogang University
- Matsuzawa, T. (2009). Chimpanzee mind: What is uniquely human? i-brain
- 松沢哲郎 (2009). 進化の隣人 ヒトとチンパンジー 第 147 回日本獣医学会学術集会 市民公開講座「ヒトと動物の関わり合い」
- 松沢哲郎 (2009). チンパンジーの親子と教育 時習館 SSH・第 3 回特別講演会
- 松沢哲郎 (2009). 霊長類学から見た老化 第 26 回日本老年学会総会
- 松沢哲郎 (2009). 進化の隣人 ヒトとチンパンジー (社) 岐阜県工業会第 16 回通常総会記念講演
- 松沢哲郎 (2009). チンパンジーの心 YaleGALE-UMIC 2009
- 松沢哲郎 (2009). 人間とは何か—チンパンジーの研究から— 中部学院大学公開講座
- 松沢哲郎 (2009). チンパンジーの心: 人間の認知と行動の霊長類的起源 第 32 回日本神経科学大会
- 松沢哲郎 (2009). チンパンジーから見た人間の心の起源 第 8 回自然科学研究機構シンポジウム「脳が諸学を生み、諸学が脳を総合する」
- 松沢哲郎 (2009). 人間とは何か 公開シンポジウム「人間とは何か—ヒトとそれ以外の霊長類の比較研究からわかること」
- 松沢哲郎 (2009). チンパンジーの「教えない教育、見習う学習」 お茶の水女子大学グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」: 子どもの遊び・学びの進化と深化—文化・社会・歴史の制約を解き明かす—
- 松沢哲郎 (2009). 新しい霊長類学: 人を深く知る 100 問 100 答 中部学院大学公開講座
- 松沢哲郎 (2009). チンパンジーの親子と教育 第 16 回種保存会議
- 松沢哲郎 (2009). チンパンジーと人間の比較から見た子育ての進化的基盤 右京区保育士会 55 周年記念講演会

- 松沢哲郎 (2009). 心の進化—人間とチンパンジーの比較から— 第6回慶應義塾先端科学技術シンポジウム「こころを生み出す神経基盤の解明」
- 溝上慎一 (2009). 大学教育を通して成長を実感する High Performer としての学生タイプの特徴 第31回大学教育学会大会発表要旨集録, 90-91.
- Mizokami, S (2009). The spurt of self-formation in adolescence Poster presented at the 14th European Conference on Developmental Psychology, Programme 139-139.
- 溝上慎一 (2009). ポジショニング概念によって異世界となる自己世界とその形成プロセス サトウタツヤ・安田裕子学会企画シンポジウム「時間と空間のなかで自己の変化を捉える」. 日本心理学会第73回大会発表論文集, S11-S11.
- 溝上慎一 (2009). オランダの心理学者 Hubert Hermans との出会いを通じて 都筑学企画ワークショップ「ヨーロッパ心理学の伝統から学ぶ—身体、時間、自己、他者—」. 日本心理学会第73回大会発表論文集, WS59-WS59.
- 溝上慎一 (2009). 分権的自己観にもとづく自己形成—青年期のアイデンティティ形成プロセスをテーマに— 追手門学院大学心理学部講演
- 溝上慎一 (2009). 学生にとって役立つFD 京都産業大学FD推進委員会講演
- 溝上慎一 (2009). 英語コアC 鹿児島大学「英語コアC」特別講義
- 溝上慎一 (2009). みんなで「イマドキ大学生」を考える!?!—「ゆとり教育世代」のラベリングを超えて— Learning bar. 東京大学・学びの公開研究会
- 溝上慎一 (2009). 高校における学習・キャリア学習が大学での学びにどう活かせるか 広島県立尾道北高校講演会
- 溝上慎一 (2009). 高校生の進路選択とキャリア形成 熊本県立熊本第一高等学校・キャリアガイダンス
- 溝上慎一 (2009). 大学全入時代に対応した教育方法—学生の学習意欲喚起につながる教育改善— 北九州市立大学国際環境工学部FD研修会講演
- 溝上慎一 (2009). キャリア教育の成功の指標—本事業に対する評価・コメント— 一橋大学現代GP「同窓会と連携する先駆的キャリア教育モデル」シンポジウム
- 溝上慎一 (2009). 意欲的に学び、自分を成長させるための読書とマンガ 創価大学全学読書運動「SBW」特別講演会
- 溝上慎一 (2009). 学生が主体的に学ぶための授業デザイン 明治大学図書館職員向け講習会
- 溝上慎一 (2009). 初年次教育における学習意欲と基礎能力の育成 立教大学経済学部立教GPシンポジウム
- 溝上慎一 (2009). ワダイ生の特徴を分析する 和歌山大学FDフォーラム
- 溝上慎一 (2009). 改めて学生調査データから教育改善を考える 北九州市立大学国際環境工学部FD研修会講演
- 溝上慎一 (2009). 支援の必要な学生タイプはどのような大学生活を過ごしているか—学生4類型から見て— 第31回全国大学メンタルヘルス研究会
- 森田美弥子・高橋靖恵 (2009). 思考・言語カテゴリーの臨床的適用 名古屋ロールシャッハ研究会 2009年度総会
- 明和政子 (2009). 社会的認知の起源を探る—胎児期・新生児期にみる身体マッチング能力 日本赤ちゃん学会第9回学術集会シンポジウム1「胎児期からの運動と社会的認知の発達」
- 明和政子 (2009). ヒトの心が芽ばえるとき—社会的認知の発達と進化的基盤— 第7回ダウン症療育研究会特別講演
- 明和政子 (2009). 早産児の発達 第4回京都大学NICU公開セミナー
- 明和政子 (2009). 母親以外の他者は養育にかかわるか? チンパンジーの事例から 第25回日本霊長類学会学術大会 公開シンポジウム「「母親」—「霊長類学」と「子ども学」のクロスディスカッション」
- 明和政子 (2010). ヒトらしい心とは—心の発達と教育の進化的基盤— 第3回慶應義塾大学・京都大学グローバルCOE共催シンポジウム「子どものこころの発達と教育—最新の研究成果に学ぶ—」
- 明和政子 (2010). 自己認識の発達と進化、感覚価値 モノ学・感覚価値研究会・科学部会総括シンポジウム「多層的な感覚価値モデル」
- 西平直 (2009). 死んでゆく不思議・生まれてくる不思議—子どもたちにどう伝えるか 大谷大学公開講座

- 西平直 (2009). 世阿弥「伝書」のダイナミズム 世阿弥忌セミナー
- 西平直 (2009). 無心の誘惑・無心の強迫 日本宗教学会
- 西平直 (2009). Outline of Zeami's Philosophy of Practice and Expertise "The self, the other and language(2) The Global COE Programme"
- 布井雅人 (2009). 接触時の能動的処理が選好形成に影響する 日本心理学会第 73 回大会ワークショップ「単純接触効果研究の広がり」話題提供
- 布柴靖枝 (2009). 今、家族におきていること 日本小児医科学会 第 11 回「子どもの心」研修会
- 布柴靖枝 (2009). 死と再生のワーク 日本電話相談学会
- Okanda, M., & Itakura, S. (2009). Why do children exhibit a yes bias? -Mechanism of a yes bias- International Conference on access to language and cognitive development
- 大塚結喜 (2009). 高齢者のワーキングメモリ 日本心理学会第 73 回大会ワークショップ「ワーキングメモリの認知的変化を考える」話題提供
- 大山泰宏 (2009). 今、治療枠について再考する 島根県臨床心理学研究会
- 大山泰宏 (2009). 私たち「学生」は変わったか?—解離の時代を生きる—
- 齋木潤 (2009). 文化が注意に与える影響～視覚探索課題による検討～ 日本認知心理学会大会
- 齋木潤 (2009). 視覚記憶：視覚性ワーキングメモリにおける特徴統合と更新を中心に 視覚科学の学際的アプローチに向けて
- 齋木潤 (2009). 視覚性短期記憶における特徴の統合と動的更新 生理学研究所研究会「視知覚研究の融合を目指して — 生理、心理物理、計算論」
- Saito, N. (2010). Becoming cosmopolitan: What can I do as a Japanese to advance American philosophy? アメリカ哲学促進学会
- Saito, N. (2009). Democracy yet to come: Towards the Great Community for the Great Man カラブリア大学における招待講演
- Saito, N. (2009). From meritocracy to aristocracy: Towards a just society for the Great Man イギリス教育哲学会ケンブリッジ支部年次大会
- 齋藤直子 (2009). 「内なる光」と教育：偉人と異人を受容する社会へ 日本教育学会年次大会／開催校企画シンポジウム
- Saito, S. (2009). Working memory research in Japan, UK and Europe: A small scale comparison. ESRC Working Memory Workshop (sponsored by Economic and Social Research Council in the UK)
- 櫻井芳雄 (2009). ブレイン・マシン・インタフェースと神経回路網の再編成 第 24 回神経組織の成長・再生・移植研究会
- 佐藤卓己 (2009). メディアと世論調査 —ファシスト的公共性の視点から— 社会文化学会第 12 回全国大会シンポジウム「メディアと権力」
- 佐藤卓己 (2009). <昭和>の記憶と世論/輿論 日本マス・コミュニケーション学会春季大会 シンポジウム
- 佐藤卓己 (2009). 感情のメディア史—その方法を考える— メディア史研究会 2009 年度研究集会 ミニシンポジウム
- 佐藤卓己 (2009). 大衆文化における断絶性と連続性について 20 世紀メディア史研究所特別研究会 シンポジウム「占領期・大衆文化はどう変わったか」
- 杉本均 (2010). 国際的視点からみた日本の教育 教職免許状更新講習フェスタ講演
- 鈴木晶子 (2009). Der Fuss macht Mass, der Fuss macht Spass Tagung der Gesellschaft für Historische Anthropologie in Zusammenarbeit mit dem Sonderforschungsbereich Kulturen des Performativen und dem Interdisziplinären Zentrum für Historische Anthropologie der Freien Universität Berlin
- 鈴木晶子 (2009). Der Takt als das Affektive. Der Takt in der Affektiven Wissenschaft heute. Was heisst (paedagogischer) Takt?
- 鈴木晶子 (2010). 心の旅路・人生を美しく —教育の詩学から
- 鈴木晶子 (2009). 法人化後の大学とその将来 旧制高校研究会
- 田口真奈 (2009). ICT を活用した大学授業改善 平成 21 年度第 4 回工学部 F D 講演・討論会
- 高橋靖恵 (2009). シンポジウム話題提供：インテーク面接の持ち方 日本臨床心理士養成大学院協議会第 9

回大会年次総会

- 高橋靖恵 (2009). 思春期の子どもの心をはぐくみ、そだてるために—大人と子どもの育ち合い— 福岡県立大学心理教育相談室 公開講演会
- 高橋靖恵 (2009). 青年期のこころとその発達—家族ライフサイクルの視点から— 近畿学生相談研究会 第42回特別例会
- 竹村幸祐 (2009). 日本人の集団主義を支える制度と心: 日米比較実験による検討 日本心理学会第73回大会ワークショップ「社会環境と信頼・協力: 近年の研究の動向と今後の展開」話題提供
- 友永雅己 (2009). チンパンジーからヒトを見る—こころの進化を探る心理学 日本基礎心理学会公開シンポジウム 「こころ」のサイエンス—心理学が解き明かす心のしくみ
- 友永雅己 (2009). チンパンジーからみたこころの進化と発達—比較認知科学という視点 金沢大学創基150年記念「講演会・シンポジウム」シリーズ第2回、『「社会性認識」学際脳科学シンポジウム』、第3回学際科学実験センターシンポジウム
- 友永雅己 (2009). 目は口ほどにものを言う? 視線の比較認知科学 北九州大学文学部特別講演
- 友永雅己 (2009). チンパンジーからヒトを見る 科学夜話 Cafepedia 第22夜
- 友永雅己 (2009). チンパンジーの発達からみた子どものからだと心 第31回子どものからだと心・全国研究会議特別講演
- 友永雅己 (2010). チンパンジーの心を探る サイエンスカフェ・コミュニケーション
- 辻本雅史 (2009). 近世学問のメディア転換—石田梅岩と石門心学 パリ第7大学・国際シンポジウム:近世日本における学びの文化
- 辻本雅史 (2009). 近世学問のメディア転換—石田梅岩と石門心学 国際シンポジウム:近世日本における学びの文化
- 辻本雅史 (2009). 近世日本における儒学の学習と儒教的人間形成 ソウル国際学術会議・東アジア儒教文化圏における書院
- 辻本雅史 (2009). <思想のメディア>史研究の構想 台湾大学日本語文創新国際シンポジウム基調講演
- 辻本雅史 (2009). 17世紀日本の『メディア革命』と江戸文化 台湾大学日本語文学系「簡静恵人文講座」
- 辻本雅史 (2009). 「学びの身体性」に学ぶ—「江戸」の視点による現代教育の相対化 大学生研究フォーラム
- 辻本雅史 江戸儒学の学び—読めない経書をいかに読んだか 黒川古文化研究所文化講演会
- 辻本雅史 (2009). 儒学の教育と武士の人間形成 岡山大学池田文庫絵図展記念講演
- 辻本雅史 (2009). 江戸時代上方庶民の学びと石門心学 心学明誠舎早春セミナー
- 辻本雅史 (2009). 近世京都の教育文化と番組小学校 京都番組小学校企画展記念講演
- 辻本雅史 (2009). 教育の歴史遺産:江戸の「学び」に学ぶ 世界遺産シンポジウム「近世の教育遺産を考える—足利学校・弘道館・閑谷学校—」基調講演
- 内田由紀子 (2009). 漂流する若者たち:日本社会における対人関係の結び方とこころの健康 主催:NPO 法人高槻オレンジの会 後援:高槻市、高槻市教育委員会
- 内田由紀子 (2009). 文化とこころの関係 京都府立盲学校メンタルヘルス職員研修会
- 内田由紀子 (2010). 社会心理学から見た普及活動 平成21年度滋賀県改良普及職員大会
- 魚野翔太 (2010). 広汎性発達障害における動的表情処理の心理・神経メカニズム 日本動物心理学会第151回例会「自閉症研究と比較認知科学の接点」
- 渡邊洋子 (2009.10.7). 成人学習者にとって「学ぶ」とは—成人教育学の視点から
- Yamada, Y. (2009). Narrative approach
- Yamada, Y. (2009). Narrative and learning: From psychological perspective International Conference of Narrative and Learning
- Yamada, Y. (2009). Visual narrative of life cycle and death: Commonality of image drawings across different cultures
- Yamada, Y. (2009). Visual images of life cycle
- 山名淳・(2009). E.ジャック＝ダルクローズに触発された「ヘレラウ新教育」—教育学の方からみてリトミックはなぜ興味深いのか 日本ダルクローズ音楽教育学会第9回大会パネルディスカッションⅢ「リトミックとは何か、その理念とは何か」(2)
- 山名淳 (2009). Reformpädagogik ohne Gartenstadt, Gartenstadt ohne Reformpädagogik: Was haben

Japaner hier in Hellerau erlebt und, was haben sie davon mitgenommen? Symposium
Vision Lebensreform: Lernen von Hellerau(シンポジウム「生活改革のビジョン---ヘレラウから
学ぶ」)

山名淳 (2009). Emotion als Thema der Gedenkstättenpädagogik: Notizen zum Entwurf einer
vergleichenden Untersuchung zwischen Japan und Deutschland. Symposium Happiness,
Emotion, Language: Toward an International Comparative Study (京都大学 GCOE およびベ
ルリン自由大学との共同開催シンポジウム)

山名淳 (2009). 教育哲学者は道徳を教えられるか---道徳の非専門家が「道徳の指導法」を担当すること
について 「総合的道德教育プログラム」全学フォーラム

山名淳 (2009). いじめはなぜ繰り返されるのだろうか---そのメカニズムと最近の傾向を考える 早稲田
塾特別講演

山名淳 (2009). 哲学への権利---教育哲学と哲学教育とのあいだ 京都大学グローバルCOE 「心が活き
るための国際的拠点」指定討論

吉川左紀子 (2009). Inverse Translational Science としての他者感情理解の基礎研究の可能性 日本感情
心理学会第 17 回大会シンポジウム「他者の感情理解のメカニズム---治療ならびに応用に向けて」
講演

吉川左紀子 (2009). 認知心理学のアプローチ 日本心理学会第 73 回大会ワークショップ「カウンセリング
における専門性とは」話題提供

12. 講演

足立幾磨 (2009). FD に関わる大学間ネットワークの意義と課題 第 26 回関東地区大学教育研究会『大学
間連携の「いま」と「これから」』

カール・ベッカー (2009). 21 世紀の危機と日本思想 稲盛環境問題研究班報告

カール・ベッカー (2009). 医療が癒せない病---老病死のこころのケア 第 4 回こころの広場 京都府/京都
大学こころの未来研究センター共同企画

カール・ベッカー (2009). 臨死体験から見る死後の可能性 聖トマス大学日本グリーンケア研究所公開講
座第 5 期『悲嘆について学ぶ』

カール・ベッカー (2009). 教育に求められているもの 京都市立学校教員定期研修会

カール・ベッカー (2009). 浄土の歴史と心理 法然セミナー2009『憧憬---いのちの行く先〜』

カール・ベッカー (2009). 末期の方々の介護者, 医療者の燃え尽き防止について 「末期の方々の介護者,
医療者の燃え尽き防止について」三島地区緩和ケア研究会『生涯研修講座』

カール・ベッカー (2009). 教育に求められているもの 21 年度京都市立学校事務研究大会

カール・ベッカー (2009). International Association of Shin Buddhist Studies Potentials of Buddhism
for Contemporary Grief Care

渥野裕・直井望・柴田実・河井昌彦・岡ノ谷一夫・明和政子 (2010). 乳幼児の脳機能発達---揺らぎを中心
に--- 第 22 回バイオエンジニアリング講演会

林美里 (2009). チンパンジーの発達研究と日々の暮らし 第 19 回市民公開日

井藤美由紀 (2009). グリーフケアを考える---ある父親の日記によせて 第 9 回十和田緩和ケアセミナー

清家 理・Carl Becker (2009). 経済的問題を抱える患者への地域連携によるアプローチの検証 日本医療・
病院管理学会

楠見孝 (2009). 意思決定における個人差と感情 シンポジウム「意思決定・経済行動への認知的アプロ
ーチ」日本認知心理学会第 7 回大会

楠見孝 (2009). 広告における単純接触効果による安心感とノスタルジア 日本広告学会関東部会・消費者
行動学会 チュートリアル・セミナー

楠見孝 (2009). 痛みのメタファーの主観性と間主観性 シンポジウム シンポジウム「メタファーと主観
性」日本英語学会第 27 回大会

桑原知子 (2009). 子どもをわかって---子どもの再発見と大人のこころの成長--- 京都学校教育相談研究大
会

桑原知子・渡部幹・大山泰宏・吉川左紀子・長岡千賀 (2009). カウンセリング対話を科学する (3) カウ
ンセリングにおける専門性とは 日本心理学会第 73 回大会ワークショップ

- 松下佳代 (2009). 大学の科学教育を変える—誰が・何を・どのように?— パネルディスカッション「学士課程における科学教育の未来」指定討論
- 松下佳代 (2010). 大学教育の実践知を共有する—コミュニティ・ネットワーク・コモンズ— 第16回大学教育研究フォーラム・特別講演
- 森田健一 (2009). 学校現場をまなざす心理臨床学的視点 庵我小学校校内研修会
- 森田健一 (2009). 不登校をまなざす心理臨床学的視点 大正小学校校内研修会
- 直井望・渕野裕・柴田実・河井昌彦・岡ノ谷一夫・明和政子 (2010). 乳幼児の音声処理に関与する脳機能の発達研究 第22回バイオエンジニアリング講演会
- 布柴靖枝 (2009). カウンセリングの基礎と実際
- 布柴靖枝 (2009). 職場のメンタルヘルスを考える
- 布柴靖枝 (2009). 学生をエンパワーするための面接法
- 布柴靖枝 (2010). セクシュアル・ハラスメント対応
- 布柴靖枝 (2009). 保育所(園) 職員のメンタルヘルス
- 布柴靖枝 (2009). セクシュアル・ハラスメント・行為者(加害者)の対応とインタビュー方法、問題解決までの流れ 21世紀職業財団, 東京
- 布柴靖枝 (2009). 子どもの心の理解と対応
- 布柴靖枝 (2009). 中年期の発達課題と夫婦・家族関係
- 布柴靖枝 (2009). 事務職員による窓口対応
- 布柴靖枝 (2009). 職場のメンタルヘルス
- 布柴靖枝 (2009). 発達障害学生支援の諸問題・修学・対人関係・就労
- 布柴靖枝 (2009). ボランティア論
- 布柴靖枝 (2009). ストレスをためないコミュニケーション
- 布柴靖枝 (2009). 部下の心を開くコミュニケーション・管理職のための職場のメンタルヘルス
- 布柴靖枝 (2009). 不登校・ひきこもりの子どもを抱える保護者へのカウンセリング
- 布柴靖枝 (2010). 「口の病と心の病」その対処法を学ぶ—臨床心理士の立場から見えること—
Bioprogressive Study Club
- 大塚雄作・足立幾磨 (2009). FDに関わる大学間ネットワークの意義と課題 第26回関東地区大学教育研究会『大学間連携の「いま」と「これから」』
- 尾崎真奈美 (2009). 幸せ発見の心理学 さがまちコンソーシアム大学
- 尾崎真奈美 (2010). インテグラル・ポジティビティ トランスパーソナル心理学・精神医学会基礎研究会
- 佐伯恵里奈 (2009). エクゼクティブ・コントロールにおける音韻的作動記憶の役割 日本心理学会第72回大会小講演, L032
- 齋木潤 (2009). 色字共感覚における文字と色の統合 日本心理学会大会
- 坂井祐円 (2009). 「共感」について考える—看護学校の授業から— 得丸定子研究室「いのち教育」研究会
- 佐藤卓己 (2009). 教養とメディア 朝日 21 関西スクエア懇談会
- 佐藤卓己 (2009). メディア人間・野依秀市から読む日本言論史;『実業之世界』『帝都日日新聞』の射程「20世紀と日本」研究会
- 佐藤卓己 (2009). 輿論と世論 中央電気倶楽部午餐会講演
- 佐藤卓己 (2009). 輿論か世論か—民意とは何か オムロン文化フォーラム (NHK文化センター京都支社)
- 佐藤卓己 (2009). 世論と感情—メディアと公共性の視点から ワークショップ「感情学 affectology の展望」
- 佐藤卓己 (2009). 「テレビの教養の可能性 シンポジウム「東アジアの音と映像」
- 清家理・Carl Becker (2009). 経済的問題を抱える患者への地域連携によるアプローチの検証 日本医療・病院管理学会
- 清家理・Carl Becker (2009). 経済的問題を抱える患者へのMSW 支援機能と地域連携によるアプローチの検証 ファイザーヘルスリサーチフォーラム
- 杉本均 (2010). 日韓の教育改革の行方 日韓公開シンポジウム
- 杉本均 (2010). 21世紀における日本の教育改革—日中学者の視点から— 日中合作本出版記念シンポジウム
- 田口真奈・出口康夫・赤嶺宏介 (2009). 未来のファカルティをどう育てるか—京都大学文学研究科プレ FD

プロジェクトを事例に— 第16回大学教育研究フォーラム小講演

高橋正実・尾崎真奈美 (2009). 叡智とスピリチュアリティ 立命館大学応用人間科学研究科

竹村幸祐 (2009). アメリカの集団主義と日本の集団主義: 集団行動の「タイプ」に見る文化差 奈良大学
社会学部心理学科 教育講演会

Takemura, K. (2009). Being different leads to being connected: On the adaptive function of uniqueness
in open societies

田中正之 (2009). 動物園に行こう—野生動物の研究から見えてくる人間らしさ アスニーセミナー

田中正之 (2009). 動物園での研究と教育 京大サロントーク 第52回

田中正之 (2009). 動物園でチンパンジー研究 総合博物館学術映像博 2009 トークイベント

田中康裕 (2009). 発達障害とユング派心理療法 日本ユング心理学会

田中康裕・妙木浩之 (2009). 臨床場面における夢の扱い方—フロイト派とユング派の異同— 日本ユング
心理学会

田中康裕 (2009). 発達障害は張り子の羊の夢を見るか? 島根大学教育学部教育臨床研究会

東畑開人 (2009). 下着の美学 「寺子屋・衣食住」研究会

Yamada, Y. (2009). Visual narratives of life cycle and death in Japanese, British and French adults
LONDON PROJECT: The quest of narrative methodology for the medical and psychological
support in multiple cultures (Symposium on Narrative Research in Health and Illness)

Yamada, Y. (2009). Image maps of life and the spiritual life cycle. : Japanese, British, Austrian, and
French university students' visual narratives 第13回京都大学国際シンポジウム 2009 学術研
究における映像実践の最前線

吉川左紀子 (2009) 「コミュニケーションの心理学: ことばと声と表情と」 甲賀看護専門学校講演会 (甲賀看護専
門学校, 滋賀県甲賀郡) 2009.8.3

吉川左紀子 (2009) 「こころをつなぐコミュニケーション: ことばと表情の認知科学」 国際高等研究所公開講演会
(国際高等研究所, 京都府精華町) 2009.10.24

吉川左紀子 (2009) 「心理学・脳科学からみた「こころ」を伝えるコミュニケーション」 京都日本語教育センター
秋季講演会 (京都大学, 京都市) 2009.10.31

吉川左紀子 (2009) 「表情とまなざしとこころ: 実証心理学の試み」 第31回夜の森の教室 (法然院, 京都市)
2009.12.11

吉川左紀子 (2009) 「現代社会とこころの変化: 豊かなネットワークで次世代を育む」 第10回京都教育懇話会 (立
命館朱雀キャンパス, 京都市) 2010.2.14

吉川左紀子 (2009) 「こころの未来研究センターの取り組み」 『機能する学際のために』 (九州大学人間環境
学大学院, 福岡市) 2010.3.23

13. 受賞歴

カール・ベッカー (2009). ラルフ・ホンダ特別功労賞 皇太子明仁親王奨学金財団

趙卿我 (2009). 韓国における教育評価の現状と課題—「遂行評価(performance assessment)」を中心に—
京都大学教育学部同窓会 国際賞

本所恵 (2009). スウェーデンの総合制高等学校における教育課程改革—履修方式の転換に焦点をあてて
— 日本カリキュラム学会研究奨励賞

小野文生 (2009). 第6回教育思想史学会奨励賞 教育思想史学会

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・Valsiner J. (2009). 複線径路・等至性モデル—人生径路
の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して 第1回日本質的心理学会 学会賞 優秀理
論論文賞, 5, 255-275.

Takemura, K. (2009). When do North Americans become collectivistic? Cross-cultural experiments on
the effect of intergroup competition on cooperation within groups Canadian Post-Doctoral
Research Fellowships

渡辺創太・中村哲之・藤田和生 (2009). ハトはツェルナー錯視図形に対しヒトと逆傾向の錯視知覚をする
日本動物心理学会第69回大会、大会奨励賞口頭発表部門優秀賞

14. 新聞記事等のメディアからの取材または依頼など

- カール・ベッカー (2009). プリンス・アキヒトの奨学金 ―ハワイと結んだ50年 北海道新聞
- カール・ベッカー (2009). 両陛下とハワイの日系人に恩返しを 京都新聞
- カール・ベッカー (2009). 皇室：奨学金50周年、晩さん会出席 ハワイで両陛下 毎日新聞
- カール・ベッカー (2009). 日曜の朝、心のお洗濯 一心寺がおくる”ちょっといい話” 朝日放送
- カール・ベッカー (2009). 日曜の朝、心のお洗濯 一心寺がおくる”ちょっといい話” 朝日放送
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第1回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第2回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第3回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第4回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第5回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第6回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第7回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第8回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第9回 日本経済新聞
- 岩井八郎 (2009). 「変わるライフコースと人生設計」第10回 日本経済新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅1 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅2 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅3 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅4 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅5 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅6 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅7 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅8 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅9 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅10 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅11 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 身体知の旅12 京都新聞
- 鎌田東二 (2009). 新聞時評 毎日新聞
- 鎌田東二 (2009). 新聞時評 毎日新聞
- 鎌田東二 (2009). 新聞時評 毎日新聞
- 鎌田東二 (2009). 萩原朔太郎1 中外日報
- 鎌田東二 (2009). 萩原朔太郎2 中外日報
- 小山静子 (2009). 本を語る 京都新聞
- Koyasu, M. (2010). El japonés Masuo Koyasu, de visita en Zaragoza, lidera un programa internacional de investigación sobre la felicidad.
- Koyasu, M. (2010). Los maestros no deberían olvidar que antes fueron niños.
- 楠見孝 (2009). デジャヴはどうして起こるのか？ 読売新聞関西発もの知り百科2 HP
- 楠見孝 (2009). デジャヴはなぜ起きる 毎日小学生新聞
- 桑原知子 (2009). 人生の選択を語る 読売新聞夕刊
- 溝上慎一 (2009). 課題に取り組み、ライフを充実させる学生が成長 学研・進学情報42
- 溝上慎一 (2009). 京都大学・電通育英会 学生の何が成長しているのか？ 大学生研究フォーラムを開く 教育学術新聞
- 溝上慎一 (2009). 携帯・ICカード 大学が積極活用 朝日新聞
- 溝上慎一 (2009). 学習時間を短縮せよー学習者中心の大学に必要な講義と演習 教育学術新聞
- 明和政子 (2009). 現代のことば 「共感力」が育つ場 京都新聞
- 明和政子 (2009). 現代のことば 母性を支える 京都新聞
- 明和政子 (2009). 現代のことば 他人の子どもを育てる 京都新聞
- 明和政子 (2010). 現代のことば ほどよい教育 京都新聞

明和政子 (2010). 現代のことば こころの発達と環境 京都新聞
 西平直 (2010). 『世阿弥の稽古哲学』出版 読売新聞
 布柴靖枝 (2009). キャリア発達学生支援 河北新報
 苧阪満里子・苧阪直行 (2009). 記憶脳を刺激する！最新科学ワザ ためしてガッテン(NHK)
 櫻井芳雄 (2009). 心の働き 実験で解明 老化脳は鍛えられる 京大院・櫻井芳雄教授 朝日新聞
 櫻井芳雄 (2009). 「脳信号で操作」実用へ前進 患者の生活支援 ロボット連動も 日本経済新聞
 櫻井芳雄 (2009). BMI 脳科学の最前線 <高齢脳> 学習能力衰えない 心理学からのアプローチ 読売新聞
 櫻井芳雄 (2010). 脳の信号を読み取って車椅子や身体を動かせる時代が来る 月刊ビジネスアスキー
 佐藤卓己 (2009). 新型インフルエンザ 熟慮要する危機報道 朝日新聞 (東京本社版朝刊)
 佐藤卓己 (2009). メディア時評 報道も “世論” 批判する勇気を 民間放送
 佐藤卓己 (2009). 総選挙の選択基準 輿論か世論か見極めを 中国新聞ほか (共同通信社配信)
 佐藤卓己 (2009). “失望” ある政治、認めよ 毎日新聞
 佐藤卓己 (2009). 民主党大勝の輿論と世論 産経新聞夕刊
 佐藤卓己 (2009). <青年の主張> の文化史 信濃毎日新聞 月曜評論
 佐藤卓己 (2009). 選挙でのメディアの責任 信濃毎日新聞 月曜評論
 佐藤卓己 (2009). “国家は悪で国民は善” の呪縛 信濃毎日新聞 月曜評論
 佐藤卓己 (2009). テレビの生き残り 史料化で 読売新聞 メディア欄
 佐藤卓己 (2009). 女子アナは “巫女” の残影か 読売新聞 メディア欄
 佐藤卓己 (2010). 国民読書年の “文字文化” 読売新聞 メディア欄
 佐藤卓己 (2010). 「電子黒板」より生身の教員 読売新聞 メディア欄
 佐藤卓己 (2009). 当時の政治的背景究明を 朝日新聞 横浜事件再審判決記事コメント
 佐藤卓己 (2009). 新聞は責任ある “教養メディア” たれ 朝日新聞 関西スクエア
 佐藤卓己 (2009). 新型インフル 正確かつ科学的な報道期待 読売新聞 東京本社記事インタビュー
 佐藤卓己 (2009). 視座5 世論に流される政治 京都新聞 09 衆院選前インタビュー 何が歴史的か
 佐藤卓己 (2009). <予言成就>期待と権威失墜の危険性 京都新聞 09 衆院選後インタビュー
 佐藤卓己・佐々木俊尚・岡留安則 (2009). 鼎談 IT時代のジャーナリズム 京都大学新聞
 鈴木晶子 (2009). Eine deutsch-japanische Studie untersucht Gluecks-Inszenierungen bei traditionellen Familienfesten Tagesspiegel ドイツ全国紙 学術・科学欄 全面1
 田中正之 (2009). チンパンジーに勉強部屋—京大と協定 施設改修 朝日新聞
 田中正之 (2009). チンパンジーがコンピューター学習—近く深く類人猿舎進化 京都新聞
 田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強—京都市動物園 公開しながら研究 産経新聞
 田中正之 (2009). 歓迎チンパンジー—京大との研究施設公開 毎日新聞
 田中正之 (2009). チンパンジーの知性感じて—京都市動物園と京大 共同事業 読売新聞
 田中正之 (2009). 窓 日経新聞
 田中正之 (2009). 京大と共同研究進む京都市動物園—これからの教育・研究拠点に 京大学生新聞
 田中正之 (2009). チンパンジー、人間みたい？—気兼ね、威嚇 学習にも個性 京都新聞
 田中正之 (2009). チンパンジー パネルで勉強 神戸新聞
 田中正之 (2009). 数字の大小 しっかり勉強 京都市動物園 北日本新聞
 田中正之 (2009). 勉強めぐり個性発揮 チンパンジーまるで人間 岐阜新聞
 田中正之 (2009). チンパンジーの学習公開 4頭に個性 習熟度に差 高知新聞
 田中正之 (2009). チンパンジー学びの風景 京都市動物園公開 北陸中日新聞
 田中正之 (2009). 京都市動物園 チンパンジーの学習公開 四国新聞
 田中正之 (2009). チンパンジーの授業参観 京都市動物園タッチパネル数字学習を公開 愛媛新聞
 田中正之 (2009). パネルで数字お勉強 チンパンジーの様子公開 徳島新聞
 田中正之 (2009). パネルの前で個性豊かに チンパンジーが数字学習 長崎新聞
 田中正之 (2009). 数字の学習を公開 京都市動物園チンパンジー4頭 熊本日日新聞
 田中正之 (2009). パネル使い 数字学習 京都市動物園 琉球新報
 田中正之 (2009). 個性豊か チンパンジーの学習ぶり SANKEI EXPRESS
 田中正之 (2009). Kyoto zoo chimps no chumps at simple math The Japan Times

- 田中正之 (2009). 岡崎チンパンジー日記(1)―数字学習「達成の喜び」 京都新聞
- 田中正之 (2009). 岡崎チンパンジー日記(2)―顔にも味わい、繁殖期待 京都新聞
- 田中正之 (2009). 岡崎チンパンジー日記(3)―群れの力関係 学習に影響 京都新聞
- 田中正之 (2009). 京のまち「特集コーナー 動物園にチンパンジーがやってきた」 KBS 京都
- 田中正之 (2009). FNN スーパーニュース アンカー 関西テレビ
- 田中正之 (2009). 京都市動物園・チンパンジー舎 NPO の大賞受賞 「研究公開」高い評価 京都新聞
- 田中正之 (2009). 情報交差点 動物園へ行ってみよう チンパンジーは数字に強い ナショナルジオグラフィック 2010年2月号
- 友永雅己 (2009). ヒトの「心」の謎を、チンパンジーとともに探る 京都大学理学研究科・理学部広報誌編集委員会(編) わくわく理学―夢ふくらむ京大理学部, 76-77.
- 友永雅己 (2009). 「明日へ―霊長類とともに」第2回 2009年04月17日読売新聞夕刊(関西版)第2面
- 辻本雅史 (2009). 原風景 愛媛新聞「道標 ふるさと通信」
- 辻本雅史 (2009). タイムマシン 愛媛新聞「道標 ふるさと通信」
- 内田由紀子 (2010). 尊敬できる普及員は―説得力・行動力を重視 日本農業新聞第1面
- 山本真也・田中正之 (2009). チンパンジーも手助け 要求に応え道具渡す 中日新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 道具欲しい? どうぞ使って チンパンジー義理堅く 産経新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). チンパンジーおせっかいなし 助けは求められた時だけ 朝日新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 褒美なくてもお手伝い チンパンジーの利他行動 京都新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 仲間がジュース ストロウどうぞ 求め応じ手助け 日経新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 助け合うチンパンジー 道具を受け渡し 毎日新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 「道具貸して」「どうぞ」チンパンジー無償の愛 読売新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). チンパンジー 求めに応じ道具手渡し 徳島新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). チンパンジー 仲間と助け合い 中国新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 仲間の求めに、道具手渡し チンパンジーで確認 京大 岐阜新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 求めに応じ道具手渡し 京都大准教授ら チンパンジーで確認 山陽新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). チンパンジー、求めに応じ手渡し「ステッキどうぞ」 佐賀新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). チンパンジー 道具貸して どうぞ 求めに応じ助け合い 高知新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 求めに応じ道具手渡し チンパンジー実験 利他行動解明に光 新潟日報
- 山本真也・田中正之 (2009). チンパンジー 見返りなくても手助け 日刊工業新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 「それ、とって」「あらっ、いいわよ」手助けするチンパンジー 赤旗
- 山本真也・田中正之 (2009). 求めに応じ、道具「はい」京大チーム チンパンジーの「利他行動」確認 南日本新聞
- 山本真也・田中正之 (2009). 利他行動の起源に迫る チンパンジー 要求に応じて手助け 見返りが無くても継続 京大学生新聞

15. 自身の著作物への書評

- 木村元 (2009). 小山静子・太田素子編『「育つ・学ぶ」の社会史』 教育社会学研究, 85, 137-138.
- 佐藤卓己 (2009). 「世論」に流されず、「輿論」を再興せよ 第三文明, 5月号, 16-18.
- 佐藤卓己 (2009). ため息の歴史家になりたい 潮, 5月号, 56-57.
- 田嶋一 (2009). 小山静子・太田素子編『「育つ・学ぶ」の社会史』 教育学研究, 76, 248-249.

16. 各種メディアでの研究成果の公表など

- 松木邦裕 (2009). 連載 精神分析臨床家の流儀 5.語られることの中の現実と空想 精神療法 35, 金剛出版, 235-240.
- 松木邦裕 (2009). 6.現実提示は有用か: 技法上の問題 精神療法 35, 金剛出版, 351-355.
- 松木邦裕 (2009). 7.分析と統合 精神療法 35, 金剛出版, 511-516.
- 松木邦裕 (2009). 8.身だしなみ 精神療法 35, 金剛出版, 631-635.
- 松木邦裕 (2009). 9.精神分析の短期化と簡便化 精神療法 35, 金剛出版, 771-775.
- Mattig, R. (2010). Exploring Happiness in Experiential Education

明和政子 (2009). 早産児 心の発達探る 京都新聞

Myowa-Yamakoshi, M. (2010). Cognition: Emulative learning The Museum of Comparative Anthropogeny (MOCA)

櫻井芳雄 (2009). 念力が使える!脳と機械をつなぐ技術 NHK「サイエンス ZERO」

佐藤卓己 (2009). 活字がニュー・メディアになる未来 考える人, 30, 74-75.

田中正之 (2009). チンパンジーの学習公開 パネルの前で個性豊かに 共同通信 47news

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-4 頭が共同生活 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-群れ飼育で知性を研究 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-4 頭の素顔を紹介 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-動物園の環境に慣れました 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-お勉強が始まりました! 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-お勉強、進んでますかぁ? 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-全員お勉強が大好き! 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-お勉強がしたいなあ... 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-4 に大苦戦中... 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-今日は調子がいいみたい♪ 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-コイコの暇つぶし 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-ヨウコとスズミの「補習」 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-できる男!? タカシ 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-突然の大ゲンカ! 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-スズミの誕生日 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-勉強時間の終わりには・・・ 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-かなり差がついてきた? 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-それぞれ個性がありまして 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-気分転換も大事 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-勉強の秋?やる気満々! 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-なくてはならない勉強時間 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-2頭はライバル? 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-横取りはひどいよ... 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-僕たちも勉強してます! 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-教育的指導!? 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-「4の壁」再び 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-微妙な力関係 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-さようなら ヨウコ 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-3頭になった勉強部屋 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-若い子には勝てない...? 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-勉強部屋に体重計を設置 読売新聞オンライン

田中正之 (2009). チンパンジーのお勉強-勉強時間は長すぎてもダメ? 読売新聞オンライン

辻本雅史 (2009). 教育を「江戸」から考える NHK ラジオ第二放送「こころをよむ」講座 13 回担当、演

山本真也・田中正之 (2009). チンパンジー、要求あれば手助けも＝「ストローどうぞ」－実験で解明・京大霊長類研 時事ドットコム

山本真也・田中正之 (2009). チンパンジーが「利他行動」 求めに応じ道具を手渡し 共同通信 47news

17. 社会的貢献等 (教員に限定)

足立幾磨 動物心理学会編集幹事

金子勉 関西教育行政学会理事

河崎美保 (2009). 京都市総合教育センター 子どもがわかったと思う瞬間—算数科の授業研究を通して—
京都市小学校教育心理研究会第 2 回水曜講座講師 (2010.1.26)、犬山市立楽田小学校 犬山市立楽

田小学校現職教育研究協議会指導・助言者（2010.2.2）

川崎良孝 (2009). 日本図書館研究会理事長、Shanghai International Library Forum 国際企画委員

駒込武 (2009). 教育史学会理事・機関誌編集委員・事務局、日本台湾学会理事・機関誌編集委員・大会シンポジウム企画委員

子安増生 (2009). 日本発達心理学会理事長、社団法人臨床時発達心理士認定運営機構理事長、日本心理学会諸学会連合監事・理事、日本学術会議 21 期連携会員（心理学・教育学委員会）

楠見孝 (2009). 日本学術振興会・科研費第 1 段審査委員、日本教育心理学会常任編集委員、日本認知心理学会理事、京都市研究開発学校運営指導委員会委員

松本邦裕 (2009). 日本精神分析学会会長、日本精神分析協会教育研修委員長、精神分析インスティテュート運営委員、福岡精神分析センター・センター長

松下佳代 日本教育学会理事、日本教育方法学会理事、日本カリキュラム学会理事・学会誌編集委員、教育目標・評価学会理事、大学教育学会理事・学会誌編集委員、学校図書算数教科書著作者、東京大学教養学部外部評価委員、日本学術振興会科研費第 1 段審査委員、質の高い大学教育推進プログラム審査委員、大学設置分科会専門委員会委員

明和政子 独立行政法人 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業（ERATO 型）浅田共創知能システムプロジェクト研究推進委員 独立行政法人 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業（ERATO 型）岡ノ谷情動情報発達グループリーダー

永田素彦 日本質的心理学会常任理事 科学技術社会論学会理事

西岡加名恵(2009). 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループ委員

大倉得史 日本質的心理学会研究交流委員会委員

荻原直行 日本学術会議 20-21 期会員（心理学・教育学委員会「脳と意識」分科会委員長、科学者委員会委員、地区会議代表幹事、近畿地区代表幹事、学術体制分科会委員）、文部科学省（科学技術・学術審議会・脳科学委員会委員、脳科学研究推進懇談会委員、脳科学研究戦略推進プログラム委員）、Frontiers in Human Neuroscience (Review Editorial Board)、日本心理学会専門別代議員、日本学術振興会・科研費第 2 段審査委員、日本ワーキングメモリ学会会長、国際高等研究所・研究プロジェクト（科学技術文化）研究員、関西心理学会顧問、Member, European Research Council (ERC) SH4 Funding Review Panel（ヨーロッパ研究機構 SH4（実験心理学）評価委員）、日本理論心理学会第 55 回大会委員長

大塚雄作 日本教育心理学会（理事・常任編集委員）、大学教育学会理事、大学評価・学位授与機構（大学機関別認証評価委員・短期大学機関別認証評価委員・学位授与教育学専門委員）、ISO/TC232（人材育成と非公式教育サービス）国内審議委員会委員、最高裁判所家庭裁判所調査官試験委員会臨時委員、財団法人短期大学基準協会評議員、財団法人電通育英会奨学生選考委員、財団法人大学コンソーシアム京都 FD フォーラム企画検討委員、特定非営利活動法人実務能力認定機構理事

大山泰宏 日本臨床心理士会総合企画委員会委員、「きょうと絵画・絵日記・ポスター」分析監修

齋木潤 日本心理学会編集委員、日本基礎心理学会編集委員、日本認知科学会常任運営委員、日本認知心理学会国際交流委員、Psychologia 編集委員

櫻井芳雄 (2009). 産業技術総合研究所評価委員会委員および委員長、高度通信・放送研究開発委託研究評価委員会委員、バイオニック医療機器分野神経刺激装置開発ワーキンググループ委員、日本学術振興会科学研究費審査委員、高等学校での脳研究の紹介など

佐藤卓己 日本マス・コミュニケーション学会理事（2009 年 6 月まで）、国際日本文化研究交流財団・留学生事業審査会委員、朝日新聞社大阪本社関西スクエア幹事、日本放送協会アーカイブス研究実行委員会委員

杉本均 日本国際協力事業団講義、アジア教育研究会主宰

鈴木晶子 第 20・21 期・日本学術会議第一部会員、日本学術会議・心理学・教育学委員会「心と身体から教育を考える分科会」委員長、日本学術会議・科学と社会委員会「科学力増進分科会」副委員長、日本学術会議「環境とリスク」委員会委員、日本学術会議「医学教育委員会」委員、教育哲学会理事、教育思想史学会理事、ドイツ文化研究所評議員、京都市社会教育委員、日本学術振興会科学研究費審査委員

高橋靖恵 平成 16 年 4 月～現在 日本家族心理学会理事 平成 16 年 10 月～現在 日本青年心理学会学会

誌編集委員 平成 21 年 4 月～日本家族心理学会常任編集委員

高見茂 (2009). 関西教育行政学会会長、日本教育行政学会理事、日本教育経営学会紀要編集委員、京都府まなび教育推進プラン検討会議委員、(有) 関西教育考学技術顧問

田中正之 (2009). 日本霊長類学会学会誌「霊長類研究」編集委員、「動物園大好き市民会議」実行委員会委員

田中毎実 (2009). 関西地区FD連絡協議会代表幹事校・代表、日本学術会議連携会員、日本学術振興会・科研費第二段審査委員、教育哲学会常任理事・機関誌編集委員長、大学教育学会常任理事

辻本雅史 (2009). 日本思想史学会会長、教育史学会事務局長、関西教育学会会長、日本学術会議連携会員(心理学教育学部会)、(社) 心学明誠舎理事

渡邊洋子 (2009). 医学教育専門家育成検討委員会委員 (日本医学教育学会)、京都府生涯学習審議会委員、滋賀県人権施策推進審議会委員

やまだようこ 日本学術会議連携会員 (心理・教育分科会)、日本質的心理学会常任理事、日本発達心理学会理事、日本心理学会学会誌編集委員、日本心理学会専門代議員、日本質的心理学会学会誌編集委員、京都大学学術出版会理事

山名淳 (2009). 教育哲学会編集委員、教育哲学会会計監査、教育思想史学会理事、教育思想史学会編集委員、教育史学会編集委員

吉川左紀子 (2009) 日本学術会議 21 期連携会員(心理学・教育学委員会) 日本認知心理学会理事 日本基礎心理学会理事 国際高等研究所企画委員 Psychologia:International Journal of Psychological Sciences Editor

18. その他

赤沢真世 (2009). 京都市立高倉小学校との授業改善にむけた共同研究に参加

カール・ベッカー (2009). 心は元気か 教委連だより (京都府市町村教育委員会連合会) 147, 1-19.

カール・ベッカー・村上和雄 (2009). 死を超えるには死んでもいいと思うものに会えること (生命のメッセージ) 到知 1 月, 102-108.

畑野快 (2010). プロセス・パフォーマンスとアイデンティティとの関連 第 16 回大学教育研究フォーラム

隼瀬悠里 (2009). フィンランドの教員養成の理論的背景へのアプローチ 第 29 回アジア教育研究会

広瀬悠三 (2009). カントの地理教育—自然地理学と教育学の邂逅— 京都大学自然地理研究会第 59 回懇話会

入江尚子・唐沢孝一・島田将喜・渡辺創太 (2009). 遊び研究を遊ぶ—「動物遊び科学」への道標 日本動物心理学会第 69 回大会ワークショップ 発表者 4 は企画・司会を担当

井谷信彦 (印刷中). 図書紹介: 小川博久・岩田蓮子著『子どもの「居場所」を求めて 子ども集団の連帯性と規範形成』 教育哲学研究, 101

井藤美由紀 (2009). 死をめぐる知恵をもとめて 人環フォーラム, 25, 46-47.

角野善宏 浜本論文へのコメント 神戸女学院大学

角野善宏 (2009). 「発達障害」と心理臨床 京大心理臨床シリーズ 7 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏 (編)

角野善宏 (2009). 「身体の病と心理臨床—遺伝子の次元から考える」京大心理臨床シリーズ 8 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編)

角野善宏 (2009). 「心理臨床関係における身体」京大心理臨床シリーズ 9 伊藤良子・大山泰宏・角野善宏 (編)

近藤 (有田) 恵・大石高典・内田由紀子・平石界 (2009). 研究者のウェルビーイング—対人関係がパフォーマンスと精神健康に与える影響 京都大学文学研究科グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点 2008 年度研究成果報告会

Koyasu, M. (2009). Three components of happiness: Synthesising a sense of competence, a vital sense of life, and a sense of accomplishment. The third International Symposium between the Institute of Education, University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University. Happiness and Personal Growth: Symposium between Free University of Berlin and Kyoto University. Happiness, Emotion, and Language: Toward an International Comparative Study.

Koyasu, M. (2010). Development of understanding another's cognition and emotion in young children

Symposium between Free University of Berlin and Kyoto University. Happiness, Emotion, and Language: Toward an International Comparative Study.

- 子安増生 (2010). ラウンドテーブル企画「批判的思考力を育てる—学士力、ジェネリックスキルの認知的基盤—」: 司会者 第16回大学研究フォーラム (京都大学高等教育研究開発推進センター主催).
- 松下佳代 (2009). 大学教育のネットワーク—日本と世界—素粒子論研究 (電子版), 31-36.
- 松下佳代 (2010). どうなる? 指導要録の改定 数学教室, 56, 86-87.
- 溝上慎一 (2009). 小論文問題 現代大学生論 学研・アンカー
- Morimoto, Y., Watabe, M., & Kusumi, T. (2009). When people depend punishment over rewarding: Distrustful people tend to depend punishment under ceratinty, while trustful people under uncertainty. Hokkaido University International Symposium Socio-Ecological Approaches to Cultural and Social Psychological Processes.
- Morimoto, Y., Watabe, M., & Kusumi, T. (2009). Effects of trust on sanctioning behavior and evaluating self-fairness: Warning and Revenge. Waseda University International Young Scholars' Conference Political Economy of Institutions and Expectations I
- 長岡千賀 (2009). 2者対話における同調性: 対話の「間」や身体動作を指標とした検討 日本心理学会第73回大会ワークショップ「比較認知発達神経科学ワークショップ—協力と同調行動: 協力を促す非言語コミュニケーションの進化的基盤—」
- 長岡千賀 (2009). 心理臨床面接におけるカウンセラーの瞬目 日本心理学会第73回大会ワークショップ「カウンセリング対話を科学する(3)—カウンセリングにおける専門性とは—」
- 西嶋雅樹 (2009). 2008年度利用者統計報告 甲南大学学生相談室紀要, 17, 63-71.
- 及川恵 (2009). 卒業時学生調査の結果-心理的適応に焦点を当てた検討 京都大学高等教育研究開発推進センター 第80回公開研究会
- 及川恵 (2009). 調査報告 工学部4回生学生実態調査の概要 第5回工学部教育シンポジウム
- 及川恵 (印刷中). 公開研究会 京都大学高等教育叢書, 28
- 樋浦郷子 (2009). 神宮皇学館と 朝鮮 アジア教育史学会秋季例会
- Okumura, Y, Siegal, M, & Itakura, S (2009). Bilingual advantage of conversational understanding: A comparison between English-Japanese bilingual children and Japanese monolingual children. 5th International Inuyama Comparative Social Cognition Symposium
- 小野加奈子 (2010). 戦前期女子ミッション・スクールにおけるマナーの教育に関する一考察—神戸女学院を中心として— 教育史フォーラム・京都 (口頭発表)
- 大塚雄作・及川恵 (印刷中). 研究ワーキンググループ 京都大学高等教育叢書, 28
- Saito, N. (2010). Becoming cosmopolitan, achieving happiness: philosophy as translation グローバル COE 国際会議
- Saito, N. (2009). Stanley Cavell and the education of grownups: American transcendentalism and ordinary language philosophy 生存科学研究所研究会
- 齊藤智 (2009). 解説 湯澤正通・湯澤美紀 (訳) ワーキングメモリと学習指導 北大路書房 (Gathercole, S. E., & Alloway, T. P. (2008). Working memory and learning. London: Sage Publications), 109-116.
- 齊藤智 高齢者における長期記憶検索とワーキングメモリ—学術論文へのコメント— 心理学評論, 52, 287-290.
- 鮫島輝美・竹内みちる・西山直子 (2010). 介護における「負担」観から新たな価値観の創造に向けて 京都大学グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」大学院生主体課題探求・討論 研究開発コロキウム 平成21年度 研究成果報告書, 106-115.
- 佐藤卓己 (2009). 思い出の中公新書 中公新書の森 2000点のヴィリジアン, 66
- 佐藤卓己 (2009). 閉塞社会とメディア 第22回言論の自由を考える5・3集会 (朝日新聞社労働組合) パネル討議
- 佐藤卓己・川島真 (2009). 対談「戦後、日本の歴史認識はいかにつくられたのか?」 JUNKU トークセッション
- 佐藤卓己・加藤秀俊・佐伯順子・柴内康文 (2009). 「メディアの生成—聖俗と社会関係資本から考える」 司会・討論 「心が活きる教育のための国際拠点」 グローバル COE ワークショップ

- 佐藤卓己 (2009). メディアと世論 桐光学園 大学訪問授業
- 佐藤卓己 (2009). 輿論か世論か：メディア史からの問い 学問発見講座
- 佐藤卓己 (2009). NHK青年の主張における幸福感の変容 「知」の階 (きざはし) Anima ゼミナール
- 柴原真知子 (2010). ロンドン大学教育研究所医療者教修士課程 (Master of Arts in Clinical Education)
受講者へのインタビュー記録 京都大学生涯教育学・図書館学研究, 9
- 高柳充利 (2009). 第 19 回大会の感想 教育思想史学会 NEWSLETTER, 47, 6-7.
- 高柳充利 (in press). "Voices from a Site of International Understanding and Interdisciplinary Exchanges: Post-conference Interviews with Two Japanese Graduate Students at the Institute of Education, "The Event, Writing and the Self: Walter Benjamin's Language Theory. " "Proceedings of the 3rd International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University (Japan) and the Institute of Education, University of London (UK) Ha"3rd International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University and the Institute of Education, University of London
- Takeuchi, K. (2009). How to narrate the transmission of traditional Japanese dance Symposium on Narrative Research in Health and Illness.
- 竹家一美・西山直子・竹内みちる・鮫島輝美・竹内一真 (2010). 相互性としてのケア -かわりが育む家族, 教育, 医療のナラティブ 京都大学グローバル COE 「心が活きる教育のための国際的拠点」大学院生主体課題探求・討論 研究開発コロキウム 平成 21 年度 研究成果報告書
- 田中正之 (2009). 洛書「研究をとりまく多くの目」 京大広報, 648, 2985
- 東畑開人・内藤みちよ・長崎励朗・中藤信哉・渡辺潔・國崎貴弘 (2009). 臨床フィールドワークを用いた心理臨床学的研究 研究開発コロキウム平成 20 年度研究成果報告書, 132-145.
- 辻 敦子 (2009). "The Event, Writing and the Self: Walter Benjamin's Language Theory. " "3rd International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University and the Institute of Education, University of London"
- 内藤みちよ 「当事者ととともに作るグループの実施報告～うつの当事者のためのグループの試み～」 立命館大学心理・教育相談センター (平成 21 年度) 年報, 8-8.
- 渡辺創太・入江尚子・唐沢孝一・島田将喜 (2009). 遊び研究を遊ぶ-「動物遊び科学」への道標 動物心理学研究 会報にて報告, 59, 219-220.
- 山名淳 (2009). 訳者解題 (K・P.ホルン「教員養成と一般教育科学」) 教育哲学研究, 100, 15-19.
- 山名淳・岡部美香・西村拓生 (2009). はじめにー100 号記念特別号にあたって 教育哲学研究 (100 号記念特別号), 5-8.
- 安田裕子 (2009). Narratives of women who experienced infertility treatment: From the quest story for having children LONDON PROJECT: The quest of narrative methodology for the medical and psychological support in multiple cultures

資料

ロゴマークについて

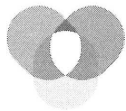


本拠点のテーマである、有能感・達成感・生命感が合わさって幸福感（心が活きる状態）が生まれる様子を、3つの色が重なり合い中心に白い空間が生まれることで表現しています。

このデザインは、京都大学学術情報メディアセンター客員教授奥村昭夫先生によるものです。奥村昭夫先生は、ロート製薬・ディアモール大阪シンボルマーク、グリコのCI、グリコ・月桂冠・田辺製薬・牛乳石鹸・近鉄百貨店のパッケージデザインなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。

<http://www.okumura-akio.com/>

About Our Logo



The white part of our COE project logo indicates how a sense of happiness or revitalizing conditions for hearts and minds is formed when three themes of our project, a sense of competence (capability), a sense of accomplishment, and a vital sense of life overlap.

This design was created by a visiting professor, Akio Okumura, Academic Center for Computing and Media Studies, Kyoto University. Prof. Okumura is a well-known graphic designer who created a number of designs such as symbol marks for Rohto Pharmaceutical Co., Ltd., and Diamor Osaka, CI Mark of Glico, and various package designs for Glico, Gekkeikan, Tanabe Seiyaku Co., Ltd., Gyunyu Sekken, and Kintestu Department Store.

For further information on Prof. Okumura, please refer to
<http://www.okumura-akio.com/>

グローバルCOEニュース

21年度研究開発コロキアムを開講します 今年度のGCOEメンバー登録を行います

◆人材育成経費の公募採択結果公表

海外留学資金(4人)

大学院生養成プログラム研究費(22人)

研究開発コロキアム(10人):次項参照

詳細は <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/> (学内専用ページ) 参照

◆研究開発コロキアム:GCOEからは10の授業を開講

赤上 裕幸

越境する文化政策

黄 儒芬

"アジア・南米・アフリカにおける教育の機会均等に関する研究
—比較教育学的アプローチによる理論と実践の考察—"

勝原 摩耶

情動脳とワーキングメモリの実行制御系との関連

桐村 豪文

実践を支える教育行政制度の可能性と限界(2)

黒田真由美

ビデオ観察とナラティヴ分析の方法論

坂井 祐円

"人間形成における超越性の問題についての臨床教育学的研究
—自己変容・ケア・関係性—"

鮫島 輝美

介護における「負担」観から新たな価値観の創造に向けて

竹家 一美

"相互性としてのケア—かわりが育む家族、教育、医療のナラティヴ—"

野口 素子

"感情表出が受け手の行動プロセスに及ぼす影響—感情の社会的機能に着目して—"

藤井 真樹

"関係発達研究にかかると「間主観性」概念の現状と可能性—子どもの自己形成過程における意味に着目して—"

※シラバスなど、詳細は教務掛窓口へ

◆21年度メンバー登録開始

まもなく今年度のグローバルCOEのメンバー登録を開始します。

●**拠点の指導教員**が院生、PDほかの人を登録するシステムです。

●メンバーに登録されると、グローバルCOEの資金によるメリットが受けられます。具体的には、人材育成経費応募、拠点が購入するオンライン・ジャーナルの利用、同じくSPSSなどの統計パッケージの利用などが該当します。

●登録された院生、PDメンバーには、年度末の**成果報告義務**があります。

●20年度の登録メンバーに、間もなく20年度全体の成果報告をお願いします。

グローバルCOEニュース

外国語論文校閲費補助制度がはじまりました 講演、シンポジウムが順次開催されます

◆外国語論文校閲費補助費

拠点のメンバーに登録された大学院学生(修士課程または博士課程、日本学術振興会特別研究員DCを含む)を対象に公募。10人程度。1件5万円以内(実費)。
詳細は <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/> (学内専用ページ) 参照

◆第4回グローバルCOE共催国際シンポジウム「ロンドン・プロジェクト—医療と心理支援の多文化ナラティヴ方法の探求」(ユニットC)

日程:2009年6月29日(月)~7月3日(金)

場所:英国ロンドン(ユニヴァーシティ・カレッジほか)

講演者:日英の講演者多数

◆Kyoto-Lancaster Joint International Symposium on Psychological Science: New Directions of Memory Research (Unit A)

日時:2009年7月24日(金)10時20分~17時10分

場所:京都大学百周年時計台記念館2F 国際交流ホールII 参加自由

講演者:Randall Engle, Alex Sandham, Coral Dando, Tom Ormerod, Mark Howe, Naoyuki Osaka, Kazuo Fujita, Jun Saiki, & Satoru Saito.

◆第3回京都大学大学院教育学研究科・ロンドン大学教育学研究所合同国際会議(ユニットC)

日程:2009年9月21日(月)~22日(火)[予定]

場所:英国ロンドン大学教育学研究所(Institute of Education, University of London)
参加者:拠点の博士課程大学院学生3名ほか、日英の講演者多数。

◆教育学部本館耐震工事

2009年8月~2010年3月の間、教育学部本館は耐震工事に入ります。グローバルCOEの活動に特に変更はありません。ただし、この間の場所のポスター掲示はお休みします。必要なお知らせは;
<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe> にて。

平成 21 年度活動報告書「心が活きる教育のための国際的拠点」

発行者：子安 増生（グローバル COE 拠点リーダー）

刊行年月：平成 22 年 5 月

印刷会社：株式会社 北斗プリント社

連絡先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科・子安 増生

電話・ファックス 075-753-3063

電子メール HGB03675@nifty.com
